

はち まん

八幡遺跡

都城裁判所合同庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

宮崎県埋蔵文化財センター

は ち ま ん

八幡遺跡

都城裁判所合同庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

宮崎県埋蔵文化財センター



八幡遺跡全景（南より）

都城領主館跡(現 明道小学校)より北方(現 上町・松元町方面)を望む。
遺跡の南北を限る道路は、それぞれ桜馬場(南側)・虹馬場(北側)と
称し、近世の町割を踏襲している。

序

宮崎県教育委員会では、都城裁判所合同庁舎建て替え工事に伴い、平成11年度から12年度にかけて国土交通省九州地方整備局鹿児島営繕工事事務所の委託を受け、八幡遺跡の発掘調査を実施いたしました。

八幡遺跡のある都城市八幡町周辺は『庄内地理志』の絵図によると都城島津家の家老屋敷にあたります。今回の調査でも井戸や土坑など武家屋敷関連の遺構が検出され、大量の陶磁器類も出土するなど当時の武士の生活ぶりの一端を垣間見ることができました。特に、薩摩焼の出土量は県内で最大規模を誇り薩摩焼研究に貴重な成果を得ることができました。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導御助言をいただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例　　言

- 1 本書は、都城裁判所合同庁舎建て替え工事に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した八幡遺跡の発掘調査報告書である。調査は国土交通省九州地方整備局鹿児島営繕工事事務所の委託を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 発掘調査は、平成12年12月18日から平成13年3月30日(第一次調査)および平成13年4月19日から7月30日(第二次調査)の2か年にわたりて実施した。
- 3 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1「都城」を、遺跡の周辺地形図等について市町村作成の2千5百分の1図をもとに作成した。
- 4 現地における実測図の作成は主として、南正覚准士、堀田孝博、重留康弘、古屋美樹が担当し、杉田康之、福田泰典、甲斐貴充、柳田宏一、玉利勇二、橋本英俊、柳田晴子、丹俊詞が補助した。
- 5 空中写真撮影は、(有)スカイサーベイ九州及び宮崎県文化財調査・サポート協同組合に委託した。
- 6 遺物・図面の整理は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物尖端及びトレースは南正覚、堀田、柳川(晴)、古屋、丹、小宇都あすさ、成相景子、黒木修と整理作業員が行った。
- 7 本書の執筆分担は次の通りである。なお、編集は南正覚が担当した。また、使用した遺構・遺物等の写真は南正覚、堀田が撮影した。
永友(第Ⅰ章第1節・第2節)　南正覚(第Ⅰ章第3節、第Ⅱ章第1節・第3節)　堀田(第Ⅱ章第2節・第4節、第Ⅲ章)
- 8 本書で使用した方位は、座標北(座標第Ⅱ系)である。レベルは海拔絶対高である。
- 9 調査時に使用した遺構略号は以下の通りである。なお、本報告書の中では基本的に用いていないが遺物整理等においては使用している。
獨立柱建物跡(S B)　土坑(S C)　井戸(S F)　溝状遺構(S E)　道路状遺構(S G)
- 10 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
- 11 次の方々に調査及び報告書の作成にあたり指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。
有川孝行　上床　真　大橋康二　大盛祐子　児玉三郎　重久淳一　島田正浩　下田代清海
下鶴　弘　代田博文　関　一之　出口　浩　橋口　亘　深野信之　松村真希子　峯崎幸清
山田　聰　米澤英昭　渡辺芳郎　鹿児島陶磁器研究会(敬称略)

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	2
第3節	遺跡の位置と環境	3
第Ⅱ章	調査の記録	
第1節	調査の経過	9
第2節	第一次調査	10
第3節	第二次調査	19
第4節	出土遺物	23
第Ⅲ章	まとめ	44

挿図目次

第1図	遺跡位置図・史跡分布図	4
第2図	庄内地理図「宮丸村本邑邸宅画図」(改変)	5
第3図	都城市全図(改変)	6
第4図	日本交通分県地図「其十四」宮崎県(改変)	7
第5図	八幡遺跡周辺地形図	8
第6図	グリッド配置図	8
第7図	第一次調査A区遺構分布図(切り合い関係)	11
第8図	第一次調査A区遺構分布図(北側)	12
第9図	第一次調査A区遺構分布図(中央)	13
第10図	第一次調査A区遺構分布図(南側)	14
第11図	第一次調査B区遺構分布図	15
第12図	第一次調査3号土坑・5号土坑実測図	17
第13図	第二次調査遺構分布図	21
第14図	苗代川系壺・甕・鉢断面形態	29
第15図	第二次調査井戸跡出土遺物	39

表目次

第1表	第一次調査遺構計測表	18	第9表	出土遺物観察表(6)	35
第2表	第二次調査土坑計測表	20	第10表	出土遺物観察表(7)	36
第3表	苗代川系陶器分類基準	28	第11表	出土遺物観察表(8)	37
第4表	出土遺物観察表(1)	30	第12表	出土遺物観察表(9)	38
第5表	出土遺物観察表(2)	31	第13表	出土遺物観察表(10)	39
第6表	出土遺物観察表(3)	32	第14表	近世土坑出土遺物集計表(1)	41
第7表	出土遺物観察表(4)	33	第15表	近世土坑出土遺物集計表(2)	43
第8表	出土遺物観察表(5)	34			

図 版 目 次

図版 1	八幡遺跡出土遺物(1)	49	図版21	八幡遺跡出土遺物(21)	69
図版 2	八幡遺跡出土遺物(2)	50	図版22	八幡遺跡出土遺物(22)	70
図版 3	八幡遺跡出土遺物(3)	51	図版23	八幡遺跡出土遺物(23)	71
図版 4	八幡遺跡出土遺物(4)	52	図版24	八幡遺跡出土遺物(24)	72
図版 5	八幡遺跡出土遺物(5)	53	図版25	八幡遺跡出土遺物(25)	73
図版 6	八幡遺跡出土遺物(6)	54	図版26	八幡遺跡出土遺物(26)	74
図版 7	八幡遺跡出土遺物(7)	55	図版27	八幡遺跡出土遺物(27)	75
図版 8	八幡遺跡出土遺物(8)	56	図版28	八幡遺跡出土遺物(28)	76
図版 9	八幡遺跡出土遺物(9)	57	図版29	八幡遺跡出土遺物(29)	77
図版10	八幡遺跡出土遺物(10)	58	図版30	八幡遺跡出土遺物(30)	78
図版11	八幡遺跡出土遺物(11)	59	図版31	八幡遺跡出土遺物(31)	79
図版12	八幡遺跡出土遺物(12)	60	図版32	八幡遺跡出土遺物(32)	80
図版13	八幡遺跡出土遺物(13)	61	図版33	八幡遺跡出土遺物(33)	81
図版14	八幡遺跡出土遺物(14)	62	図版34	八幡遺跡出土遺物(34)	82
図版15	八幡遺跡出土遺物(15)	63	図版35	八幡遺跡出土遺物(35)	83
図版16	八幡遺跡出土遺物(16)	64	図版36	八幡遺跡出土遺物(36)	84
図版17	八幡遺跡出土遺物(17)	65	図版37	八幡遺跡出土遺物(37)	85
図版18	八幡遺跡出土遺物(18)	66	図版38	八幡遺跡出土遺物(38)	86
図版19	八幡遺跡出土遺物(19)	67	図版39	八幡遺跡出土遺物(39)	87
図版20	八幡遺跡出土遺物(20)	68	図版40	八幡遺跡出土遺物(40)	88
 図版41	第一次調査 遺構検出状況				89
	1号建物跡				
	作業風景(2号建物跡)				
図版42	第一次調査 44号土坑(防空壕)				90
	3号・5号土坑				
	5号土坑(遺物出土状況)				
図版43	第一次調査 8号土坑				91
	14号土坑				
	14号土坑(遺物出土状況)				
図版44	第二次調査 井戸跡				92
	40号土坑(防空壕)				
	道路状遺構(SG1)				

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎地方裁判所都城支部、宮崎簡易裁判所、宮崎家庭裁判所支部等が入る都城裁判所合同庁舎は昭和33年に現在の宮崎県都城市八幡町2街区3号に建てられて以来、40数年の永年にわたって司法の場として役割を果たしてきた。しかし、建物の老朽化が進み建て替えの時期を迎えていた。

平成10年7月に県教育庁文化課が開発部局に対して実施した平成11年度の開発事業の照会に対し、建設省九州地方建設局營繕部より都城裁判所合同庁舎の建て替えの計画があがってきた。

当該地は『庄内地理志』の絵図によると都城島津家の家老屋敷に当たっていたため、平成10年9月22日・28日の2日間にわたりて県文化課埋蔵文化財係主査長津宗重の担当で確認調査が実施された。調査の結果、合同庁舎北側の前庭西側では御池ボラ上面で柱穴が検出され、近世の陶磁器等が出土した。庁舎南側の中庭は近・現代の攪乱を受けているが近代の瓦等が少量出土した。

確認調査の結果を受けて県教育庁文化課と建設省九州地方建設局營繕部との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行ったが、現状保存が困難な部分については発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。12年度に入り具体的な発掘調査に関する協議を建設省九州地方建設局營繕部計画課、同鹿児島營繕工事事務所、宮崎地方裁判所、同都城支部、県教育庁文化課、県埋蔵文化財センターの6者の中でおこなった。その結果、調査範囲については既存棟部分と庁舎北側の中央玄関のコンクリート敷きピロティ一部については周辺部の確認調査の結果から表十がかなり薄いことが確認されておりすでに建物の基礎等で消滅している可能性が大きいことから調査から除外することとし、中庭の割譲予定地も含めた仮庁舎部分、前庭の両サイドの緑地部分、庁舎西側の駐車場部分については工事により影響を受ける可能性があることから調査対象とした。また、調査期間については仮庁舎部分の調査を平成12年度中、前庭と西側駐車場部分を平成13年度前半で行うことで合意した。

調査は建設省九州地方建設局(平成13年度は国土交通省九州地方整備局)鹿児島營繕工事事務所長の委託を受けて宮崎県埋蔵文化財センターが主体となり予定どおり平成12年度、平成13年度の2か年にわたりて実施した。

平成12年度の調査は調査第二課調査第三係長菅付和樹、同課調査第三係主事甲斐貴充、同課調査第四係調査員堀田孝博の担当(途中菅付と甲斐に変わって同課調査第三係主査南正覚准士が主任として担当)で仮庁舎部分及び前庭東側の約800m²を平成12年12月18日から平成13年3月30日にかけて調査した(第一次調査)。平成13年度の調査は引き続き南正覚を主任に同課調査第三係調査員古屋美樹、同課調査第四係調査員重留康弘の担当で12年度の調査で完掘出来なかった3・5号土坑の継続調査(一次調査)と前庭西側及び西側駐車場部分の併せて約1,200m²を平成13年4月19日から平成13年7月30日にかけて調査した(第二次調査)。

2次にわたる発掘調査の結果、井戸や土坑など家老屋敷関連と思われる遺構の検出やそれらに伴う大量の陶磁器等の出土をみた。出土した大量の遺物等については平成13年5月1日から平成14年2月28日にかけて県埋蔵文化財センターで整理作業をおこなった。

第2節 調査組織

八幡遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター	平成12年度 (第一次調査)	平成13年度 (第二次調査)	平成14年度 (報告書作成)
所長	矢野剛	矢野剛	米良弘康
副所長兼総務課長	菊地茂仁	菊地茂仁	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫	岩永哲夫	岩永哲夫
総務係長	亀井維子	亀井維子	野邊文博
調査第二課調査第四係長	永友良典	永友良典	永友良典
調査第二課調査第三係長(調査担当)	菅付和樹		
同課調査第三係主査(調査担当)	南正覚雅士	南正覚雅士	
同課調査第三係主査(調査担当)	甲斐貴充		
同課調査第四係調査員(調査担当)	堀田孝博	重留康弘	
同課調査第四係調査員(調査担当)		古屋美樹	
同課調査第三係主査(執筆担当)			南正覚雅士
調査第一課調査第二係主事(執筆担当)			堀田孝博

第3節 遺跡の位置と環境(第1図)

八幡遺跡は宮崎県都城市八幡町2街区3号地内に所在する。

当遺跡が所在する都城市は宮崎県の南西部にあり、東側を鰐塚山系、西側を霧島山系に囲まれた南北に細長い盆地のほぼ中央部に位置する。本遺跡は、市街地中央の八幡町に所在し、大淀川右岸の台地上、JR日豊線西都城駅より南東約350mに位置し、標高約145mである。八幡町の地名は、慶長6年(1601)第12代領主北郷忠能が当地に勧請し祠った湯田八幡宮が所在したことに由来している。都之城(鶴丸城)は本遺跡の南西1kmに所在する。永和元年(1375)、第2代都城領主北郷義久が都島(宮古島)に築城したもので、これが都城の地名発祥の所以もある。都之城は本丸・西の丸・中之城・南之城・外城の5郭によって構成されていた。その後時代を経て元和元年(1615)徳川幕府の一国一城令で廃城になるまで約240年間にわたって営まれた。

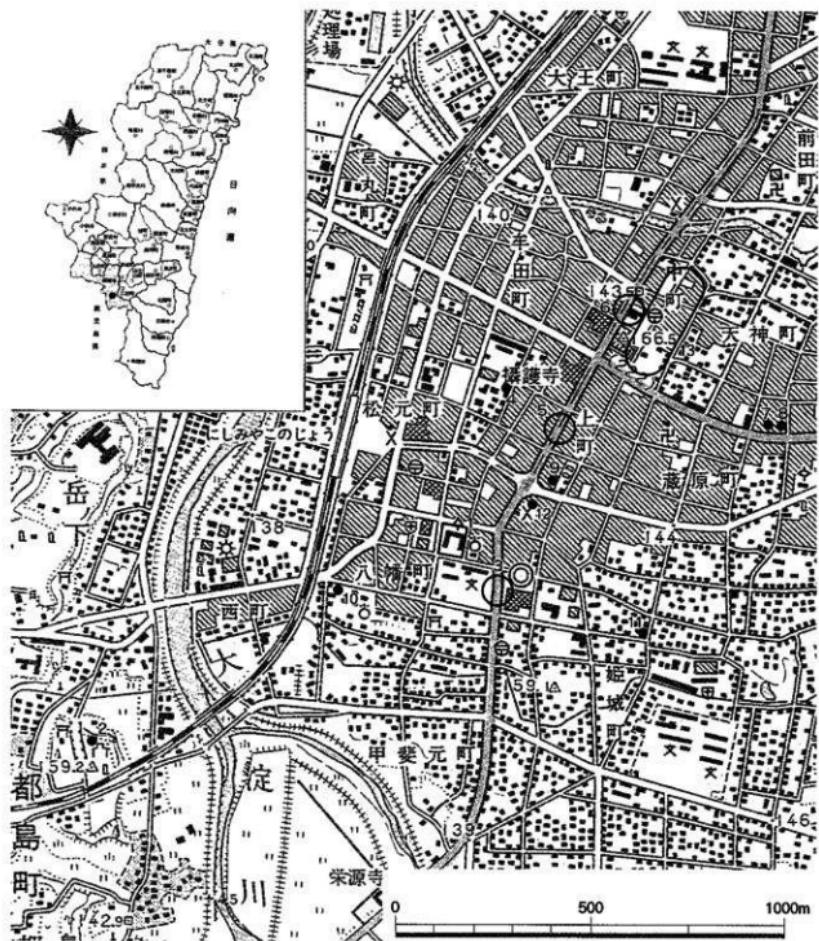
元和元年の一国一城令により、都之城は破却され終焉を迎え、忠能の居所は城山を下りた新地に移転された。領主館は大淀川を越え、現在の都城市役所と明道小学校の敷地内を中心に東西約360m、南北約270mの規模で建設された。その後、17世紀中葉過ぎには島津久定(1663:寛文3年、島津宗家の指示により北郷を改め再び島津の姓に復した)が領主館を東方に移動する大造成を行っている。この領主館を取り巻くように武家屋敷も置かれ、周辺の高台(現在の八幡町・姫城町)には重臣を配して城内とした。その他、城内の東(現在の早鉛町・蔵原町・天神町)と西(甲斐元町・松元町)も武士居住区とした。城内は老中馬場・御門馬場・桜馬場・八幡馬場・虹馬場・北口馬場によって区画され、当遺跡は虹馬場(北側)と桜馬場(南側)とに挟まれる場所に所在する。さらに東口、北口、西口の3つの人口にはそれぞれに番所が設けられている。また、城外には松元馬場、広小路などの馬場や路が造られた。さらに、城の北口から北へ延びる直線道路が造られたほか町屋等も新設・移転され、現在の都城の原型ができた。その後、明治維新まで島津氏が領主としてこの地を治めることとなった。

明治2年(1869)明治政府の版籍奉還に伴い、当主久寛は領地を返還し、家格を廃止され1,500石となり、鹿児島へ移ることとなった。明治4年(1871)の廃藩置県により都城県が置かれる。その後、明治6年(1873)宮崎県、明治9年(1876)鹿児島県と行政区分が変わるが、明治16年(1883)宮崎県下となり、都城盆地における政治・経済・文化の中心としてまた交通の要地として発展することとなる。

今回調査を行った八幡遺跡は『庄内地理誌』(第2図)の絵図から城内に建てられた武家屋敷跡と比定されたが、明治以降に取り壊され跡地には病院・營林署等が建てられた(第3・4図)。領主館も都城県庁や北諸県郡役所となったりするが、それらも昭和20年(1945)の空襲により焼失した。その後、都城市による道路建設に伴う区画整理が行われ、昭和33年(1958)には宮崎地方裁判所都城支部庁舎が建設され現在に至っている。

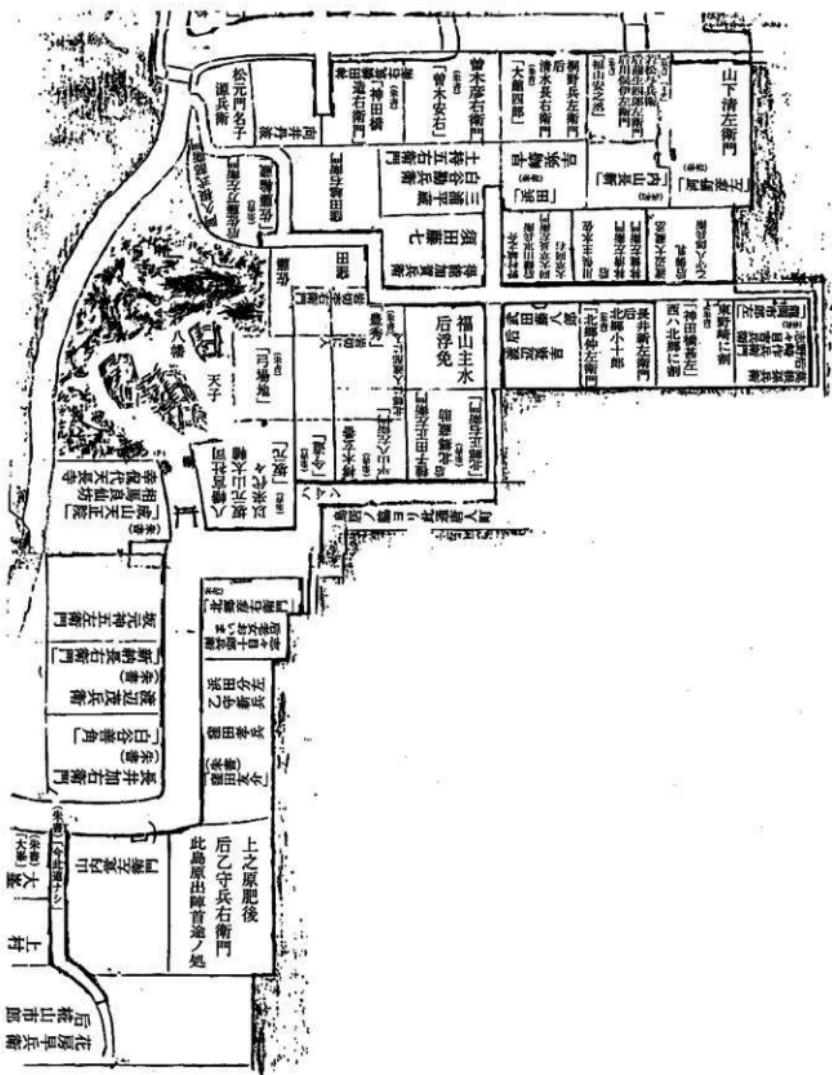
(参考・引用文献)

- (1) 都城市教育委員会 1983『都城・中之城跡 萩子野地下式横穴』都城市文化財調査報告書第3集
- (2) " 1997『都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書』都城市文化財調査報告書第41集
- (3) 都城市史編さん委員会 2001『都城市史』資料編近世】

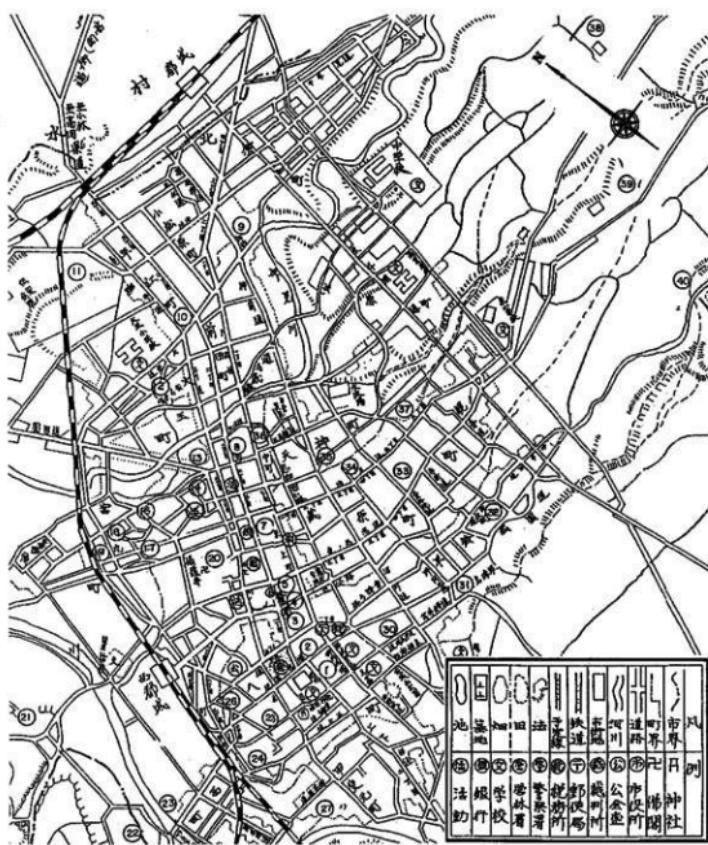


- | | | | | |
|----------|------------|--------------------|-----------|----------|
| 1 八幡遺跡 | 2 都之城(鶴丸城) | 3 都城領主館跡 | 4 都城米藏屋敷跡 | 5 本町跡 |
| 6 唐人町跡 | 7 油煙所跡 | 8 燃物所跡 | 9 広口跡 | 10 西口番所跡 |
| 11 東口番所跡 | 12 北口番所跡 | 13 天神遺跡第2次・中町遺跡第3次 | | |

第1図 遺跡位置図・史跡分布図 ($S = 1/12,500$)

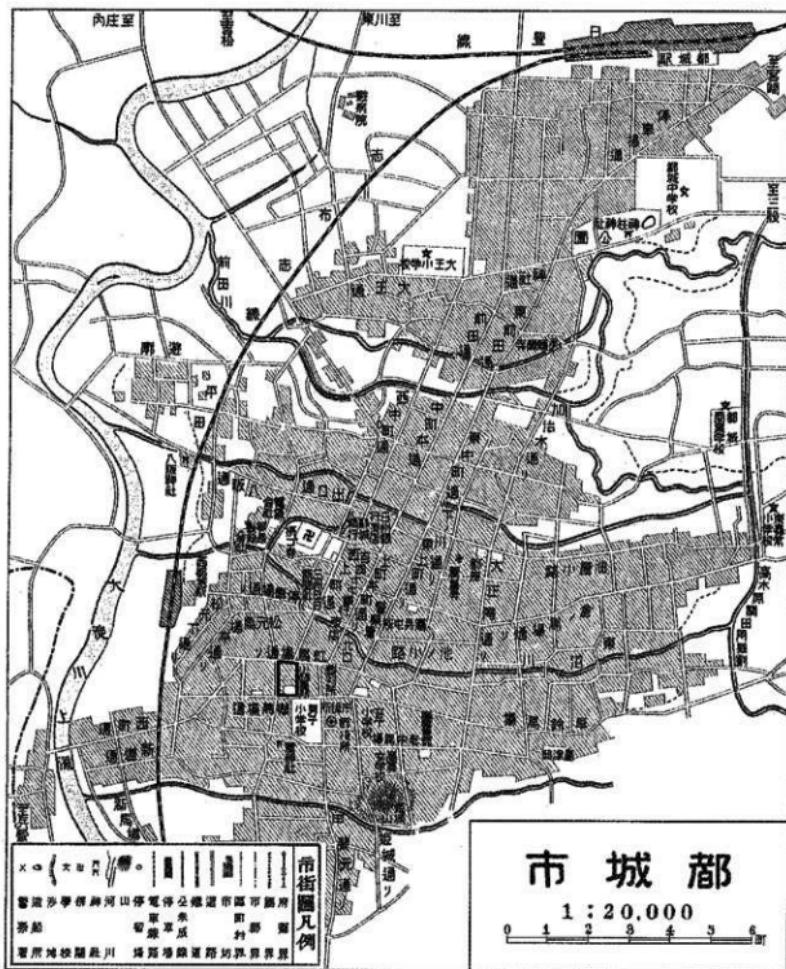


第2図 庄内地理志「宮丸村本邑邸宅画図」(アミ部分が八幡遺跡に該当)
(都城市史編さん委員会 2001『都城市史』資料編近世1より改変掲載)



- | | | | | |
|-----------|-----------------|------------|-------------|-----------|
| 1 鹿津家御跡跡 | 2 御学問所(陪道院・儀道院) | 3 北口番所跡 | 4 阿彌陀堂跡 | 5 外客屋跡 |
| 6 高札所跡 | 7 圓通庵跡 | 8 標門跡 | 9 松原御茶屋跡 | 10 龍班寺跡 |
| 11 煙硝藏跡 | 12 煙硝製造所跡 | 13 廉人臺地跡 | 14 法念寺跡 | 15 寂心院跡 |
| 16 岩興權現跡 | 17 三聖寺跡 | 18 四金寺跡 | 19 宮丸藏人退隱之地 | 20 新藏跡 |
| 21 二嚴寺跡 | 22 西藏跡 | 23 中泉亭跡 | 24 西口番所跡 | 25 西口調練所跡 |
| 26 港田八幡宮跡 | 27 南御茶屋跡 | 28 煙硝製造所跡 | 29 煙硝藏跡 | 30 東口番所跡 |
| 31 早鈴大明神跡 | 32 秋永藏人屋敷跡 | 33 量海院跡 | 34 油燈所及燒物所跡 | 35 館原天神 |
| 36 大昌庵跡 | 37 宮丸堀跡 | 38 萬葉原調練所跡 | 39 秋永堀跡 | 40 拝濟使薦堂跡 |

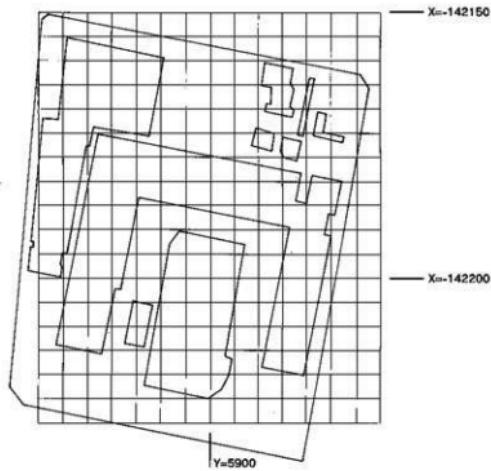
第3図 都城市全図（アミ部分が八幡遺跡に該当）
(前田厚 1989『本橋都城市史』付図より改変掲載)



第4図 日本交通分県地図「其十四」宮崎県 (S=15,000)
(大正13年11月15日発行 大阪毎日新聞社より改変掲載)



第5図 八幡遺跡周辺地形図 ($S = 1/7,000$)



第6図 グリッド配置図 ($S = 1/1,000$)

第II章 調査の記録

第1節 調査の経過

八幡遺跡の調査対象面積は2,000m²である。

調査対象地は、裁判所敷地内の中庭、前庭東側、西側駐車場、前庭西側である。調査対象範囲を便宜上、第一次調査A区…中庭 第一次調査B区…前庭東側 第二次調査…西側駐車場・前庭西側として調査を行った。なお、各調査区の位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土座標に合わせた5mグリッドを設定した(第6図)。

A区の調査対象面積は800m²である。平成12年12月18日より調査を開始した。重機で表土を除去した後、調査区内に東西6本・南北1本の確認トレンチを設定し、御池ボラ層上面までを人力で掘り下げた。その結果、御池ボラ層より上の層はほとんどが第二次世界大戦後の造成土であることが判明した。その後、調査区全面を御池ボラ層上面まで掘削・精査したところ、近世から現代に亘る建物跡(4棟)、溝状遺構(4条)、土坑(50基)、ピット(約170基)が複雑に切り合った状態で確認された。その中でも調査区北側で確認された5号土坑は、造り出しの階段を有する特異な形態の土坑であることが判明した。掘り下げる段階で多量の陶磁器・瓦類が出土したが、調査日程の関係で床面まで完掘できなかったため一旦埋め戻しを行い、第二次調査で継続して調査を行うこととし、平成13年3月30日を以て調査を終了した。

また、A区と並行しB区の確認トレンチによる調査を3月6日より開始した。5ヵ所の確認トレンチを設定し御池ボラ層上面までを人力による掘り下げを行った。その結果、北西部を中心として約40基のピットが検出されたが、明確な並びを確認できなかつたため3月9日には埋め戻しを行い調査を終了した。第二次調査を平成13年4月23日より行った。まず前年度の継続である5号土坑と隣接する3号土坑の調査を行った結果、御池ボラ層下約3mで3号土坑の南側に造り出しの階段が検出された。このことから、5号土坑で検出された階段は3号土坑に続く階段であり、それを5号土坑が切っていることが判明した。さらに、御池ボラ層下5mで検出された第3号土坑の床面は木材を使って補強されていることも確認された。しかし、3号土坑の室部が既存棟の下に入り込んでおり、室部の壁面や天井の大部分が崩壊しかなりの土砂が室部内に充満している状況の中で、床面まで深さ3mを超す調査を継続していくのは非常に危険であった。そこで安全上の判断から遺構の性格を特定するには至らなかつたが5月25日をもって3号土坑の調査を終了した。

5月9日からは二次調査区(西側駐車場・前庭西側)の調査を開始した。調査対象面積は1,200m²である。まず、調査区内に東西3本・南北1本の確認トレンチを設定し、土層の確認を行った後、重機で表土を除去し、御池ボラ層上面までを人力で掘削・精査した。その結果、道路状遺構(1条)、またこの道路状遺構に沿って建物跡(1棟)が検出された。さらに、この道路状遺構のほぼ中央部から北東に延びる道路状遺構(1条)や建物跡(1棟)も確認された。しかし、何れも柱穴が調査区外に延びるため建物の全貌を確認することができなかつた。他に井戸(1基)、土坑(45基)、ピット(124基)が確認されている。平成13年7月30日をもって調査を全て完了した。

第2節 第一次調査

1. 調査の概要

A区(中庭部分)から調査に着手した。前章で記したように、重機で表土を除去した後、東西6本・南北1本の確認トレンチを設定、人力掘削を行ったところ、御池ボラ層上面で遺構を確認できた。御池ボラ層上面までの深さは、現地表より0.2~0.8mであったが、土層の堆積状況や出土遺物などから、第二次世界大戦後の造成土であることが判明した。

調査区内における遺構の密度は比較的高く、建物跡(4棟)・上坑(50基)・溝状遺構(4条)・ピット(168基)などを確認した(第7、8~10図)。この他にも水道・電気の埋設管など裁判所の建設に関わるものや、時代は特定できないが切り合い関係や出土遺物から、明らかに戦後の所産である掘り込みも多数検出されたが、それらについては割愛する。

大半の土坑からは遺物が出土しており、それらに基づいた時期推定が可能であったが(第7図・第1表)、その一方ピットからは遺物がほとんど出土せず、一部を除き並びも確認できていないため、その性格付けは困難である。

B区(前庭東側)の調査は、5本の確認トレンチを設定し、表土から人力で掘削した結果、場所によつては搅乱が著しく、ピット39基の他には建物跡・土坑など確認できなかつたため、トレンチ調査のみで終了した(第11図)。したがつて以下の記述は、基本的にA区の調査結果に基づいている。

2. 遺構

建物跡(第8~10図・第1表)

4棟確認したが、4号建物跡については構造・時期が他の3棟と異なり(戦後の可能性が高い)、また建物ではなく、別の構造物(樋・廻の跡など)である可能性もある。

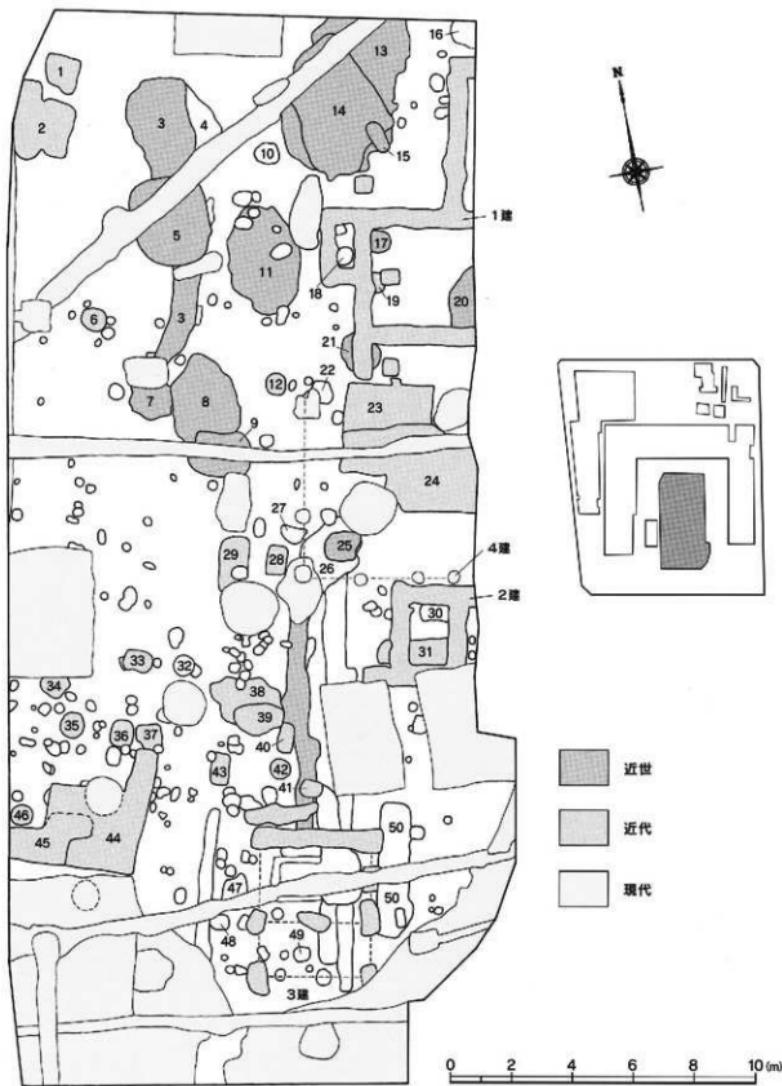
一覧表を作成するにあたり、以下のような基準で分類を行つた。

- ・ I 基礎部分が溝状あるいは長方形土坑状の掘り込みで構成される。(1号~3号)
- ・ II 基礎部分が列状のピット群で構成される。(4号)

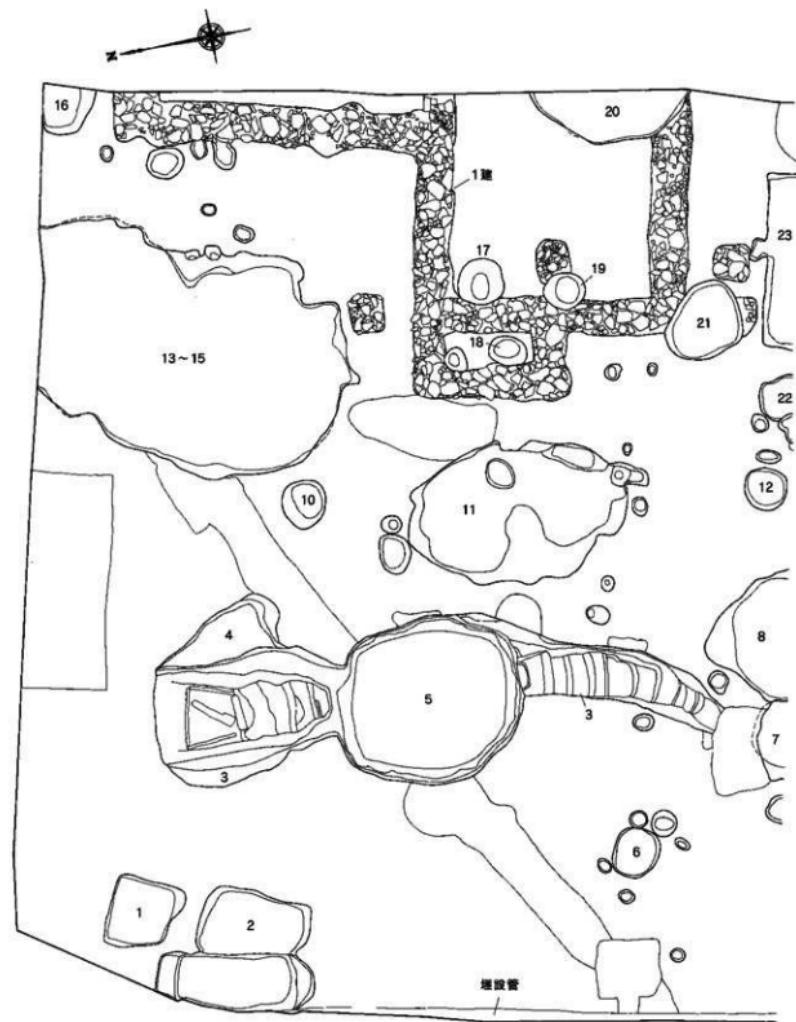
I類の建物は溝状の掘り込みに人頭大程度までの川原石を充填し、その上から碎石を詰め、平坦につき固めている。一部にレンガ積みが残存していたことより、レンガを用いた西洋風建築と推定される。管見の範囲ではこれに類似する遺構として、東京大学付属病院外来診療棟の新営工事に先立つ發掘調査で検出された東京医学校本館基礎遺構(成瀬・寺島1993)、新宿区市谷本村町遺跡第1号遺構(谷川他1995)、広島市広島城遺跡基町高校グラウンド地点S B 2~4(福島1999)などがあげられる。

東京医学校本館(明治9年(1876)建設)は瓦葺木造2階建とされ、市谷本村町遺跡例は東京鎮臺砲兵營(のち陸軍砲兵營:明治6年(1873)建設)の建物、広島城遺跡例は北練兵場に関する明治中頃から昭和期頃の建物と推定されている。

いずれも明治期に建設された学校・軍関係の施設であり、I類の工法はこうした官的な府舎に広く採用されていたものと考えられる。本遺跡例は第3図に見える岩林署関連の建物である可能性が高い。



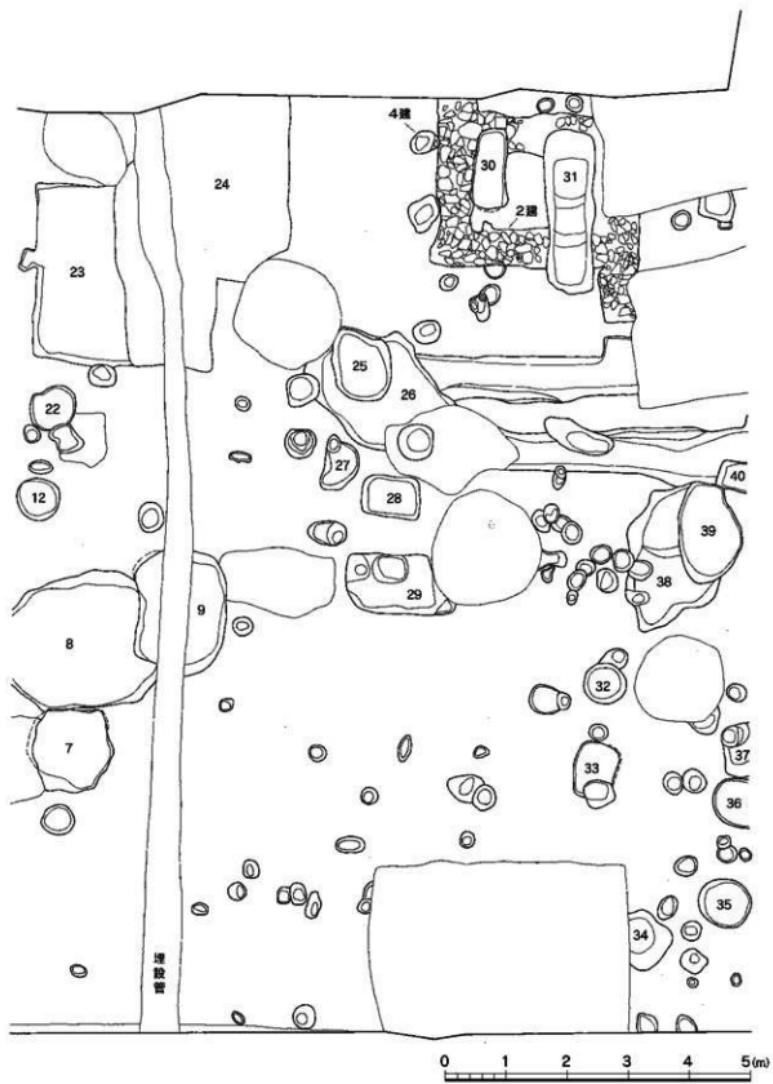
第7図 第一次調査A区遺構分布図（切り合い関係）（S = 1/160）



第8図 第一次調査A区遺構分布図(北側) (S = 1/80)

第8~10図の固化にあたっては以下の基準を設けた。

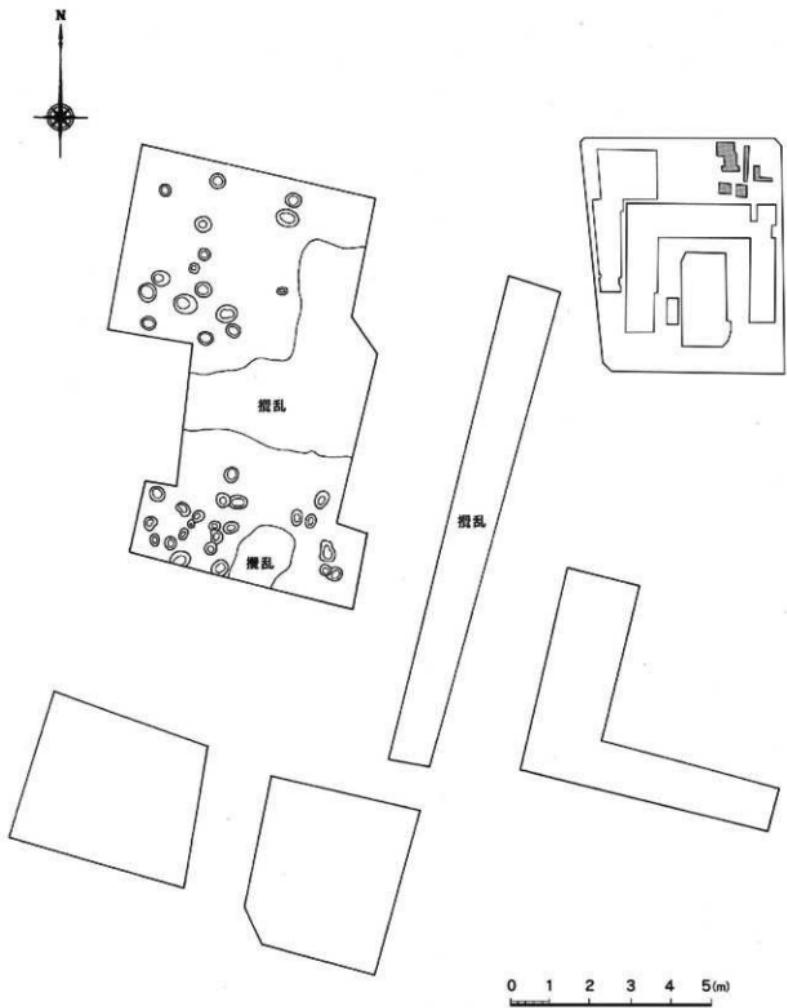
- ①戦後の振り込み（埋設管ほか）に関しては、下塙を入れない（ただし未掘分も含む）。
- ②4号建物跡は戦後である可能性が高いが、遺構の性格を考慮して例外的に下塙を入れる。
- ③その他の遺構は、完備状態で固化（したがって比較的新しい遺構は、消滅している可能性あり）。
- ④遺物跡については、切り合いのない部分のみ標を残す。



第9図 第一次調査A区遺構分布図（中央）(S = 1 / 80)



第10図 第一次調査A区遺構分布図 (南側) ($S = 1/80$)



第11図 第一次調査B区遺構分布図 ($S = 1/120$)

土坑（第8～10図・第1表）

一覧表を作成するにあたり、以下のような基準で分類を行った。

- ・ I 平面形が円形を呈する。 · A 底面が平底を呈する。
- ・ II 平面形が橢円形を呈する。 · B 底面が橢鉢状を呈する。
- ・ III 平面形が隅丸(長)方形を呈する。 · C 中段にテラスを有する。
- ・ IV 平面形が(長)方形を呈する。 · D その他
- ・ V 平面形が不整形を呈する。

これら二つの要素の組み合わせで土坑の形態を表現している。具体的には「円形プランで平底の土坑」の場合、「IA類」と表記することになる。

土坑には大別して近世に属するものと近代に属するものとがあり、それぞれに共通する特徴を有している。近世土坑は比較的大規模で、平面プランが不整形を呈するもの（V類）が多数を占める。埋土中に多量の陶磁器・瓦・礫を含んでおり、調査区の北側に集中する傾向にある。

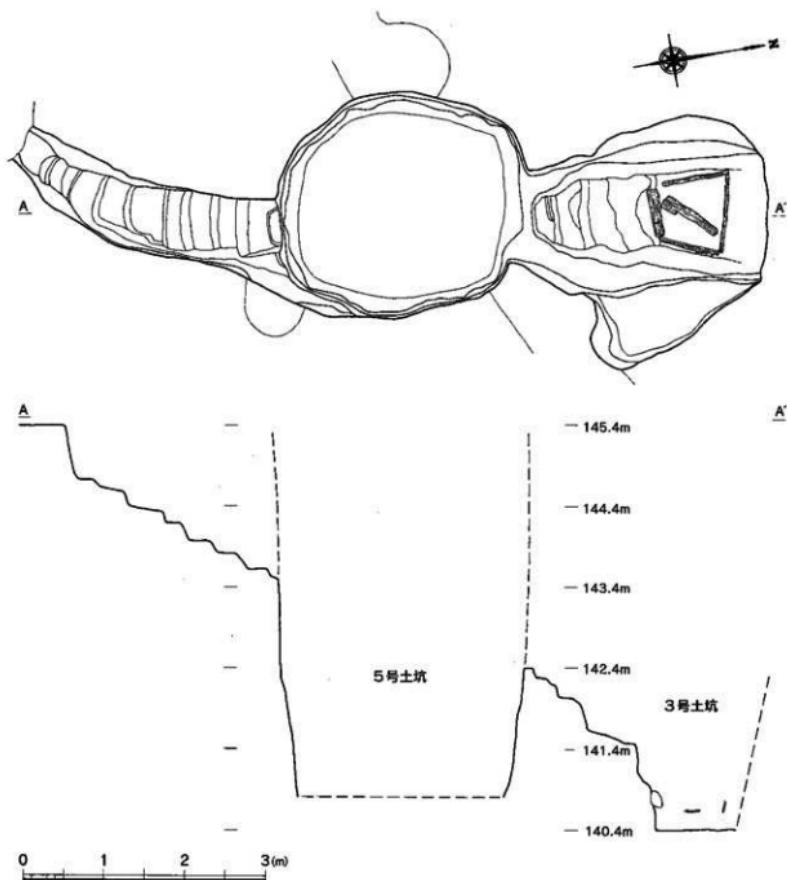
近代土坑はやや規模が小さく、円形（I類）や隅丸(長)方形（III類）など整ったプランを有する。概して出土遺物は少ないが⁵、特徴的な遺物を多量に出土した土坑群（1・2・24・45号土坑）もある。それらの土坑からは激しい火熱により融解・固着したガラス塊が出ており、陶磁器も熱を受けた状態が明瞭で、断面にガラスの滴が付着しているものも認められた。家屋の倒壊により破碎した後、焼夷弾による二次出火に遭ったものと推定され、昭和20年（1945）8月6日の都城空襲に起因する火事場整理に伴う廃棄坑である可能性が高い。A区では調査区全面が御池ボラ層上面に達するほど深く削られていたが⁶、削平はこのような終戦前後の片付けに際して行われた可能性もある。

3・5号土坑（SC 3・5：第12図）

地山を掘り込んだ造り出しの階段を有する土坑である。当初は階段を5号土坑のものと考えていたが⁷、調査の過程で3号のものであることが判明した。よって5号が3号を切るという前後関係が認められる。

3号土坑は階段と室部とで構成されると考えられるが、室部の大半は調査区外にかかっており形態・規模などの詳細は不明である。ただし底面で検出された木材の状況からは、やや末広がりの羽子板状を呈する可能性を指摘できる。階段は約4.0mの高さを約8.0mかけて下っており、最後の段を除けば階段としては比較的緩やかである。ただし幅は1.0mを前後する程度で、かなり狭い印象を受ける。階段を有する地下式の造構⁸ということで、江戸遺跡などで多数確認されている「地下室」と類似するが、「地下室」と推定するには解決すべき問題も残されており、性格の特定にはいっそうの検討を要する。埋土には御池ボラからP11火山灰を含む暗褐色ロームまで層を成す一塊のブロックなども見られ、ある時期に落盤・廃絶したことが明らかである。造構確認面から測って0.7～2.1m下の各土層は、シラスに似たにぶい黄褐色土のブロックで構成されており、速やかに埋め戻しが行われたようである。

5号土坑は長径3.1m・短径2.5mを測り、橢円形を呈する。埋土には夥しい数の陶磁器・瓦・礫



第12図 第一次調査3号土坑・5号土坑実測図 ($S = 1/60$)

が詰まっており、土よりも多い状態であった。壁面がほぼ垂直に立ち上がる円筒形の掘り方で、遺物の出土状況は層により粗密があるが、下層に至っても多量に出土し続けた。

確認面から4.5mまで掘り下げるに、地下水が滲出してきた。既に壁面にはシラス層が約2.0m露出しており、調査区北端であったため法面の勾配も限界に達し、安全管理上の判断から発掘を中止した。底面まで掘り切れなかつたため、当初の用途は明らかにしえないが、最終的には廃棄坑として用いられたものである。

建物跡

番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	類型	遺物の有無	時代	備考	調査時の名称
1	(10.6)	(5.0)		I	陶磁器	近代	苔林層の建物か?	1号建物跡
2	(3.8)	(3.4)		I		近代	苔林層の建物か?	2号建物跡
3	(5.5)	4.4		I	陶磁器	近代	苔林層の建物か?	3号建物跡
4	(6.3)	(5.4)		II	陶磁器	現代?	建物ではない可能性あり	4号建物跡

土坑

番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	類型	遺物の有無	時代	備考	調査時の名称
1	1.1	1.0	0.5	VA	焼けた陶磁器・瓦・ガラス	近代	空襲後の整理	SC7
2	(2.6)	(2.0)	(0.6)	VC	焼けた陶磁器・瓦	近代	空襲後の整理	1号瓦罐り
3	(9.5)	2.1	(4.9)	V-	陶磁器・土器・瓦	近世	地下変? 切る:SC4 切られる:SC5	SC25
4	(2.2)	(1.1)	(0.6)	--		近世以前	切られる:SC3	SC25D一部
5	3.1	2.5	(4.5)	II-	陶磁器・土器・瓦・軽石	近世?	切る:SC3	SC26
6	0.8	0.6	0.1	IIA	陶磁器・ガラス	近代	切られる:ビット	SC10
7	(1.3)	1.3	0.5	VB	陶磁器・土器・鉄製品	近世	切られる:SC8	SC28
8	(3.0)	2.2	0.6	VA	陶磁器・土器・瓦・鉄製品・軽石	近世	切る:SC7 切られる:SC9	SC22
9	(2.1)	1.5	0.8	IIA	陶磁器・土器	近世	切る:SC8	SC40
10	0.8	0.8	0.4	IB	鉄製品	近代		SC9
11	3.6	2.4	0.6	VD	陶磁器・土器・鉄製品	近世	切られる:ビット	SC27
12	0.7	0.7	0.2	IA	陶磁器	近代		SC18
13	(5.0)	3.9	0.6	VC	陶磁器	近世	切られる:SC14・15	SC20の一部
14	4.4	3.2	0.6	VC	陶磁器・土器・瓦・鉄製品	近世	切る:SC13 切られる:SC15	SC20
15	1.1	0.5	0.4	IIC	陶磁器・瓦・軽石	近世	切る:SC13・14	SC20の一部
16	(0.9)	(0.8)	(0.5)	--	陶磁器			SC8
17	(0.8)	0.8	0.6	IB	陶磁器	近世	切られる:1号建物跡	SC41
18	0.6	(0.5)	0.2	IIB		近代以前	切られる:1号建物跡	SC47
19	0.7	(0.6)	0.7	II B	陶磁器・土器・軽石	近代	切られる:1号建物跡	SC42
20	(2.7)	(0.9)	(0.5)	--	陶磁器・土器・軽石	近世	切られる:1号建物跡	SC39
21	1.6	1.2		IA	軽石	近世	切られる:1号建物跡	SC43
22	0.8	0.8	0.4	VA				SC44
23	(3.0)	(1.5)	(0.2)	IV-	瓦・陶磁器	近代	切る:ビット 切られる:SC24	3号瓦罐り
24	(4.5)	(2.9)	(1.7)	V-	焼けた陶磁器・瓦・ガラス	近代	空襲後の整理 切る:SC23	SC1
25	1.1	1.0	0.2	VA			切る:SC26	SC21
26	(1.8)	(1.8)	0.4	VA			切る:4号溝状遺構 切られる:SC25、ビット	P72
27	0.8	0.6	0.2	VA				
28	1.1	0.7	0.3	III A	陶磁器・土器・瓦・ガラス	近代		SC19
29	1.9	1.0	0.6	VD	陶磁器	近代	切られる:ビット	SC38
30	1.4	0.6	(0.6)	III-		近代以前	切られる:2号建物跡	SC37
31	2.7	(1.0)	0.7	III C	瓦	近代	切られる:2号建物跡	4号瓦罐り
32	0.7	0.7	0.4	IB	陶磁器・鉄製品・獸骨	近代	切る:ビット	SC15
33	1.0	0.7	0.2	II A	陶磁器・瓦・ガラス	近代	切る:ビット	SC11
34	1.0	(0.7)	0.2	VB	陶磁器・土器	近代		SC12
35	0.9	0.8	0.6	IA	陶磁器・ガラス	近代		SC13
36	0.9	0.8	0.4	IA	陶磁器・瓦	近代	切られる:ビット	SC14
37	1.0	0.8	0.1	VD	陶磁器・瓦	近代	切られる:SC44、ビット	SC31
38	(2.6)	(1.7)	0.4	VC	陶磁器・瓦・軽石・ガラス	近代	切られる:SC39、ビット	SC35
39	1.6	1.0	0.5	II A	陶磁器・軽石・ガラス	近代	切る:SC38-40、2号溝状遺構	SC36
40	1.0	0.5	0.6	III A	陶磁器	近代	切る:2号溝状遺構 切られる:SC39	SC34
41	0.7	0.5	(0.2)	IA	陶磁器・鉄製品	近代	切る:2・3号溝状遺構	SC23
42	0.7	0.7	0.5	IA	陶磁器・瓦・ガラス	近代	便橋?	P108
43	1.1	0.6	0.8	III A	陶磁器・瓦・鉄製品・ガラス	近代	切られる:ビット	SC16
44	4.2	(4.1)	1.5	VA	陶磁器・ガラス	近代	防空壕 切る:SC37、ビット 切られる:SC45	SC2
45	(2.6)	(1.8)	(0.5)	VC	焼けた陶磁器・瓦	近代	空襲後の整理 切る:SC44	2号瓦罐り
46	0.7	0.7	0.3	IB	陶磁器			SC17
47	(0.8)	(0.7)	(0.2)	V-				SC32
48	(0.7)	0.5	0.7	II B	陶磁器・瓦		切られる:1号溝状遺構	P140
49	0.5	0.5	0.5	III A				SC24
50	4.4	1.2	0.2	III A			切られる:3号建物跡、ビット	SC29-30

※報告にあたり遺物番号を振り直したため(新番号)、調査時の名称(旧番号)を併記した(遺物の注記は旧番号にて行った)。計測値について、調査区外にかかるなど不確定のものは括弧付きで記した。類型は本文中の凡例に準ずる。

第1表 第一次調査遺構計測表

第3節 第二次調査

1. 調査の概要

昨年度の継続である一次調査3・5号土坑(以下本項においては一次調査を省略する)から調査を行った。まず重機を使って埋め戻した部分の土の除去作業を行った。次に3・5号土坑の周り(8m×10m)を3段の段掘りにして作業の安全を確保した後、調査員による掘り下げを開始した。先に5号土坑の掘り下げを行ったが、ここでも多量の陶磁器・瓦類が出土した。さらに掘り下げていくと御池ボラ層下約3mで3号土坑の南側に造り出しの階段が検出された。このことから、5号の南側で検出された階段は3号土坑に続く階段であり、それを5号土坑が掘り込んでいることが確認された。さらに御池ボラ層下4.5mまで掘り下げると、地下水が滲んできたため5号土坑の掘り下げを中止した。その後、3号土坑の階段を検出しながら慎重に掘り下げたところ御池ボラ層下5mで木材と粘土を使って補強された床面の一部を確認した。主体部は調査区外に延びるため遺構の性格を特定するには至らなかったが、武家屋敷等に関連するものではないかと考える。

3・5号土坑の調査と並行して、西側駐車場・前庭西側の調査に入った。調査対象面積は1,200m²である。調査区内に東西3本・南北1本の確認トレンチを設定し、御池ボラ層上面までを人力で掘り下げた。その結果、A区と同様に御池ボラ層より上の層はほとんどが第二次世界大戦後の造成土であることが判明した。そのため重機で表土を除去し、御池ボラ層上面までを人力で掘削・精査した。その結果、御池ボラ層を掘込むかたちで調査区内を北から南に緩やかに傾斜する道路状遺構を検出した。この道路状遺構に沿って建物跡(1棟)が検出された。さらに、この道路状遺構のほぼ中央やや北寄りで北東に延びる道路状遺構と建物跡(1棟)が確認された。しかし、いずれも柱穴が調査区外に延びるため建物の全貌を確認することができなかった。他に土坑(45基)、ピット(124基)も確認されている。武家屋敷関連の遺構については、第二次大戦の区画整理等により削平された可能性が高いと思われた。しかし、西側駐車場北側で確認された井戸については、点数は少ないながらも16世紀末～17世紀初頭頃の遺物が出土したことから武家屋敷に関連する井戸ではないかと考えられる。

2. 遺構

第一次調査3・5号土坑(SC 3・5)

調査内容については第一次調査の3・5号土坑(第II章第2節2)を参照いただきたい。

井戸(S F 1)

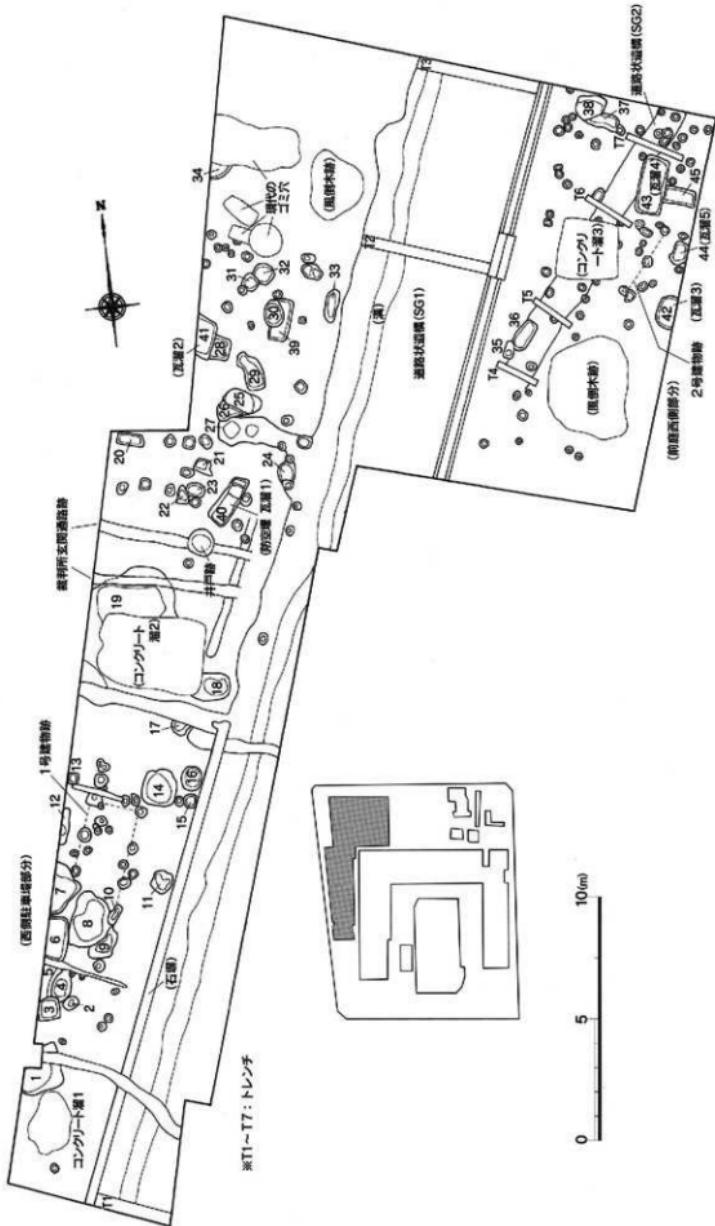
西側駐車場北側で近世の井戸が1基確認されている。御池ボラ層上面で直径1mのほぼ円形プランで検出した。土層の状況を確認しながら掘削を行ったが、脆弱なシラスに掘り込まれている上に、水が湧いてきたために3.9mの深さ(シラス層)で掘り下げを中止した。壁は真っ直ぐの素掘で、枠材等はみられず、下部にいくにしたがって狭くなっている。底面付近は直径80cmのほぼ円形プランで10cm大から30cm大の軽石が40数個が確認されている。土層を観察した限り、徐々に埋没したのではなく、一気に埋められた印象を受ける。埋土中からは、上層で苗代川系の古相を示す甕1点(273)、中国産磁器(福建・廣東系)の大皿1点(272)、中層から肥前系の胎土目を残す小皿3点(269～271)が出土している。他に備前系陶器甕の胴部片数点が出土している。

番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	類型	遺物の有無	時代	備考
1	2.4	(1.4)	0.2	(III A)	陶磁器	近代	一部調査区外
2	0.7	0.5	0.3	III C			
3	1.0	(0.8)	0.6	(III A)	陶磁器	近世	SC4, 5を切る 一部調査区外
4	(1.2)	0.8	0.5	(II A)			SC3, 5に切られる
5	(1.1)	(0.4)	0.1	(IV A)	陶磁器 土器	近世	SC4を切る 一部調査区外
6	(1.8)	(1.0)	0.4	(IV A)	陶磁器	近世	一部調査区外
7	2.2	(1.1)	0.3	(IV A)			一部調査区外
8	2.2	1.6	0.3	II A	陶磁器	近世	SC9を切り, SC10に切られる
9	1.5	(0.7)	0.1	(V A)			SC8に切られる
10	0.9	0.4	0.2	II A			SC8を切る
11	1.0	0.9	0.1	I A			
12	1.5	0.4	0.6	(III A)			一部調査区外
13	(0.5)	0.5	0.4	III C			
14	1.5	1.4	0.2	I A	陶磁器		
15	0.6	(0.5)	0.3	(I A)	陶磁器		
16	1.0	(0.6)	0.2	(III A)	瓦	近代	
17	1.0	0.7	0.2	II A			
18	(1.2)	1.1	0.4	III A			コンクリート溜に切られる
19	(3.5)	(2.0)	0.7	(III A)	陶磁器 ガラス	近世	コンクリート溜に切られる 一部調査区外
20	1.0	0.4	0.2	V A			
21	0.7	0.6	0.1	V A			
22	0.7	0.4	0.1	V A			SC23を切る
23	0.8	0.6	0.1	III A			SC22に切られる
24	(0.7)	0.7	0.4	(II A)			ピットに切られる
25	1.6	(0.9)	0.6	(V A)	陶磁器 鉄製品	近世	SC26に切られる
26	(1.4)	(0.6)	0.6	(V A)			
27	(2.3)	1.0	0.2	(V A)	陶磁器	近代	SC26を切り, ピットに切られる
28	1.0	(0.7)	0.6	(V A)			SC41に切られる
29	1.7	0.7	0.5	V A			
30	1.2	0.7	0.6	II A			SC39を切る
31	0.7	(0.6)	0.2	I B			SC32を切り, ピットに切られる
32	0.8	(0.8)	0.4	I B			SC31に切られる
33	1.4	0.5	0.4	II A			
34	(0.8)	(0.7)	0.1	(V A)			現代のごみ穴に切られる
35	0.7	0.4	0.3	III B			SC36を切る
36	1.3	0.7	0.6	III A			SC35に切られる
37	(0.9)	0.7	0.2	(V A)	陶磁器		SC38, ピットに切られる
38	1.3	0.9	0.6	II A	陶磁器		SC37を切る
39	(1.7)	(0.8)	0.1	V A	陶磁器 土器		SC30に切られる
40	2.1	0.8	0.7	V A	瓦	近代	防空壕(瓦溜1)
41	1.6	0.8	1.0	V A	瓦	近代	瓦溜2 一部調査区外
42	1.2	(0.7)	0.7	(II A)	瓦	近代	瓦溜3 一部調査区外
43	2.4	1.1	0.9	V A	瓦	近代	瓦溜4 道路状壇構を切る
44	1.0	(0.5)	0.3	(II A)	瓦	近代	瓦溜5 一部調査区外
45	1.3	0.6	0.2	V A			SC43に切られる

*計測値について、調査区外にかかるなど不確定のものは括弧付きで記した。類型は本文中の凡例に準ずる。

第2表 第二次調査土坑計測表

第13図 第二次調査遺構分布図 (S=1/200)



近代以降の遺構

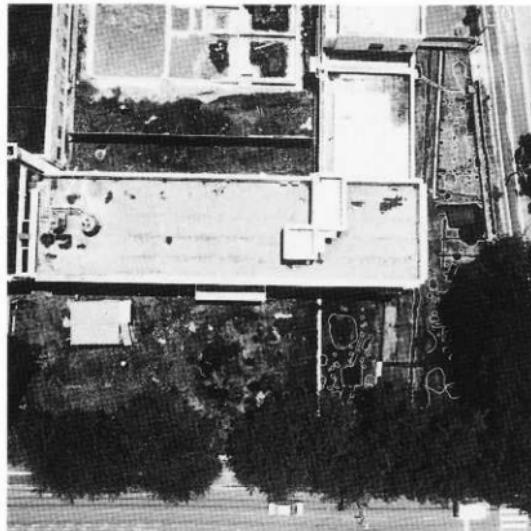
- 近代以降の遺構について簡略に説明を加える。検出面は全て御池ボラ層上面である。
- ・道路状遺構(S G 1)…幅3.2m、全長42.4mを検出した。硬化面を形成するために石炭滓と石が敷いてあり、その下には赤化した瓦類が埋められており終戦直後に以前の道路を復旧する形で造られた道路であると推測される。調査区の中央を北から南へ僅かな勾配を持ちながら走行している。
 - ・道路状遺構(S G 2)…幅1.1m、全長11.2mを確認した。家々の間の区割り的なものであり、埋土から近代ものであると考えられる。
 - ・1号建物跡…道路状遺構(S G 1)に沿って検出された。南北3間?(7.0m)、東西1間?(2.0m)の建物であるが、西側が調査区外に延びるため全貌は不明である。柱穴の掘方は50cm前後の円形で、深さは10cm程度である。柱穴(3基)には根固め石として直径2~3cmの小石が用いられている。埋土から近代のものと考えられる。
 - ・2号建物跡…道路状遺構(S G 2)に沿って検出された。柱穴の掘方は40cm前後の円形で、深さは30cm程度である。東側が調査区外のため全貌は確認できなかった。
 - ・瓦溜り(SC 40・41・42・43・44)…5ヵ所で確認されている。被熱により赤化しているものが多く、空襲で家屋が焼失した際に廃棄されたものである。
 - ・防空壕(SC 40)…西側駐車場の北側で確認した。短軸80cm、長軸230cm、深さ90cmを測る。北側には造り出しの2段の階段を有し、床面は60cm×130cmである。中には赤化したものと含め大量の瓦と僅かな土が詰まっていた。

土坑群(第2表)

御池ボラ層上面で45基が確認されている。ここでも土坑群を平面プランにより5類に分類し、さらに底面の形状により20類に細分した。

ピット群

御池ボラ層上面で124基を検出した。建物跡(2棟)に伴う柱穴以外のピットについては、共伴遺物も極少であり、規格性に乏しくその性格、機能については特定できなかった。



第二次調査区全景(北より)

第4節 出土遺物（第3～13表／図版1～40）

八幡遺跡からは第一次・第二次調査合わせて数万点の遺物が出土した。最古の遺物としては14～15世紀代の龍泉窯系青磁鉢が5点出土しているのみで、ほとんどの遺物は16～20世紀代の所産である。陶磁器・瓦類が圧倒的に多く、土器・ガラス製品・金属製品がそれに続く。ただし調査・整理の段階で明らかに戦後の所産と判断されたものについては、取上げ・計数を行っていない。

近世以前と推定される土坑から出土した陶磁器については、その点数を集計・掲載した（第14・15表）。集計にあたっては、各種遺物の出土量などを勘案しつつ、以下のような分類基準を設けた。分類のレベルが必ずしも一定していないが、多量に出土したもの、良好な分類基準の設けられたものに関しては細分し、また少量でも特に年代的指標となるものについては単独で扱った。

この集計結果は近世における本遺跡の様相について、大まかな傾向を示すには役立つと思われる。ただし、遺跡の来歴における制約（大規模な削平・造成）、調査区設定上の制約（建物の範囲を除く）、調査進行上の制約（安全性の確保など）などのため、遺跡全体の様相を正確に反映しているかは不明とせざるを得ない。また各遺物の細かな年代観についてであるが、宮崎県下における中・近世陶磁器の編年が確立しておらず、本遺跡の出土状況（一括遺物など）より独自の年代観を導き出すことも困難という現状では、明確なデータを提示することはできない。しかし帰属時期について何ら触れることがないようでは、今後の検討に益するところもないと考える。

よって生産地（肥前系の有田窯・波佐見窯、薩摩諸窯など）や大消費地（江戸、大阪、鹿児島など）における成果を援用する形で年代を提示することとする。現段階ではあくまで「参考年代」程度に受け取っていただけると幸いである。

中国産磁器（第4表／図版1～2 1～11・12？・14？・15・16）

比較的精良な景德鎮窯系の製品と、粗製の福建・廣東系と推定される製品に二分される。福建・廣東系の製品は灰色や褐色がかった胎土に粗放な文様をつけ、また釉が厚くかかり、高台に砂粒が付着という諸特徴を持つ。いわゆる呉須手と称する一群を含み、漳州窯の製品などを代表とする。

また德化窯系の型成形による碗が多く出土している。合わせ口で焼成するため口縁部を口禿にするのが特徴で、色絵（15）と白磁（16）とがある。

国産磁器

ほとんどが肥前系磁器と考えられるが、18世紀後半以降に出現する器種・器形には他地域産の磁器（薩摩系・日向系など）が含まれている可能性がある。薩摩系磁器については、近年その特徴が明らかにされつつあるが、現段階で破片レベルまで分類することは困難と判断され、今回は一括して扱っている。

初期伊万里碗（第4表／図版2 17～19）

天目形碗（1610～1650年代）や高台無釉碗（1640～1660年代）など、国産磁器の創成期である17世紀初頭～中頃までの製品が含まれる。

丸碗（第4・5表／図版2～4・6 20～22・25～32・37・48～50）

全時代を通じて普遍的に存在する器形である。5つのグループに分類した。丸碗1：見込み荒礫文碗（1650～1690年代：20～22）、丸碗2：17世紀後半～18世紀前半の上手物（25～27）、丸碗3：18世紀代を中心とする粗製のいわゆる「くらわんか手」（28～32）、丸碗4：青磁染付（18世紀中頃～後半）（37）、丸碗5：粗製碗のうち、特に厚手で内面見込みに蛇の目釉剥ぎを施すもの。釉剥ぎの部分にアルミナを塗布する例もある（18世紀後半～19世紀：48～50）。肥前系波佐見窯の製品が多くを占めると考えられるが、薩摩苗代川系の磁器である南京皿山窯の製品（50？）などを含む可能性がある（出口2002）。

小丸碗（第4表／図版3 23・24）

京焼の影響を受けて出現したと推定される器形。「薄手半球碗」とも呼称されている（18世紀前半）。

朝顔形碗（第5表／図版4 33～36）

高台脇で屈曲し、そのまま直線的に外方へ開く。基本的に蓋付の碗で、青磁染付・白磁もある（18世紀中頃～後半）。加治木町弥勒窯跡でも出土しており、薩摩産の製品を含む可能性がある（関2001）。

筒形碗（第5表／図版5 38～41）

丈の低い円筒形を呈する（18世紀中葉～1810年代）。薩摩産の製品を含む可能性がある（関2001）。

小広東碗（第5表／図版5 42・43）

清朝磁器の影響を受けた器形。本遺跡例では唇文・格子文など文様が限られる（1770～1810年代）。薩摩産の製品を含む可能性がある（出口1998、関2001）。

広東碗（第5表／図版6 44～47）

清朝磁器の影響を受けた器形。基本的に蓋付の碗である（1780～1840年代）。薩摩産の製品を含む可能性がある。

端反碗（第5表／図版7 51～58）

清朝磁器の影響を受けた器形。基本的に蓋付の碗である（1810～1860年代）。この時期に量産された瀬戸・美濃系の製品も少量あるが含まれる（57・58）。弥勒窯跡（関2001）、川内市平佐新窯の調査でも多数出土しており（前2001）、薩摩産の製品を含む可能性がある。

湯呑碗（第5・6表／図版8 59～62）

「筒丸碗」とも呼ばれる（1820～1860年代）。薩摩産の製品を含む可能性あり（関ほか2001、前2001）。

大皿（第6表／図版8・9 63～66）

口径30cm前後のいわゆる尺皿。本遺跡例においては墨書き技法の使用が顕著である。

中皿 (第6表／図版9・10 67~69)

口径20cm強の七寸皿。ハリ支え痕を残す資料が多く含まれる。見込みに花虫文を付ける芙蓉手の皿(67)など、17世紀後半代の製品も認められる。

小皿 (第6・7表／図版11~13 70~97)

口径15cm前後の五寸皿。7つのグループに分類した。小皿1：初期伊万里から銀彩、南川原窯ノ辻窯産など17世紀代の製品(70~76)、小皿2：輪花皿(77・78)、小皿3：輪花皿のうち蛇の目凹形高台(高)のもの(18世紀末~19世紀中葉：79~84)、小皿4：平縁ないし玉縁口縁皿(89・90)、小皿5：平縁ないし玉縁口縁で蛇の目凹形高台(低)のもの(18世紀中葉~19世紀前葉：85~88)、小皿6：平縁ないし玉縁口縁で蛇の目凹形高台(高)のもの(18世紀末~19世紀中葉：91・92)、小皿7：内面見込みに蛇の目釉剥ぎを施すもの(93~97)。93・94と95・96はそれぞれ同一モチーフであるが、筆致・蛇の目釉剥ぎの径・高台径などが大きく異なり、産地ごとの特徴を表している可能性がある。

手塙皿 (第7表／図版14 98~106)

主として口径10cm以下の小皿が該当する。102は瀬戸・美濃系の木型打込皿である。

鉢 (第7表／図版14・15 107~112)

資料によっては碗皿類との区別がしづらいが、碗類似の器形の場合は口径に対する高さの比率0.62以上、同様に皿類似の場合は比率0.33以上であることを一応の基準とする。3つのグループに分類した。鉢1：型打成形による角鉢。(1780~1860年代：107・108)。鉢2：その他の鉢。玉縁口縁や輪花、端反の鉢などを含む。青磁染付も認められる(109~112)。鉢3：蓋付鉢。段重なども含む。蓋の鉢には熨斗形を貼り付けたもの、丸いボタン状のものがある。

薔薇猪口 (第7表／図版16 113~116)

高台からほとんど膨らまず、直線的に口縁まで立ち上がる器形を呈する。

仏飯器 (第7・8表／図版16 117~120)

長い脚部を有し、小型の高杯状の器形を呈する。2つのグループに分類した。仏飯器1：腰部で折れ、大きく外反するもの(117・118)。仏飯器2：体部が丸味を帯びるもの(119・120)。

瓶 (第8表／図版17 121~125・128)

基本的に液体の貯蔵容器である。4つのグループに分類した。瓶1：胴部の張りが強く、ラッキヨウ形(玉蚕春形)を呈するもの。口縁部が開くものと玉縁を有するものがある(121・122)。瓶2：胴部の張りが比較的弱く、頸部の細長いもの(鶴首形)。いわゆる爛徳利(125)も含むものとする。瓶3：瓶子形を呈するもの。いわゆるお神酒徳利(124・125)。瓶4：仏花瓶。耳付で口縁部が大きく開く(128)。

花生 (第8表／図版17 126)

本遺跡例では単純な円筒形を呈するものが多數を占める。

油壺 (第8表／図版17 127)

醸付油を入れておくための容器。ただし127については別の器種である可能性もある。

コバルト染付 (第8表／図版17 129～131)

ドイツ人技師ワグネルがもたらした酸化コバルトの使用により登場する(1870～1900年代)。濃淡に欠ける群青色を呈するのが特徴で、型紙による絵付を多用した。碗・皿・鉢が認められる。

国産陶器

肥前系と薩摩系とに大別される。天草陶石という共通の原材料を用い、地方窯が肥前系製品の器形・文様を志向した磁器とは異なり、産地ごとの個性が強いため、分類は比較的容易である。

肥前系陶器

17世紀代の碗皿 (第8・12・13表／図版18 132～139・269～271)

肥前に於ける陶器創成期～発展期の製品で、1594年頃～1610年代の所産とされる胎土(133・269～271)・鉄絵をつけた絵唐津(132)、1610～1690年代とされる砂目(136・138)などに代表される。

京焼風 (第8表／図版19 140～146)

17世紀後半頃に京焼の影響を受けて生産が開始され、18世紀前半頃まで作られる。水滌した精良な胎土を用い、器壁薄く、シャープに削りだした高台を特徴とする。吳須・銹絵により棲間山水文を描き(140～142)、高台内に刻印を押す例がある(140)。また腰部に肩曲を持つ、いわゆるせんじ碗も京焼系(京都・信楽系)の流れを汲む器形である(144・145)。

銅緑釉 (第8表／図版20 147～149)

17世紀末から18世紀代にかけて、嬉野町内野山窯で量産された。比較的精良な胎土を用い、透明釉とのかけ分けを行っているが、碗は外面、皿は内面に銅緑釉を施している。皿には見込み蛇の目釉剥ぎを施している。

刷毛目・象嵌 (第9表／図版20・21 150～154)

暗褐色胎土の上に白泥で装飾を行う。刷毛(筆)で渦巻状・波状の文様を描き出したり(152・153)、スタンプを押した窪みに白泥を充填して文様を浮かびあがらせたりする(154)。内野山窯のいわゆる董手(151)もこれに含む。特に刷毛目の皿は、17世紀後半から19世紀にかけて広く生産された。

薩摩系陶器

竪野系 (第9・11・12表／図版22・34・35・38 155～159、236・239・241・242・261)

藩窯として白薩摩(白物)と称される高級品を焼成した系統の窯である。宇都窯(姶良町)、御里窯(加治木町)、冷水窯・長田窯・福荷窯(鹿児島市)などが知られる。白色の精良な胎土を用い、京焼を志向したと推定される。本遺跡例では碗(155～159)や土瓶(茶家:236・239)などが出土しているが、体部下半に「唐千鳥印」という独特の文様を描かれたものが目立つ。その他にもいわゆる宋胡録写の唾壺(241:ただし苗代川系の可能性もあり)や、香炉?(261)のような希少な製品がもたらされている。

龍門司系 (第9・10・11・12表／図版23～27・34・35 162～189、192～196、198・199・232・240)

龍門司窯(加治木町)を中心とする系統。18世紀後半から19世紀にかけて、碗・皿を主力製品として生産したようである。ただし最近の研究により従来の龍門司系の範疇から外れるタイプが確認され、それらの資料には18世紀前半の年代が予測されている(関2002)。18世紀前半のものを碗・皿1、従米の赤褐色胎土のものをそれ以外として区分した。碗・皿1:微細な鉄分粒子を含む灰白色の精良な胎土を用い、高台の削り出しがシャープで、高台内面まで施釉するなど丁寧な作業が行われている(162～168・181)。碗・皿2:赤褐色胎土で、高台の削り出し粗く、高台内は施釉しない。せんじ碗(179)や折絆皿(177)などもあり、多様な器形を生産している(169～182)。灯火具:灯明皿(183～186)、灯明受皿(187～189)、秉燭(192・193)などを含む。灯明皿には胎七目・胡麻目・蛇の目釉剥ぎが見られる。仏龕器:大型で蛇の目釉剥ぎのあるもの(194・196)と小型のもの(195・198・199)とに二分される。また般舟手(182・232)・三彩などの高級品も、少量ではあるが出土しており、232は酒器であると推定される。

元立院(西餅田)系 (第10表／図版26・27 190・197)

元立院窯(姶良町)を中心とする系統。17世紀後半から18世紀前半にかけて稼働したとされる。主として日常雑器を生産したが、時期によっては茶道具も多く焼いたようである。釉薬は黒釉・褐釉などを使用し、胎土は堅練で手取りが重いという特徴がある。

苗代川系 (第10～13表／図版27～35・40 200～231、233～235、237・238・244・245・273)

串木野市・東市来町の窯を中心とする系統。主として壺・甕・鉢など大型の製品を作る。本遺跡において器種・数量ともに最も豊富な内容を有する一方で、他の薩摩諸窯と比較して生産地での良好な資料に恵まれていないという状況に鑑み、細別案を第3表として提示した。共通する諸特徴としては、胎土が粗く、赤褐色系と黒褐色系の二者が認められること、暗緑色・灰緑色・暗褐色・褐色などの釉薬を用いることがあげられる(渡辺2000)。

琉球系陶器 (第12表／図版35・36 246・247)

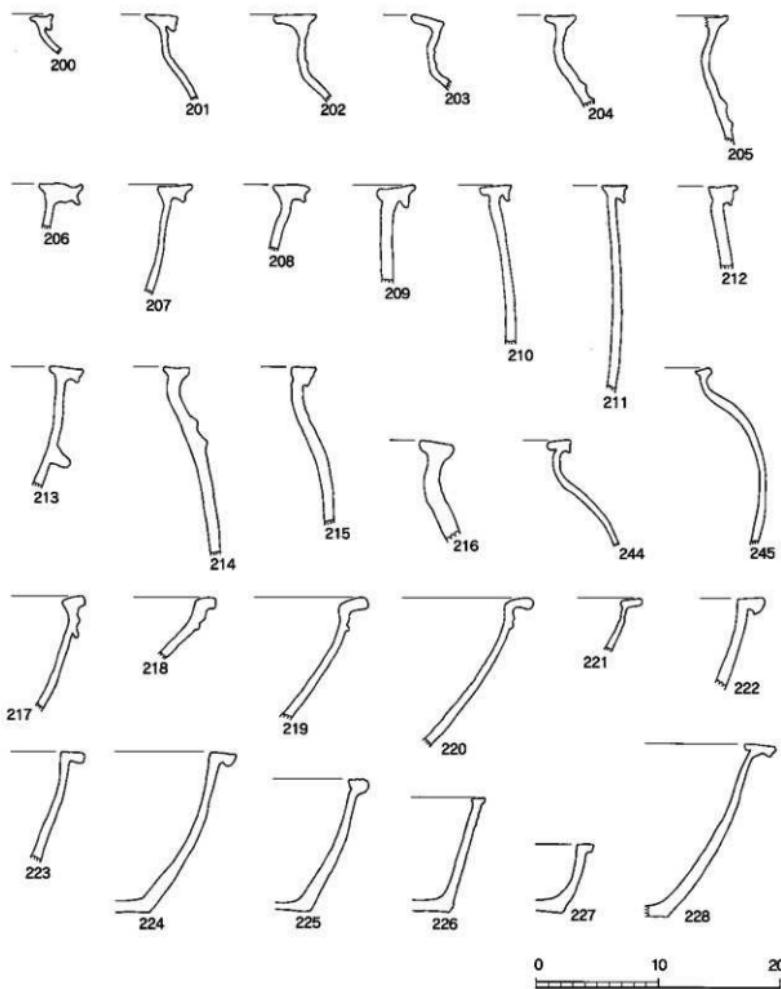
いわゆる荒焼の瓶・三耳壺が出土している。ともにその形態より19世紀代の製品と推定される。

備前系陶器

無釉の焼締め陶器で、壺・甕・鉢類の破片が出土している。

型番	特徴	遺物番号
臺1	口縁部：外反のち内方に強く折り返し、縁帯を形成する。縁帯の外端部は面取りを施し、上面は平滑なナテに目貝を有する。頭部：ほぼ直立し、やや長い。腹部：張りは非常に強く、器壁薄い。内面には同心円状の当て具痕がある。底部：未確認。	244
臺2	口縁部：内外に張り出し、断面T字状を呈する。外方への張り出し強く、縁帯を形成する。上面は釉薬を粗く拭き取り、コマ目を有する。頭部：臺1よりも短い。腹部：張りは非常に強く、器壁は臺1よりも厚い。肩に環状の耳を有する例がある。底部：未確認。備考：臺1よりやや下る。	245
臺1	口縁部：内湾のち外方に強く折り返し、縁帯を形成する。折り返した腹部は、円窓に面取りを施す。上面は平滑なナテのち、釉薬を拭き取り、目貝を有する。頭部：極めて短く、数条の浅い凹線が巡る。腹部：張りは非常に強く、器壁は臺1よりも厚い。肩に断面三角形の突部がある例がある。底部：内面ともに目貝がみとめられる。	200-201
臺2	口縁部：内湾のち外方に強く折り返し、縁帯を形成する。折り返した腹部は、円窓に面取りを施す。上面は平滑なナテのち、釉薬を拭き取り、目貝を有する。頭部：張りはやや強く、器壁は臺1よりも厚い。肩に断面三角形の突部がある例がある。底部：未確認。備考：臺1よりやや下る。	202-205
臺3	口縁部：外方に折り返し、縁帯を形成する。縁帯の外端部はナテにより浅く凹ませたのち、上下からつまんで被打たせるが、波長は不規則である。新面は逆一字なしでT字状を呈する。上面は平滑なナテのち、釉薬を拭き取り、目貝を有する。数条の浅い凹線が巡る例もある。頭部：明瞭には存在しない。腹部：内外面ともに丁寧な横位のナテを施す。外面上に横状や棒状の工具で文様を施す例や、内面下半が無釉の例がある。底部：未確認。備考：出口氏の巻7タイプに該当する。	206-208
臺4	口縁部：外方に折り返し、縁帯を形成する。縁帯の外端部は臺3に類似するが、波長がほほ一定で、下端のみ波状を呈する例がみとめられる。新面も臺3と同様。上面は刷毛目を施し、釉薬を粗く拭き取る。自跡は未確認。頭部：明瞭には存在しないが、数条の浅い凹線により、それと審讬される例がある。腹部：内外面ともに丁寧な横位のナテを施す。外面上に横状や棒状の工具で文様を施す例や、内面下半が無釉の例がある。底部：未確認。備考：臺3と同様だが、やや後出か。	209-210
臺5	口縁部：外方に折り返し、縁帯を形成する。縁帯の外端部は面取りの後、2条の沈縫を渡らせてからつまむ。波長は最も長い。外方への張り出し方が弱いが、器の強度の厚さを有する。新面は臺3と同様。上面は刷毛目を施し、釉薬を粗く拭き取る。コマ目を有する例がある。頭部：臺4と同様。腹部：内外面ともにナテなしし、刷毛目の二者がある。内面が無釉の例、内面に小突起を有する例がある。底部：未確認。備考：臺3と同様だが、臺3・4より後出か。	211-212
臺6	基本的に臺3と同形態であるが、縁帯をつまない。縁帯上面にはコマ目？がみとめられる。また腹部外面に粘土塊を貼り付け、把手状を呈する例がある。	213
臺7	口縁部：内湾に張り出し、断面T字状を呈する。上面は刷毛目を施し、釉薬を粗く拭き取る。コマ目？を有する例がある。頭部：ほぼ直立し、外面上に数条の浅い凹線が巡る。腹部：張りはやや強く、器壁厚い。肩に断面三角形の突部がある。底部：未確認。備考：出口氏の巻7Aタイプに該当する。いわゆる甘瀬半周。	214
臺8	口縁部：内側の張り出しが強く、腹部写いいたし、断面三角形を呈する。縁帯の外端部は面取りの後、2条の沈縫を渡らせる。下端のみ波状を呈する例がある。上面は刷毛目を施し、釉薬を粗く拭き取る。頭部：ほぼ直立か、やや内傾する。腹部：張りはや強く、器壁厚い。底部：未確認。備考：臺3と同様。	215-216
撲1	口縁部：短く外反し、上面には貝皿を有する。体部：外腹は口縁部直下に突起が3つ並ぶ。内面は太目の柳目を縦位に施し、口縁直下に空白を残す。底部：未確認。備考：波辺芳氏の体部2型式に該当。	217-218
撲2	口縁部：大きく外反し、断面「く」の字状を呈するものもある。上面は平滑なナテのち、釉薬を拭き取り、目貝・コマ目？を有する例がある。体部：外腹は口縁部直下に突起が3つ並ぶ。内面は横位の柳目を縦位に施す。腹部：張りはや強く、器壁厚い。底部：未確認。備考：波辺氏の体部3型式に該当。	219-220
撲3	口縁部：断面が斜めに倒れたT字状を呈する。上面は平滑なナテのち、釉薬を拭き取り、目貝を有する。体部：内腹は太目の柳目を縦位に施す。口縁部直下に空白を残す。底部：未確認。備考：波辺氏の体部4型式に該当。	221
撲4	口縁部：外方に折り返し、断面逆L字状を呈する。上面は刷毛目を施し、釉薬を粗く拭き取り、コマ目を有する。口縁下部が丸く垂れる例、内腹に巻く例がある。体部：内腹は対縫目組の柳目を口縁部直下まで施す。底部：内腹は中央より柳目を放射状にかけ上げる。外腹は無釉。備考：波辺氏の体部4型式に該当。	222-224
撲5	口縁部：外反のち内方に強く折り返すが、縁帯を形成せず、断面は丸味を帯びたT字状を呈する。上面は釉薬を拭き取り、2条の浅い凹線？が巡る例がある。備考：新しさ？	225
鉢1	口縁部：内側に弱く張り出し、断面T字状を呈する。上面は釉を拭き取り、目貝を有する例がある。体部：口縁部直下に2条の浅い凹線？を巡らせる。器底に比較的低い。底部：外腹はかかった釉を粗く拭き取る。	226
鉢2	縪2の柳目を施さないもの。	
鉢3	縪3の柳目を施さないもの。	
鉢4	縪4の柳目を施さないもの。器高がきわめて低い例がある。	227
鉢5	縪5の柳目を施さないもの。	
鉢6	口縁部：外反のち内方に強く折り返し、縁帯を形成する。外端部は弱く面取りを施し、断面T字状を呈する。上面は釉を拭き取り、目貝？を有する例がある。体部：内腹面下に丁寧な横位のナテを施す。底部：内腹に目貝が見られ、外腹はかかった釉を粗く拭き取る。	228
椎木1	口縁部：未確認だが、鉢と同形態か。体部：外腹は横位のヘラケズリ、内腹は丁寧な横位のナテ。内外面とも下半は無釉。底部：内腹面とも無釉で、目貝を有する。内面は同心円状の丁寧なナテと螺旋文様である。穿孔は焼成前。	229
椎木2	口縁部：未確認だが、鉢と同形態か。体部：内腹面とも横位の浅い刷毛目が施される。釉薬は厚くかかり、底部内腹まで垂れる例もある。底部：外腹は一度かけた釉薬を粗く拭き取る。穿孔は焼成前で、椎木鉢1と比叡すると粗いコマ目と判断される痕跡を有する例がある。備考：椎木1より後出か。	230
土瓶1	口部：ため口に作る。頭部：円錐形胴部と算盤玉形胴部とがあり、三足を有する。	231
土瓶2	口部：鉄砲口に作る。	237

第3表 苗代川系陶器分類基準



第14図 苗代川系亞・塞・鉢断面形態 (S = 1 / 4)

番号	種別・器種	所見
1	磁器 青花皿	法量:口径(8.8) 底径4.5 器高2.1 残存率:口縁部～底部2/3 内面:十字花文・圓線 外面:唐草文・圓線 生産地:中国 兼得鎮窯系 年代:15世紀後葉～16世紀前半 出土遺構:一次調査A区北土坑 備考:小野分類皿B1群。
2	磁器 青花皿	法量:口径(9.6) 底径(2.2) 器高2.6 残存率:口縁部～底部1/2 内面:草花文・圓線 外面:波瀬文・芭葉葉文・圓線 生産地:中国景德鎮窯系 年代:15世紀後葉～16世紀前半 出土遺構:一次A区12号土坑 備考:小野分類皿C群。
3	磁器 青花皿	法量:口径(9.8) 底径(9.8) 器高3.7 残存率:口縁部～底部1/5 内面:丸彫の箇文・圓線など 外面:丸彫の箇文・圓線 生産地:中国 年代:16世紀末～17世紀初頭 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:いやわるソウ皿。釉薬青味がかかる。
4	磁器 青花皿	法量:底径4.2 残存率:底部先舟 内面:蝶文・圓線 生産地:中国景德鎮窯系 年代:17世紀初頭 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:底部鉢の目高台、高台内は無能。
5	周器 輪厚胎皿	法量:口径(5.9) 底径(3.6) 器高4.4 残存率:口縁部～底部1/4 外面:陽刻の鏡文 生産地:中国華南系 年代:16世紀 出土遺構:一次A区濱岸付 備考:口縁部接花。底部外面に刺印。内面の釉薬はほどほど剥落している。いやわる交趾燒。
6	磁器 青花碗	法量:口径(10.9) 底径4.2 器高5.6 残存率:口縁部～底部2/3 内面:圓線など 外面:唐草文・圓線 生産地:中国福建 ・広東系 年代:17世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:高台疊付・砂付足。
7	磁器 青花碗	法量:口径(12.4) 底径(4.6) 器高5.4 残存率:口縁部～底部1/4 内面:圓線など 生産地:中国福建・広東系 年代:17 世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:釉薬厚くからむ(厚さ1mm強)。
8	磁器 青花鉢	法量:口径(24.4) 残存率:口縁部1/5 内面:圓線 外面:草花文? 生産地:中国福建・広東系? 年代:17世紀後半? 出土遺構:一次B区遍清付 備考:釉薬やや厚くかかる(厚さ0.5mm)。釉薬青味がかかる。
9	磁器 青花皿	法量:口径(17.1) 底径(10.9) 器高4.4 残存率:口縁部～底部1/3 内面:? 外面:[大明嘉靖年製]・圓線 生産地:中国 景德鎮窯系 年代:17世紀前半 出土遺構:一次A区19号土坑 備考:高台疊付砂付足。
10	磁器 青花碗	法量:口径(9.1) 底径(4.0) 器高4.5 残存率:口縁部～底部1/3 外面:七山唐草文・圓線など 内面:文様帶・圓線など 生産地:中国福建・広東系? 年代:19世紀初頭 出土遺構:二次19号土坑 備考:底反碗。高台内裏鉢あり。釉薬青味がかかる。
11	磁器 青花碗	法量:底径4.0 残存率:底部完全 内面:仙毫紋・圓線・芭葉・仙毫招寿文・圓線など 生産地:中国景德鎮窯系? 年代: 18世紀末～19世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:底反碗。高台内裏鉢(变形字)あり。
12	磁器 青花碗	法量:口径 底径(3.9) 器高(4.8) 残存率:口縁部～底部1/4 外面:文様帶・壽字文・蓮弁文・圓線など 生産地:中国? 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:底反碗。高台内裏鉢(变形字)あり。
13	磁器 青花碗	法量:(8.5) 底径4.0 器高4.9 残存率:口縁部～底部1/2 外面:花文・蓮弁文・圓線 生産地:不明 出土遺構:一次A区 43号土坑 備考:釉薬青味がかかる。
14	磁器 青花碗	法量:口径(12.1) 底径(5.0) 高さ:6.1 残存率:口縁部～底部1/3 外面:蝶文・唐草文?・圓線 生産地:中国? 出土遺 構:二次19号土坑 備考:口縁部の釉薬が剥落している。
15	磁器 色絵碗	法量:口径8.2 底径3.3 器高4.3 残存率:ほぼ完全 外面:花卉文・変形字? 生産地:中国徳化窯系 年代:18世紀末～ 19世紀前半 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:底反碗。型づくり。口縁部無船(口壳)。
16	磁器 白磁碗	法量:口径8.0 底径3.4 器高4.4 残存率:口縁部～底部2/3 生産地:中國德化窯系 年代:18世紀末～19世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:底反碗。型づくり。口縁部無船(口壳)。
17	磁器 染付碗	残存率:口縁部～底部1/10 外面:蓮弁文・福壽文・丸彫の鏡文・圓線 生産地:肥前 年代:1610～1630年代 出土遺構: 一次A区19号土坑 備考:天日形。
18	磁器 染付碗	法量:口径(7.6) 底径(4.7) 器高6.4 残存率:口縁部～底部1/3 外面:唐草文・吉字文・丸彫の鏡文・圓線 生産地:肥前 年代:1630～1650年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:口紅装飾。
19	磁器 染付碗	法量:底径(4.3) 残存率:底部1/2 内面:絵珍文・圓線 生産地:肥前 年代:1640～1650年代 出土遺構:一次A区5号 土坑 備考:高台無船。
20	磁器 染付碗	法量:底径(5.7) 残存率:底部1/2 内面:荒文・圓線 外面:圓線など 生産地:肥前 年代:1650～1690年代 出土遺 構:二次19号土坑 備考:見込み荒文鏡文。高台疊付砂付足。
21	磁器 染付碗	法量:底径(5.3) 残存率:底部1/3 内面:荒文・圓線 外面:圓線など 生産地:肥前 年代:1650～1690年代 出土遺構: 一次A区遍清付 備考:見込み荒文鏡文。高台疊付砂付足。
22	磁器 染付碗	法量:底径4.5 残存率:底部完全 内面:荒文・圓線 外面:圓線など 生産地:肥前? 年代:1650～1690年代? 出土 遺構:一次A区5号土坑 備考:見込み荒文鏡文。底致粗放。高台疊付砂付足。
23	磁器 染付碗	法量:口径(3.8) 底径(3.7) 器高4.3 残存率:口縁部～底部1/2 外面:草花文 生産地:肥前 年代:1710～1750年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:小丸頬(薄手半球頬)。
24	磁器 染付碗	法量:口径(11.5) 底径4.0 器高5.5 残存率:口縁部～底部1/3 外面:折枝梅文 生産地:肥前 年代:1710～1750年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:小丸頬(薄手半球頬)。
25	磁器 染付碗	法量:口径(10.0) 底径3.8 残存率:口縁部～底部2/3 蘭草2.8 外面:竹文・圓線 内面:芭文?・四方禪文・圓線 生産地: 肥前 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区9号土坑 備考:高台内裏鉢あり(二重方形枠内「高福」),26とセット。
26	磁器 染付碗	法量:口径(10.7) 底径4.2 器高6.2 残存率:口縁部～底部1/3 外面:竹文・圓線 内面:芭文?・四方禪文・圓線 生産 地:肥前 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区9号土坑 備考:高台内裏鉢あり(二重方形枠内「湯福」),25とセット。
27	磁器 染付碗	法量:口径(9.7) 底径4.1 器高5.6 残存率:口縁部～底部1/3 外面:松竹梅文・圓線 生産地:肥前 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:高台内裏鉢あり(二重方形枠内「湯福」)。
28	磁器 染付碗	法量:口径(10.7) 底径4.0 器高5.8 残存率:口縁部～底部1/3 外面:草花文・圓線 生産地:肥前 年代:18世紀後半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:高台内裏鉢あり(方形舟内に削れた「福」?)。
29	磁器 染付碗	法量:底径(4.4) 残存率:底部完全 外面:草花文・圓線 生産地:肥前 年代:18世紀後半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:くらわんか手。高台内裏鉢あり(削れた「大明製」)。

第4表 出土遺物観察表(1)

30	磁器 染付碗	法量：底径4.0 残存率：底部元存 外面：二重網目文 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：くらわんか手。
31	磁器 染付碗	法量：口径(9.8) 底径3.9 器高5.2 残存率：口縁部～底部1/4 外面：二重網目文 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区8号土坑 備考：くらわんか手。高台覆付砂付盤。
32	磁器 染付碗	法量：口径(4.5) 残存率：底部3/4 外面：宝文・圓線 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：くらわんか手。
33	磁器 染付碗	法量：口径(8.6) 底径(3.1) 器高：2.8 残存率：口縁部～底部2/3 内面：文様帯・草花文？ 圓線 外面：草花文・圓線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：朝鮮形輪。高台内裏路あり「富貴長壽」。34とセツ。
34	磁器 染付碗	法量：口径(10.8) 底径(4.3) 器高(5.6) 残存率：口縁部～底部1/2 内面：文様帯・草花文？ 圓線 外面：草花文・圓線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：朝鮮形輪。高台内裏路あり「富貴長壽」。33とセツ。
35	磁器 染付碗	法量：口径(10.4) 底径(4.1) 器高：2.7 残存率：口縁部～底部2/3 内面：四方擇文・五弁花・西線 外面：青磁釉 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：青磁釉付。朝鮮形輪。
36	磁器 染付碗	法量：口径(11.6) 底径：4.3 高さ：2.7 残存率：口縁部～底部1/2 内面：四方擇文・コンニャク印判五弁花・圓線 外面：青磁釉 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：青磁釉付。朝鮮形輪。高台置付砂付蓋。
37	磁器 染付碗	法量：底径(4.5) 残存率：底部1/2 内面：五弁花・圓線 外面：青磁釉 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：二次3号土坑 備考：青磁釉付。高台内裏路あり「二重方形枠に崩れた福」。高台置付砂付蓋。
38	磁器 染付碗	法量：口径(7.5) 底径4.1 器高6.7 残存率：口縁部～底部1/2 内面：圓線 外面：雪持笠文・折れ松葉文・圓線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：筒形碗。
39	磁器 染付碗	法量：口径(7.7) 底径3.7 器高5.5 残存率：完全 内面：変形字？ 圓線 外面：雪持笠文・折れ松葉文・圓線 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：二次19号土坑 備考：筒形碗。
40	磁器 染付碗	法量：口径(7.2) 底径3.7 器高6.1 残存率：口縁部～底部1/2 内面：コンニャク印判五弁花・圓線 外面：菊花文・圓線 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：筒形碗。
41	磁器 染付碗	法量：口径(7.3) 底径3.4 器高5.6 残存率：ほぼ完全 内面：コンニャク印判五弁花・圓線 外面：菊花文・圓線など 生産地：不明 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：筒形碗。
42	磁器 染付碗	法量：口径9.2 底径3.3 器高5.2 残存率：口縁部～底部2/3 内面：昆虫文・圓線 外面：格子文・圓線 生産地：不明 年代：1770～1810年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：小広東碗。
43	磁器 染付碗	法量：口径(9.8) 底径3.8 器高5.7 残存率：口縁部～底部1/2 内面：昆虫文・圓線 外面：層文・生産地：不明 年代：1770～1810年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：小広東碗。
44	磁器 染付碗	法量：口径9.6 底径4.3 器高5.8 残存率：口縁部～底部2/3 外面：捺り文 生産地：不明 年代：1780～1840年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：広東碗。
45	磁器 染付碗	法量：口径11.6 底径3.6 器高5.7 残存率：口縁部～底部2/3 内面：圓線など 外面：花卉文？ 圓線 生産地：不明 年代：1780～1840年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：高台置付砂付蓋。
46	磁器 染付碗	法量：口径(11.2) 底径6.0 器高6.6 残存率：口縁部～底部1/2 内面：圓線 外面：鳥文・圓線など 生産地：不明 年代：1780～1840年代 出土遺構：二次13号土坑 備考：広東碗。47とセツ。
47	磁器 染付碗	法量：底径5.1 残存率：底部元存 内面：圓線・岩波文 外面：鳥文・圓線など 生産地：不明 年代：1780～1840年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：広東碗。46とセツ。
48	磁器 染付碗	法量：口径(11.7) 底径4.5 器高5.4 残存率：口縁部～底部2/3 内面：コンニャク印判五弁花・圓線・見込み蛇の目釉剥ぎ 外面：丸文・圓線 生産地：不明 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑
49	磁器 染付碗	法量：口径11.3 底径4.6 器高5.2 残存率：ほぼ完全 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ 外面：宝文・松葉文 生産地：不明 年代：19世紀 出土遺構：一次B区遺構 備考：釉剥ぎ部分に酸化アルミナ塗布。
50	磁器 染付碗	法量：口径(11.1) 底径4.0 器高5.1 残存率：口縁部～底部1/2 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ 外面：帆掛船文 生産地：薩摩？ 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：釉剥ぎ部分に酸化アルミナ塗布。
51	磁器 染付碗	法量：口径9.9 底径3.6 器高5.5 残存率：ほぼ完全 内面：文様帯・岩波文・圓線 外面：梅樹文？・文様帯・圓線 生産地：不明 年代：1810～1860年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。52とセツ。
52	磁器 染付碗	法量：口径(8.8) 底径3.5 器高2.9 残存率：口縁部～底部2/3 内面：文様帯・岩波文・圓線 外面：梅樹文？・文様帯・圓線 生産地：不明 年代：1810～1860年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。51とセツ。
53	磁器 染付碗	法量：口径10.3 底径3.4 器高5.8 残存率：ほぼ完全 内面：文様帯・崩れた松竹梅文？・圓線 外面：草花文？・圓線 生産地：不明 年代：1810～1860年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。54とセツ。
54	磁器 染付碗	法量：口径3.0 器高2.8 残存率：口縁部～底部1/2 内面：文様帯・崩れた松竹梅文？・圓線 外面：草花文？・圓線 生産地：不明 年代：1810～1860年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。53とセツ。
55	磁器 染付碗	法量：口径10.6 底径4.0 器高5.8 残存率：ほぼ完全 内面：変形字・圓線 外面：草花文？・圓線 生産地：薩摩 年代：19世紀中頃 備考：端反碗。54とセツ。
56	磁器 染付碗	法量：口径9.6 底径4.2 器高5.6 残存率：口縁部～底部2/3 内面：四方擇文・岩波文・圓線 外面：四方擇文・唐草文・蓮弁文・圓線 生産地：薩摩 年代：19世紀中頃 出土遺構：一次A区8号土坑 備考：端反碗。55とセツ。
57	磁器 染付碗	法量：口径7.8 底径3.1 器高4.2 残存率：口縁部～底部3/4 内面：？ 外面：梵字文 生産地：漸戸・美濃 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。口紅装飾。
58	磁器 染付碗	法量：口径(7.5) 底径2.8 器高3.0 残存率：口縁部～底部1/2 内面：仙芝祝寿文 外面：仙芝祝寿文 生産地：漸戸・美濃 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：端反碗。蛇の日高台。口紅装飾。
59	磁器 染付碗	法量：口径(8.6) 底径3.3 器高5.6 残存率：口縁部～底部1/2 内面：昆虫文・圓線 外面：矢羽根文・蓮弁文・圓線 生産地：肥前 年代：1820～1860年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：漫呑碗（腰の張った丸碗）。

第5表 出土遺物観察表（2）

60	磁器 染付皿	法量：口径7.6 底径：3.8 器高：4.3 残存率：口縁部～底部2/3 内面：二重格子文・團線 生産地：肥前 年代：不明 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：蓋付碗、口縁部無鉢。
61	磁器 染付皿	法量：口径8.6 底径5.1 器高：7.8 残存率：ほぼ完形 内面：團線・山水文 外面：團線・鳥文など 生産地：不明 年代：1820～1860年代 出土遺構：一次A区8号土坑 備考：湯呑瓶。高台内裏鉢あり(方形体に変形字)。
62	磁器 染付碗	法量：口径7.2 底径3.3 器高：5.9 残存率：口縁部～底部3/4 外面：團線など 生産地：不明 年代：1820～1860年代 出土遺構：二次3号土坑 備考：湯呑碗。高台内裏鉢あり。
63	磁器 染付皿	法量：口径(29.1) 底径：17.5 器高：4.3 残存率：口縁部～底部1/3 内面：山水文? 生産地：肥前 年代：19世紀? 出土遺構：一次A区8号土坑 備考：口紅装飾。團線引き法。高台内にハリ支え痕×1あり。
64	磁器 染付皿	法量：口径(31.4) 残存率：口縁部1/3 内面：雲文など 生産地：肥前 年代：19世紀? 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。團線引き法。
65	磁器 染付皿	法量：口径(29.8) 残存率：口縁部1/4 内面：雲文など 生産地：肥前 年代：19世紀? 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。團線引き法。
66	磁器 染付皿	法量：底径(18.8) 残存率：底部1/4 内面：牡丹文・團線など 外面：團線 生産地：肥前 年代：18世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：高台内にハリ支え痕×3以上あり。
67	磁器 染付皿	法量：口径20.4 底径：16.6 器高：3.9 残存率：完形 内面：花虫文・草花文・宝文など 外面：團線など 生産地：肥前 年代：1660～1690年代 出土遺構：二次25号土坑 備考：芙蓉手。輪花。高台内にハリ支え痕×1あり。
68	磁器 染付皿	法量：口径(20.8) 底径：13.1 器高：3.5 残存率：口縁部～底部2/3 内面：蝶唐草文・團線・花唐草文 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。高台内裏鉢あり(二重方形枠「福満」)ハリ支え痕×1。
69	磁器 染付皿	法量：口径21.6 底径：11.4 器高：4.0 残存率：口縁部～底部4/5 内面：扇文・花虫文・團線など 外面：唐草文・團線 生産地：不明 年代：18世紀 出土遺構：一次B区5号土坑 備考：高台内にハリ支え痕×1あり。
70	磁器 染付皿	法量：口径(14.0) 底径(6.0) 器高：3.1 残存率：口縁部～底部1/4 内面：草花文?・團線など 生産地：肥前 年代：1630～1650年代? 出土遺構：一次A区14号土坑 備考：初期伊万里。釉薬茎掛け。
71	磁器 染付皿	法量：底径(5.7) 残存率：底部1/2 内面：草花文?・團線など 生産地：肥前 年代：1640～1670年代 出土遺構：二次道路状遺構 備考：初期伊万里。釉薬茎掛け。
72	磁器 染付皿	法量：口径(13.4) 底径(6.1) 器高：3.3 残存率：口縁部～底部1/4 内面：團線など 生産地：肥前 年代：1650～1670年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：初期伊万里。釉薬茎掛け。
73	磁器 瑠璃釉皿	法量：底径6.6 残存率：底部1/2 内面：草花文 生産地：肥前 年代：1650～1670年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：瑠璃付け。
74	磁器 染付皿	法量：口径(13.7) 底径(8.6) 器高：3.0 残存率：口縁部～底部1/5 内面：草花文?・團線など 外面：團線 生産地：肥前 年代：17世紀後半 出土遺構：一次A区14号土坑 備考：高台内裏鉢あり(斜脚付)。
75	磁器 染付皿	法量：口径(14.1) 底径(7.5) 器高：2.9 残存率：口縁部～底部1/4 内面：牡丹文・團線など 外面：團線 生産地：肥前 年代：17世紀後半 出土遺構：一次A区14号土坑 備考：口虹装飾(波瀬による)。高台内裏鉢あり(青)。
76	磁器 白磁皿	法量：口径(12.4) 底径(8.4) 器高：4.1 残存率：口縁部～底部1/3 生産地：肥前 年代：1680～1700年代 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：型打成形。南川原窯／辻窯の製品か?
77	磁器 染付皿	法量：口径(14.2) 底径(7.2) 器高：4.6 残存率：底部完全 内面：唐草文・松竹梅文・團線 外面：花唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀? 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。高台内裏鉢あり「太明成化年製」。
78	磁器 染付皿	法量：口径12.8 底径7.8 器高：4.6 残存率：口縁部～底部2/3 内面：コンニャック印葉五弁花・草花文・團線 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区14号土坑 備考：輪花。口虹装飾。高台内裏鉢あり(削れた)「大明年製」。
79	磁器 染付皿	法量：口径13.6 底径8.2 器高：4.4 残存率：ほぼ完形 内面：花文・蝶形文 外面？ 生産地：肥前 年代：18世紀末～19世紀中葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。團線引き法。底部蛇の目凹型高台(高)。
80	磁器 染付皿	法量：口径13.8 底径8.6 器高：3.7 残存率：底部完全 内面：花文・手草花文・團線など 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀中葉 出土遺構：一次A区14号土坑 備考：輪花。底部蛇の目凹型高台(高)。
81	磁器 染付皿	法量：口径12.6 底径7.4 器高：3.1 残存率：ほぼ完形 内面：草花文? 生産地：肥前 年代：18世紀末～19世紀中葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。口虹装飾(波瀬による)。底部蛇の目凹型高台(高)。
82	磁器 染付皿	法量：口径(13.0) 底径7.5 器高：3.1 残存率：口縁部～底部2/3 内面：櫻蘭山水文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀末～19世紀中葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。口虹装飾。底部蛇の目凹型高台(高)。
83	磁器 染付皿	法量：口径(12.8) 底径7.4 器高：3.1 残存率：底部完全 内面：草花文・蝶文 生産地：肥前 年代：18世紀末～19世紀中葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。底部蛇の目凹型高台(高)。
84	磁器 染付皿	法量：口径(13.0) 底径6.9 器高：4.1 残存率：口縁部～底部2/3 内面：草紙文・團線 生産地：不明 年代：19世紀? 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輪花。内面に足付ママ痕。底部蛇の目凹型高台(高)。
85	磁器 染付皿	法量：口径14.7 底径9.8 器高：4.1 残存率：口縁部～底部1/2 内面：櫻蘭山水文・團線 外面：唐草文・團線 生産地：不明 年代：18世紀中葉～19世紀前葉 出土遺構：一次A区7号土坑 備考：玉縁口線。蛇の目凹型高台(低)。
86	磁器 染付皿	法量：口径(14.0) 底径7.7 器高：3.5 残存率：底部完全 内面：笠文?・團線 外面：團線など 生産地：不明 年代：18世紀中葉～19世紀前葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：蛇の目凹型高台(低)。
87	磁器 染付皿	法量：口径(11.2) 底径(7.2) 器高：2.9 残存率：口縁部～底部1/2 内面：二重格子文・團線 生産地：肥前 年代：1820～1860年代 出土遺構：二次19号土坑 備考：玉縁口線。内面蛇の目凹型高台(低)。
88	磁器 染付皿	法量：底径9.0 残存率：底部1/2 内面：草花文?・團線 外面：團線など 生産地：肥前 年代：18世紀中葉～19世紀前葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：蛇の目凹型高台(低)。高台内裏鉢あり「富貴長春」。
89	磁器 染付皿	法量：口径(14.2) 底径8.3 器高：3.5 残存率：口縁部～底部2/3 内面：雪輪草花文・團線など 外面：團線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑

第6表 出土遺物観察表(3)

90	磁器 染付皿	法量：口径(13.8) 底径(7.7) 器高3.1 残存率：口縁部～底部1/3 内面：雪輪草花文・コンニャク印判五弁花 外面：團線など 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑
91	磁器 染付皿	法量：口径14.4 底径9.6 器高4.5 残存率：ほぼ完形 内面：七円文・手描き五弁花・團線 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀末～19世紀初葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：蛇の目凹型高台(高)。
92	磁器 染付皿	法量：口径(12.0) 底径8.0 器高3.1 残存率：口縁部～底部1/2 内面：波濤文？・團線など 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀後半～19世紀初葉 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：蛇の目凹型高台(高)。
93	磁器 染付皿	法量：口径(14.0) 底径(7.8) 器高2.9 残存率：口縁部～底部1/2 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ・花唐草文・コンニャク印判五弁花・團線 生産地：不明 年代：18世紀後半？ 出土遺構：二次ビット
94	磁器 染付皿	法量：口径(13.8) 底径5.4 器高4.0 残存率：口縁部～底部1/3 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ・花唐草文・コンニャク印判五弁花・團線 生産地：不明 年代：18世紀後半？ 出土遺構：一次A区5号土坑
95	磁器 染付皿	法量：口径(12.4) 底径(3.2) 器高3.7 残存率：口縁部～底部2/1 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ・二重斜格子文・團線 生産地：肥前 年代：19世紀代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：釉剥ぎ部分に酸化アルミニナ塗布。
96	磁器 染付皿	法量：口径(12.0) 底径3.9 器高3.4 残存率：底部完全 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ・二重斜格子文・團線 生産地：不明 年代：19世紀代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：釉剥ぎ部分に酸化アルミニナ塗布。
97	磁器 染付皿	法量：口径(13.4) 底径5.6 器高3.6 残存率：口縁部～底部2/3 内面：見込み蛇の目釉剥ぎ・笠文 生産地：不明 年代：19世紀代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：釉剥ぎ部分に酸化アルミニナ塗布。
98	磁器 染付皿	法量：口径(10.2) 底径6.3 高さ2.7 残存率：口縁部～底部1/2 内面：花唐草文・團線 外面：花唐草文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀前半 出土遺構：二次19号土坑 備考：輸花。
99	磁器 染付皿	法量：口径9.8 底径4.7 器高2.8 残存率：ほぼ完形 内面：草花文？ 生産地：肥前 年代：19世紀前半？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輸花。
100	磁器 染付皿	法量：口径10.3 底径5.8 器高2.7 残存率：口縁部～底部1/2 内面：？ 外面：宝文 生産地：肥前 年代：19世紀前半？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輸花・墨書き技法。
101	磁器 染付皿	法量：口径(10.8) 底径6.0 器高2.8 残存率：口縁部～底部1/4 内面：團刻の草花文など 生産地：肥前 年代：18世紀代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：型打成形・輸花。口紅装飾・墨書き技法。
102	磁器 染付皿	法量：口径10.0 底径5.8 器高2.6 残存率：口縁部～底部5/4 内面：花文・斜格子文 生産地：肥前 年代：19世紀前半？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輸花・墨書き技法。
103	磁器 染付皿	法量：口径10.4 底径6.0 器高2.4 残存率：口縁部～底部2/3 内面：樓閣山水文・團線 外面：折松葉文・團線 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑
104	磁器 染付皿	法量：口径(9.7) 底径(6.4) 器高2.4 残存率：口縁部～底部1/2 内面：團線など 外面：型線など 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑
105	磁器 染付皿	法量：口径5.6 底径3.1 器高1.1 残存率：口縁部～底部3/4 内面：山水文 生産地：肥前 出土遺構：一次A区遺構外 備考：口径最も小さい。
106	磁器 白磁皿	法量：口径(9.0) 底径(5.5) 器高2.3 残存率：口縁部～底部1/2 内面：陰刻の壽字文 生産地：瀬戸美濃 年代：19世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：木型打ち込み。
107	磁器 染付鉢	法量：口径17.4 底径9.0 器高8.5 残存率：口縁部～底部2/3 内面：草花文・蝶文など 外面：草花文・蝶文など 生産地：肥前 年代：1780～1860年代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：八角鉢。
108	磁器 染付鉢	法量：口径(10.0) 底径(5.0) 器高5.8 残存率：口縁部～底部1/3 内面：？ 外面：山水文 生産地：肥前 年代：1780～1860年代？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：八角鉢。
109	磁器 染付鉢	法量：口径20.4 底径12.5 器高6.7 残存率：口縁部～底部2/3 内面：樓閣山水文など 外面：？ 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輸花。
110	磁器 染付鉢	法量：口径(15.5) 底径9.2 高さ4.6 残存率：口縁部～底部1/2 内面：唐草文・手描き五弁花・團線 外面：唐草文・團線 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：輸花。
111	磁器 染付鉢	法量：口径14.6 底径8.8 器高6.4 残存率：ほぼ完形 内面：四方彌文・團線など 外面：青磁釉 生産地：肥前 年代：18世紀後半？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：底部蛇の目凹型高台(低)・高台内裏銘あり(二重方形内「福」)。
112	磁器 染付鉢	法量：底径6.1 残存率：底部完全 内面：團線など 外面：團線など 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：高台内裏銘あり(二重方形内に「？」)。
113	磁器 染付猪口	法量：口径7.4 底径4.6 器高5.4 残存率：口縁部～底部2/3 外面：四方彌文・松竹梅文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：薔薇猪口。
114	磁器 染付猪口	法量：口径(6.4) 底径5.6 器高5.1 残存率：口縁部～底部1/2 外面：松竹梅文・團線 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：薔薇猪口。
115	磁器 染付猪口	法量：口径7.2 底径5.0 器高6.7 残存率：口縁部～底部1/2 外面：團線など 生産地：肥前 年代：18世紀後半 出土遺構：二次19号土坑 備考：接部で折れ口。
116	磁器 染付猪口	法量：口径6.6 底径4.8 器高4.8 残存率：口縁部～底部1/2 外面：草花文・團線 生産地：肥前？ 年代：18世紀後半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：薔薇猪口。
117	磁器 染付仏頭	法量：口径(8.0) 底径4.4 器高6.8 残存率：口縁部～底部1/3 外面：瓊杵文・團線 生産地：肥前？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：接部で折れ外反。
118	磁器 染付仏頭	法量：口径(7.1) 底径4.0 器高5.4 残存率：口縁部～底部1/3 外面：唐草文・團線 生産地：肥前？ 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：接部で折れ外反。
119	磁器 染付仏頭	法量：口径(6.6) 底径3.4 器高5.7 残存率：口縁部～底部1/3 外面：草花文 生産地：肥前 出土遺構：一次A区5号土坑

第7表 出土遺物類聚表(4)

120	磁器 白磁仙飯器	法量:口径5.3 底径3.6 器高4.5 残存率:ほぼ完形 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑
121	磁器 染付瓶	法量:底径9.2 残存率:頸部~底部1/2 外面:牡丹文・團線など 生産地:肥前 出土遺構:一次A区3号・5号土坑
122	磁器 染付瓶	法量:底径8.0 残存率:頸部~底部1/2 外面:草花文?・團線など 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:絵付後に白泥で刷毛目を施す。
123	磁器 染付瓶	法量:口径2.7 残存率:口縁部~頸部1/2 外面:山水文・團線など 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑・二次3号土坑 備考:窯徳利。
124	磁器 瑪瑙釉瓶	法量:口径4.8 底径3.9 器高(10.8) 残存率:口縁部~底部2/3 生産地:肥前 年代:18世紀後半~19世紀前半 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:御酒酒器。
125	磁器 色々瓶	法量:底径4.4 残存率:頸部~底部1/2 外面:松竹梅文?・團線 生産地:肥前 年代:18世紀後半~19世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:御酒酒器。
126	磁器 染付花生	法量:口径9.5 底径6 器高15.9 残存率:口縁部~底部1/3 外面:松文? 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:背面が平坦。壁に掛けていたか。
127	磁器 油壺?	法量:底径5.0 残存率:頸部~底部1/2 外面:墨苞文・團線など 生産地:肥前 出土遺構:一次A区8号土坑
128	磁器 染付瓶	法量:口径(8.4) 残存率:口縁部~頸部1/4 外面:帆振船文?など 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:仏花瓶。
129	磁器 染付瓶	法量:口径9.3 底径3.7 器高5.5 残存率:口縁部~底部4/5 内面:雷文帯・崩れた松竹梅文?・團線 外面:牡丹文・團線 生産地:不明 年代:1870~1900年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:コバリト染付。型紙摺り。
130	磁器 染付皿	法量:口径12.9 底径5.8 器高3.3 残存率:ほぼ完形 内面:松竹梅文・検道文など 外面:唐草文・團線 生産地:不明 年代:1870~1900年代 出土遺構:二次道路状遺構 備考:コバリト染付。型紙摺り。
131	磁器 染付鉢	法量:口径(16.0) 底径(10.0) 器高6.5 残存率:口縁部~底部1/3 内面:牡丹文など 外面:牡丹文・團線 生産地:不明 年代:1870~1900年代 出土遺構:一次A区19号土坑 備考:コバリト染付。型紙摺り。
132	陶器 鉄輪灰皿	法量:底径4.0 残存率:底部完存 内面: ? 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:二次道路状遺構 備考:灰皿。塗装済。高台内兜巾あり。
133	陶器 皿	法量:底径(3.8) 残存率:底部1/2 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:灰釉。内面見込みに胎土目×2以上あり。
134	陶器 皿	法量:底径(5.0) 残存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:灰釉。高台内兜巾あり。
135	陶器 碗	法量:底径(5.0) 残存率:底部1/2 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:灰釉。高台内兜巾あり。
136	陶器 皿	法量:底径4.4 残存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1610~1690年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:灰釉。内面見込みに砂目×3あり。
137	陶器 碗	法量:口径(10.1) 底径(4.6) 高さ7.7 残存率:口縁部~底部1/3 生産地:肥前 年代:1610~1650年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:天目碗形。透明釉。高台内兜巾あり。
138	陶器 碗	法量:底径(4.1) 残存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1610~1650年代 出土遺構:一次A区5号土坑・二次3号土坑 備考:透明釉。高台内兜巾あり。高台量付に砂目付箋。
139	陶器 碗	法量:底径(5.3) 残存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1650~1690年代 出土遺構:一次A区遺構外 備考:透明釉。
140	陶器 皿	法量:底径4.9 残存率:底部2/3 内面:山水文 生産地:肥前 年代:1650~1690年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:透明釉。京焼風陶器。高台内側印あり「清水」。
141	陶器 皿	法量:底径4.0 残存率:底部完存 内面:山水文 生産地:肥前 年代:18世紀前半? 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:透明釉。京焼風陶器。文様は著しく崩れる。
142	陶器 碗	法量:底径(4.7) 残存率:底部1/4 外面:山水文 生産地:肥前 年代:1650~1690年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:透明釉。京焼風陶器。
143	陶器 皿	法量:底径3.3 残存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1650~1690年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:透明釉。京焼風陶器。
144	陶器 碗	法量:口径9.3 底径(3.9) 器高4.8 残存率:口縁部~底部4/5 外面:斜格子文 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:せんじ碗。透明釉。内面見込みに目跡×2以上あり。
145	陶器 碗	法量:口径(9.2) 底径3.5 器高5.5 残存率:口縁部~底部1/2 外面:笛文 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:せんじ碗。透明釉。
146	陶器 皿	法量:底径(2.7) 残存率:底部完存 生産地:肥前 出土遺構:一次A区19号土坑 備考:透明釉。京焼風陶器。内面見込みに目跡×3あり。
147	陶器 碗	法量:底径4.2 残存率:底部1/2 内面:透明釉 外面:銅線釉 生産地:肥前 年代:1690~1780年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:内外面の釉薬掛け分けける。
148	陶器 碗	法量:底径3.7 残存率:底部完存 内面:透明釉 外面:銅線釉 生産地:肥前 年代:1690~1780年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:内外面の釉薬掛け分けける。
149	陶器 皿	法量:底径4.3 残存率:底部完存 内面:銅線釉 吊込み蛇の目釉剥ぎ 外面:透明釉 生産地:肥前 年代:1690~1780年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:内外面の釉薬掛け分けける。

第8表 出土遺物調査表(5)

150	陶器 碗	法量:口径(11.0) 残存率:口縁部1/4 内面:刷毛目 外面:刷毛目 生産地:肥前 年代:1690~1780年代 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:白泥による刷毛目。
151	陶器 碗	残存率:体部1/6 内面:刷毛目 外面:丸文 生産地:肥前 年代:1690~1780年代 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:白泥による刷毛目。いわゆる虫手。
152	陶器 皿	法量:口径(33.7) 底径13.0 器高10.5 残存率:口縁部~底部1/3 内面:刷毛目・鉄輪・銅鋸輪 生産地:肥前 年代:17世紀後半~18世紀初頭? 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:二彩唐津。内面見込み・高台疊付に砂胎土目×6。
153	陶器 皿	法量:口径(21.4) 底径7.7 器高5.5 残存率:口縁部~底部1/3 内面:刷毛目・鉄輪・銅鋸輪 生産地:肥前 年代:17世紀後半~18世紀初頭? 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:二彩唐津。内面見込み・高台疊付に砂胎土目×3以上。
154	陶器 皿	法量:口径(33.6) 底径13.8 器高11.0 残存率:口縁部~底部1/2 内面:象嵌 生産地:肥前? 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:白泥による象嵌(三島手)。内面見込み・高台疊付に砂胎土目×3以上。
155	陶器 碗	法量:口径(12.5) 底径4.6 器高5.2 残存率:口縁部~底部1/2 外面:体部下半に寅須による唐千鳥印×1 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系。白物。
156	陶器 碗	法量:底径4.5 残存率:底部完存 外面:体部下半に寅須による唐千鳥印×1 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系。白物。高台内を窓状に削り取る。
157	陶器 碗	法量:底径5.3 残存率:底部完存 生産地:薩摩 年代:17世紀中頃? 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系。白物。冷水窓の製品か。
158	陶器 碗	法量:底径3.8 残存率:底部完存 外面:体部下半に寅須による唐千鳥印×1 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系。白物。
159	陶器 碗	法量:底径3.3 残存率:底部完存 外面:体部下半に寅須による唐千鳥印×1 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系。白物。
160	陶器 碗	法量:口径(10.6) 底径4.1 器高6.1 残存率:口縁部~底部1/2 生産地:不明 出土遺構:二次道路状遺構 備考:端反碗。灰釉?を高台内まで施す。
161	陶器 皿	法量:底径5.4 残存率:底部完存 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:灰釉?を高台内まで施す。高台内に鰐革型の刻印あり。
162	陶器 碗	法量:口径11.6 底径5.1 器高7.0 残存率:口縁部~底部4/5 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:二次ビット 備考:龍門司系。鉄輪を高台内まで施す。二次焼成の跡跡あり。
163	陶器 皿	法量:口径10.7 底径4.0 器高6.2 残存率:口縁部~底部1/2 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉を高台内まで施す。
164	陶器 碗	法量:口径(13.3) 底径4.2 器高6.3 残存率:口縁部~底部1/3 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。透明釉を高台内まで施す。
165	陶器 碗	法量:口径(6.4) 底径3.8 器高5.5 残存率:口縁部~底部1/3 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉を高台内まで施す。
166	陶器 皿	法量:口径(9.6) 底径4.0 器高4.1 残存率:口縁部~底部1/3 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。透明釉を高台内まで施す。
167	陶器 皿	法量:底径4.6 白釉率:底部完存 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。鉄輪を高台内まで施す。
168	陶器 皿	法量:口径9.5 底径3.0 器高4.9 残存率:口縁部~底部2/3 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀前半 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。鉄輪を高台内まで施す。
169	陶器 碗	法量:口径12.1 底径4.3 器高5.9 残存率:口縁部~底部1/2 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:龍門司系。白化粧。鉄輪。高台内は露胎。
170	陶器 碗	法量:口径11.4 底径4.5 器高5.6 残存率:ほぼ完形 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:龍門司系。鉄輪。高台内は露胎。
171	陶器 皿	法量:口径(11.3) 底径4.4 器高4.5 残存率:口縁部~底部1/2 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。鉄輪。高台内は露胎。
172	陶器 皿	法量:底径4.3 残存率:底部完存 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。鉄輪。高台内は露胎。
173	陶器 皿	法量:口径(10.6) 底径4.0 器高3.4 残存率:口縁部~底部1/4 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉。高台内は露胎。
174	陶器 碗	法量:口径(8.1) 底径3.3 器高3.7 残存率:口縁部~底部1/2 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区19号土坑 備考:龍門司系。白化粧。鉄輪。高台内は露胎。
175	陶器 皿	法量:口径6.4 底径3.0 器高2.5 残存率:口縁部~底部4/5 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉。高台内は露胎。
176	陶器 茶入	法量:底径5.0 残存率:底部完存 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉。底部回転糸切口(辰)。
177	陶器 碗	法量:口径(9.0) 底径3.8 器高4.5 残存率:口縁部~底部1/2 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:龍門司系。せんじ窓。白化粧。透明釉。内面見込みに胡麻目×3。高台内は露胎。
178	陶器 皿	法量:口径(15.7) 底径(5.2) 器高5.2 残存率:口縁部~底部1/3 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 外面:斜格子文? 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉。高台内は露胎。
179	陶器 皿	法量:口径(12.6) 底径4.6 器高3.5 残存率:口縁部~底部1/2 内面:見込み蛇の目駆刺ぎ 斜格子文? 生産地:薩摩 年代:18世紀後半~19世紀 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系。白化粧。透明釉。高台内は露胎。

第9表 出土遺物観察表(6)

180	陶器皿	法量：口径(13.8) 底径5.4 器高3.3 殮存率：底部完存 内面：見込み蛇の目輪刺ぎ 外面：斜格子文？ 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。白化粧。透明釉。高台内は露胎。
181	陶器皿	法量：口径(10.0) 底径3.8 器高5.0 殮存率：口縁部～底部1/2 内面：見込み蛇の目輪刺ぎ 生産地：薩摩 年代：18世紀前半 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。輪花。白化粧。透明釉を高台内まで施す。
182	陶器鉢	法量：口径(15.8) 殮存率：口縁部1/2 内面：鉛釉 外面：斜乳頭 生産地：薩摩 年代：19世紀以降 出土遺構：二次19号土坑 備考：龍門司系。外面部の施釉掛け分ける。
183	陶器皿	法量：口径(10.8) 底径4.8 器高2.4 殮存率：口縁部～底部1/2 生産地：薩摩 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。鉄釉。内・外底面に胡麻目×3以上。回転糸切り痕(右)。
184	陶器皿	法量：口径(10.1) 底径4.4 器高1.8 殮存率：口縁部～底部1/3 生産地：薩摩 年代：19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。内・外底面に胡麻目×2以上。回転糸切り痕(右)。
185	陶器皿	法量：口径(9.7) 底径4.5 器高2.6 殯存率：口縁部～底部2/3 内面：見込み蛇の目輪刺ぎ 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。鉄釉。回転糸切り痕(右)。
186	陶器皿	法量：口径(9.9) 底径4.5 器高2.1 殯存率：口縁部～底部1/3 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。内・外底面に胎目×4。回転糸切り痕後、ヘラ削り調整。
187	陶器皿	法量：受部径(8.2) 口径(10.5) 底径6.0 器高5.9 殯存率：口縁部～底部2/3 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。胎輪？底部回転糸切り痕(右)。
188	陶器皿	法量：受部径(7.1) 口径(9.2) 底径5.2 器高5.7 殯存率：口縁部～底部4/5 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。胎輪？底部回転糸切り痕(右)。
189	陶器皿	法量：受部径(6.9) 口径(7.9) 底径5.6 器高6.6 殯存率：口縁部～底部2/3 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区7号土坑 備考：龍門司系。灯明皿。鉄釉。底部回転糸切り痕(右)。
190	陶器皿	法量：受部径(5.8) 口径6.8 底径4.3 器高5.4 殯存率：口縁部～底部4/5 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号・8号土坑 備考：元立院系か。灯明皿。底部回転糸切り痕(右)。
191	陶器乗檻	法量：口径(4.9) 底径5.0 器高13.3 殯存率：口縁部～底部4/5 生産地：薩摩？ 出土遺構：二次19号土坑 備考：粘土貼り付けによる取手あり。
192	陶器乗檻	法量：口径(4.5) 底径4.2 器高5.5 殯存率：口縁部～底部4/5 生産地：薩摩？ 出土遺構：一次A区5号土坑
193	陶器乗檻	法量：底径4.0 器高5.2 殯存率：底部完存 生産地：薩摩？ 出土遺構：一次A区5号土坑
194	陶器仏飯器	法量：口径8.0 底径4.3 器高4.4 殯存率：口縁部～底部4/5 内面：見込み蛇の目輪刺ぎ 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。白化粧。透明釉。
195	陶器仏飯器	法量：口径5.8 器高3.6 器高5.2 殯存率：完形 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区遺構外 備考：元立院系か。鉄釉。底部回転糸切り痕(左)。
196	陶器仏飯器	法量：口径(8.4) 底径4.8 器高4.7 殯存率：口縁部～底部1/2 内面：見込み蛇の目輪刺ぎ 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。透羽輪。
197	陶器仏飯器	法量：口径6.0 底径3.9 器高4.9 殯存率：口縁部～底部4/5 生産地：薩摩 年代：17世紀後半～18世紀前半？ 出土遺構：一次A区11号土坑 備考：元立院系。鉄釉。
198	陶器仏飯器	法量：底径3.7 殯存率：底部完存 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。白化粧。透明釉。
199	陶器仏飯器	法量：底径3.7 殯存率：底部完存 生産地：薩摩 年代：18世紀後半～19世紀 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：龍門司系。白化粧。透明釉。
200	陶器甕	法量：口径(33.0) 殯存率：口縁部1/10 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
201	陶器甕	法量：口径(28.4) 殯存率：口縁部1/6 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
202	陶器甕	法量：口径(35.0) 殯存率：口縁部1/6 脊部：浅い凹線が3条巡る 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
203	陶器甕	法量：口径(35.8) 殯存率：口縁部1/8 脊部：浅い凹線が3条巡る 体部：内面に当て具の痕跡あり 生産地：薩摩 出土遺構：二三次号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
204	陶器甕	法量：口径(27.8) 殯存率：口縁部1/10 脊部：浅い凹線が3条巡る 脊部：底面三角形の突帯が2条以上巡る 生産地：薩摩 出土遺構：二次道路状遺構 備考：苗代川系。
205	陶器甕	残存率：口縁部1/12 脊部：浅い凹線が3条巡る 脊部：断面三角形の突帯が2条以上巡る 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。
206	陶器甕	残存率：口縁部1/4 口縁部：縫帶をつまみ波打たせる 脊部：外面に沈線による装飾 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
207	陶器甕	法量：口径(32.2) 殯存率：口縁部1/4 口縁部：縫帶をつまみ波打たせる 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区8号土坑 備考：苗代川系。口縁部上面に目貝あり。
208	陶器甕	法量：口径(34.4) 殯存率：口縁部1/6 口縁部：縫帶をつまみ波打たせる 脊部：外面に2条の沈線と櫛描による装飾 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。
209	陶器甕	法量：口径(32.0) 殯存率：口縁部1/3 口縁部：縫帶をつまみ波打たせる 生産地：薩摩 出土遺構：一次A区5号土坑 備考：苗代川系。

第10表 出土遺物観察表(7)

210	陶器 壺	法量:口径(28.2) 残存率:口縁部1/4 口縁部:縁帯の下端のみ押さえ波打たせる 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面に胎土目(コマ目?)あり。
211	陶器 壺	法量:口径(26.4) 残存率:口縁部1/8 口縁部:縁帯をつまみ波打たせる 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区33号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
212	陶器 壺	法量:口径(26.2) 残存率:口縁部1/6 口縁部:縁帯をつまみ波打たせる 細部:内面に粘土塊を貼り付け、突起を形成 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
213	陶器 壺	法量:口径(28.0) 残存率:口縁部1/5 細部:外面上に粘土塊を貼り付け、突起を形成 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
214	陶器 壺	法量:口径(29.8) 残存率:口縁部1/5 細部:断面三角形の突帯が2条巡る 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。器壁厚く重量感あり。口縁部上面にコマ目あり。
215	陶器 壺	法量:口径(25.5) 残存率:口縁部1/5 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区23号土坑 備考:苗代川系。器壁厚く重量感あり。口縁部上面にコマ目あり。
216	陶器 壺	法量:口径(39.2) 残存率:口縁部1/8 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区遺構外 備考:苗代川系。器壁厚く重量感あり。口縁部上面にコマ目あり。
217	陶器 壺鉢	法量:口径(29.8) 残存率:口縁部1/8 細部:折り返して縁帯を形成。2条の突帯 横目:太目一単位10条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面に目あり。
218	陶器 壺鉢	法量:口径(30.7) 残存率:口縁部1/6 口縁部:折り返して縁帯を形成。2条の突帯 横目:太目一単位9条以上 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面に目あり。
219	陶器 壺鉢	法量:口径(32.1) 残存率:口縁部1/2 口縁部:やわらかく屈曲。2条の突帯 横目:太目一単位5条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
220	陶器 壺鉢	法量:口径(28.6) 残存率:口縁部1/2 口縁部:やわらかく屈曲。2条の突帯 横目:太目一単位4条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面に目あり。
221	陶器 壺鉢	法量:口径(22.8) 残存率:口縁部1/8 口縁部:外傾した丁字状 横目:太目一単位4条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。
222	陶器 壺鉢	法量:口径(32.4) 残存率:口縁部1/8 口縁部:外方に折れ縁帯を形成。縁帯下端を内側に巻き込む 横目:細目一単位10条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 錫部:苗代川系。
223	陶器 壺鉢	法量:口径(28.0) 残存率:口縁部1/5 口縁部:外方に折れ縁帯を形成 横目:細目一単位7条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
224	陶器 壺鉢	法量:口径29.0 底径15.3 器高13.4 残存率:口縁部～底部1/2 口縁部:外方に折れ縁帯を形成 横目:細目一単位7条 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目?あり。
225	陶器 壺鉢	法量:口径(21.9) 底径(12.6) 器高10.9 残存率:口縁部～底部1/2 横目:細目一単位7条 生産地:薩摩 出土遺構:二次路状遺構・コンクリート溜3 備考:苗代川系。
226	陶器 鉢	法量:口径29.6 底径23.8 器高9.4 残存率:口縁部～底部2/3 口縁部:直下に浅い凹線が2条巡る 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。
227	陶器 鉢	法量:口径(23.2) 底径(18.0) 器高5.3 残存率:口縁部～底部1/3 口縁部:外方に折れ縁帯を形成 生産地:薩摩 出土遺構:二次3号土坑・道路状遺構 備考:苗代川系。口縁部上面にコマ目あり。
228	陶器 鉢	法量:口径(33.8) 底径(16.0) 器高14.1 残存率:口縁部～底部1/4 生産地:薩摩 出土遺構:二次19号土坑 備考:苗代川系。底部内・外面上に目あり。口縁部上面にも目跡跡がある(胎土目?)。
229	陶器 植木鉢	法量:底径(16.0) 残存率:底部1/3 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。底部内・外面上に目あり。
230	陶器 植木鉢	法量:底径16.5 残存率:底部完存 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。
231	陶器 土瓶	法量:口径7.4 底径16.2 器高8.5 残存率:ほぼ完形 注口部:ため口。体部の孔は縦並びの2つ 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑・二次19号土坑 備考:苗代川系。体部下半に目×3あり。
232	陶器 土瓶	法量:口径6.8 残存率:口縁部～体部2/3 外面:鉤頭形 注口部:上面が扁平で独特の形状。体部の孔は1つ 生産地:薩摩 年代:19世紀 出土遺構:二次19号土坑 備考:羅門司茶。宋客用の酒器か。
233	陶器 土瓶蓋	法量:口径7.5 器高3.7 残存率:ほぼ完形 生産地:薩摩 出土遺構:二次19号土坑 備考:苗代川系。
234	陶器 土瓶蓋	法量:口径5.6 器高3.3 残存率:ほぼ完形 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系。
235	陶器 土瓶蓋	法量:口径3.4 器高2.4 残存率:ほぼ完形 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:苗代川系。
236	陶器 土瓶蓋	法量:口径5.6 器高3.0 残存率:口縁部～つまみ2/3 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:野原野。白物。
237	陶器 土瓶	残存率:注口部のみ 注口部:鉄砲口。体部の孔は1つ 生産地:薩摩? 出土遺構:一次A区5号土坑
238	陶器 土瓶	残存率:注後部のみ 注口部:粘土板を貼り付けて形成。体部の孔は1つ 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:苗代川系。他の土瓶と形態異なる。いやわる甘酒注?
239	陶器 土瓶	残存率:注後部のみ 注口部:ため口。体部の孔は3つ 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区3号土坑 備考:野原野。白物。

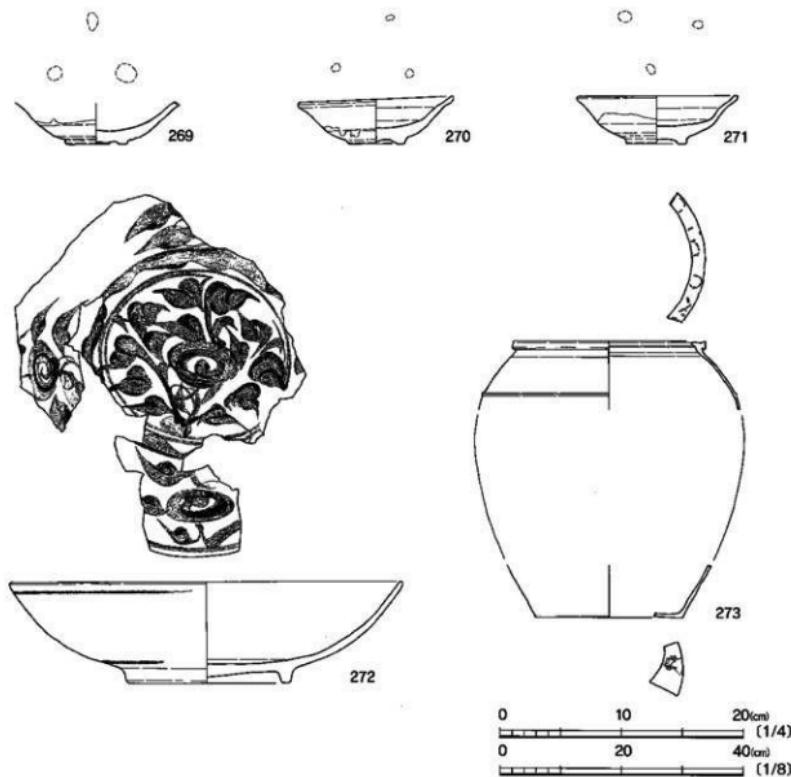
第11表 出土遺物観察表(8)

240	陶器 高杯	法量:口径(14.7) 底径8.4 器高11.6 殮存率:口縁部～底部2/3 内面:？ 生産地:薩摩 年代:18世紀後半～19世紀出土遺構:一次A区5号土坑 備考:龍門司系、白化粧、透明釉。
241	陶器 噴壺	法量:口径(9.5) 殮存率:口縁部～体部1/4 口縁部内面:圓線など 外面:圓線など 生産地:薩摩 年代:18～19世紀出土遺構:一次A区5号土坑 備考:堅野系?宋朝鉢寫。
242	陶器 瓶	法量:底径(6.1) 殮存率:口縁部欠 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区遺構外 備考:堅野系?耳に獸面をあしらう。
243	陶器 鈍利	法量:口径3.0 底径(6.8) 器高19.6 殮存率:口縁部～底部1/2 体部:指揮さえなどによる旋位のくぼみ 生産地:不明出土遺構:一次A区5号土坑 備考:へこみん。
244	陶器 壺	法量:口径(15.8) 殮存率:口縁部1/3 体部:内面に当て具の痕跡残る 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:苗代川系、口縁部上面に貝目あり。
245	陶器 壺	法量:口径13.2 殮存率:口縁部ほぼ完存 体部:粘土縁を貼り付け耳を形成 生産地:薩摩 出土遺構:二次遺構外 備考:苗代川系、双耳壺。
246	陶器 瓶	法量:底径2.8 殮存率:口縁部欠 腹部:外面に浅い凹線が5条巡る 腹部:内面はクロコの巻き上げ筋を強く残す 生産地:琉球 年代:19世紀作 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:荒焼。
247	陶器 壺	法量:口径15.0 底径23.2 器高70.4 殮存率:口縁部～底部1/2 腹部:粘土縁を貼り付け耳を形成 生産地:琉球 年代:19世紀作 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:荒焼。三直縁、底部外面に窯道員の落着痕×2以上あり。
248	陶器 碗	法量:口径(12.8) 底径4.5 器高5.4 殮存率:口縁部～底部1/4 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:天目碗、内面見込み付近の擦痕著しく、使用によるものか。黒色釉を高台内まで施す。
249	陶器 碗	法量:底径4.8 殮存率:底部完存 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:天目碗。鉄輪?をかけるか外側下面は螺旋。
250	陶器 皿	法量:口徑(14.4) 底徑(7.6) 器高4.7 殮存率:口縁部～底部1/4 内面:鉄繪と眞須による章絵? 生産地:京都 年代:18世紀? 出土遺構:一次A区遺構外 備考:向付。菊花状を呈する。外面に布目残り、型による成形。
251	陶器 皿	法量:口徑(14.4) 底徑(8.0) 器高4.8 殮存率:口縁部～底部1/6 内面:鉄繪による草花文? 生産地:京都 年代:18世紀? 出土遺構:一次A区14号土坑 備考:向付。菊花状を呈する。外面に布目残り、型による成形。
252	陶器 皿	法量:底径9.6 殮存率:底部2/3 内面:白泥と眞須による花文? 生産地:不明 出土遺構:一次A区3号・5号土坑・二次遺跡状遺構
253	陶器 皿	法量:口徑(20.8) 底徑8.0 器高2.8 殮存率:口縁部～底部1/2 内面:白泥と眞須による梅花文など 生産地:不明 出土遺構:一次A区8号土坑
254	陶器 皿	法量:口徑17.2 底徑11.6 器高3.4 殮存率:口縁部～底部2/3 内面:見込みはイッヂン掛け?による文字(短歌か?) 生産地:不明 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:器形は著しく不整形。型によるものか。
255	陶器 養水入れ	法量:高窓3.9 殮存率:口縁部～底部1/3 外面:?(鉄繪) 生産地:瀬戸・美濃? 出土遺構:一次A区5号土坑
256	陶器 油壺	法量:底径4.1 殮存率:体部～底部1/2 生産地:不明 出土遺構:一次A区遺構外
257	磁器 青磁灰落し	法量:口徑8.7 底徑5.7 器高4.3 殮存率:口縁部～底部4/5 外面:鏡文 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:内面も全面施釉。
258	磁器 青磁灰落し	法量:口徑5.3 殮存率:口縁部4/5 外面:鏡文 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:内面は露胎。
259	瓦質土器 火もらい	法量:底径12.4 器高17.0 殮存率:口縁部～底部1/2 体部:頂部に粘土紐による持ち手。正面に横円形、背面に扇形の窓を有する。底部:低い足か付く(三足か) 生産地:在地? 出土遺構:二次19号土坑
260	土器 火鉢	法量:口徑31.1 底径31.0 器高14.8 殮存率:口縁部～底部1/3 底部:やや高い板状の足が付く(三足か) 生産地:在地? 出土遺構:一次A区20号土坑 備考:全體的に粗雑なつくりで焼成も甘い。
261	陶器 香炉?	残存率:口縁部～底部1/3 体部:口縁部直下に長方形の透かし孔を配列、中位にも透かし孔(形態・範数不明)。白泥による梅花文。底部:底足を有する(おそらく三足) 生産地:薩摩 出土遺構:一次A区8号土坑 備考:堅野系。
262	陶器 鉢	法量:口徑(28.3) 底径(14.6) 器高15.0 殘存率:口縁部～底部1/3 外面:口縁部直下に丸めた粘土塊を貼り付け、竹管?で押さえられる 生産地:不明 出土遺構:二回追跡状遺構 備考:鉢脚。
263	陶器 片口	法量:口徑21.6 底径11.7 器高11.9 殮存率:口縁部～底部2/3 片口部:体部上半に取り付き、鉄鉗口のような形状 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:鉄鉗。口縁部上面に露胎。
264	陶器 瓶鉢	法量:口徑(18.2) 器高(2.0) 高さ12.1 殮存率:1/3 白面形態:模倣が著しく不明 台座文様:菱形の可能性あり 石材:砂岩 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:太目一單位9条 生産地:肥前 年代:1600～1650年代
265	陶器 瓶鉢	法量:口徑(23.8) 殮存率:口縁部1/4 口縁部:外方に肥厚し縁帶を形成 錫目:太目一單位10条 生産地:肥前 出土遺構:二次14号土坑 備考:縁帶外側の自然転がりかか部。重ね焼によるものか。
266	陶器 瓶鉢	法量:口徑(22.8) 殮存率:口縁部1/8 口縁部:外方に肥厚し縁帶を形成 錫目:太目一單位10条 生産地:肥前 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:縁帶外側のみ赤褐色を呈する(他は黄褐色)。重ね焼によるものか。
267	石製品 茶臼	法量:口面径(18.2) 器高(2.0) 高さ(12.1) 殮存率:1/3 白面形態:模倣が著しく不明 台座文様:菱形の可能性あり 石材:砂岩 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:太目。268とセットか?
268	石製品 茶臼	法量:受け皿径(38.8) 高さ11.2 殮存率:1/4 石材:砂岩 生産地:不明 出土遺構:一次A区5号土坑 備考:下臼、臼面は厚着しきっている。被熱の痕跡あり。267とセットか?
269	陶器 皿	法量:底径5.0 殮存率:底部完存 生産地:肥前 年代:1594～1610年代 出土遺構:二次井戸跡 備考:灰粒?外面下半は露胎。高台内突起あり。内面見込みに露胎自X3。

第12表 出土遺物調査表 (9)

270	陶器皿	法量:口径12.6 底径4.5 器高3.7 残存率:ほぼ完形 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:二次井戸跡 備考:鉄釉。外面下半は露胎。高台内兜巾あり。内面見込みに胎土目×3。
271	陶器皿	法量:口径13.0 底径4.8 器高4.0 残存率:口縁部1/4欠 生産地:肥前 年代:1594~1610年代 出土遺構:二次井戸跡 備考:鉄釉。外面下半は露胎。高台内兜巾あり。内面見込みに胎土目×3。
272	磁器皿	法量:口径(32.0) 底径13.0 器高8.3 残存率:口縁部~底部1/3 内面:花文・團線 外面:團線 生産地:中国福建・広東系 年代:17世紀初頭 出土遺構:二次井戸跡 備考:瓶製で全体的に黄釉がかかる。高台臺付に砂付蓋。
273	陶器甕	法量:口径(31.1) 残存率:口縁部1/4 脊部:肩に断面三角形の突起が1条巡る。内面に當て具痕残る 生産地:薩摩 出土遺構:二次井戸跡・14号土坑 備考:苗代川系。口縁部上面・底部外間に目貝あり。

第13表 出土遺物観察表 (10)



第15図 第二次調査井戸跡出土遺物 (269~272: S=1/4 273: S=1/8)

種別統計											
		第一次測量						土 坂			
		5	3	74	7	8	6	9	11	14	17
中 田	農地譜 無系		8	108	1	2		1	1	3	12
中 田	渠 道・ 渠 网		7	169					1	18	0
中 田	渠 道・ 渠 网		3	205						3	286
中 田	渠 道・ 渠 网		5	59	2	7	1	27	1	14	0
中 田	渠 道・ 渠 网		7	156						1	27
中 田	渠 道・ 渠 网		5	199						7	249
中 田	渠 道・ 渠 网		1	119						1	119
中 田	渠 道・ 渠 网		1	5	21	545	2	8	1	51	1
中 田	渠 道・ 渠 网		8	467		4	122		10	132	2
中 田	渠 道・ 渠 网		9	425		1	5		10	55	2
中 田	渠 道・ 渠 网		6	136						15	15
中 田	渠 道・ 渠 网		21	973						6	136
中 田	渠 道・ 渠 网		33	1276	3	198		3	22	1	74
中 田	渠 道・ 渠 网		37	1176	1	5	1	2			
中 田	渠 道・ 渠 网		30	670			1	7			
中 田	渠 道・ 渠 网		32	1777							
中 田	渠 道・ 渠 网		1	3	5139	19	463	5	63	1	4
中 田	渠 道・ 渠 网		21	480		4	276				
中 田	渠 道・ 渠 网		2	20	31	481					
中 田	渠 道・ 渠 网		18	498		6	381				
中 田	渠 道・ 渠 网		12	3804		2	12				
中 田	渠 道・ 渠 网		12	427	1	3					
中 田	渠 道・ 渠 网		25	1119							
中 田	渠 道・ 渠 网		63	3408		7	409	2	9		
中 田	渠 道・ 渠 网		18	920							
中 田	渠 道・ 渠 网		21	745	1	155	1	16			
中 田	渠 道・ 渠 网		13	517							
中 田	渠 道・ 渠 网		49	2987	6	272					
中 田	渠 道・ 渠 网		11	414							
中 田	渠 道・ 渠 网		1	19	1	49					
中 田	渠 道・ 渠 网		41	1706	1	16	1	1	9	1	3
中 田	渠 道・ 渠 网		54	3172	1	73	1	143		2	44
中 田	渠 道・ 渠 网		13	655		3	50			5	176
中 田	渠 道・ 渠 网		21	558		1	24			15	338
中 田	渠 道・ 渠 网		2	132						6	338
中 田	渠 道・ 渠 网		13	733						13	333
中 田	渠 道・ 渠 网		1	763	5	2766	1	192	3	120	
中 田	渠 道・ 渠 网		5	164							
中 田	渠 道・ 渠 网		5	563		10	41				
中 田	渠 道・ 渠 网		6	398							
中 田	渠 道・ 渠 网		12	575							
中 田	渠 道・ 渠 网		16	441	9	24	62	375	13	24	4
中 田	渠 道・ 渠 网		15	907			2	260			
中 田	渠 道・ 渠 网		17	679							
中 田	渠 道・ 渠 网		1	16							
中 田	渠 道・ 渠 网		6	188							
中 田	渠 道・ 渠 网										
		第二次測量						土 坡			
		5	3	74	7	8	6	9	11	14	17
國 差	渠 道・ 渠 网		8	108	1	2		1	1	3	12
國 差	渠 道・ 渠 网		7	169						0	0
國 差	渠 道・ 渠 网		3	205						3	286
國 差	渠 道・ 渠 网		5	59	2	7	1	27		14	222
國 差	渠 道・ 渠 网		7	156						1	27
國 差	渠 道・ 渠 网		5	199						7	249
國 差	渠 道・ 渠 网		1	119						1	119
國 差	渠 道・ 渠 网		1	5	21	545	2	8	1	51	1
國 差	渠 道・ 渠 网		8	467		4	122		10	132	2
國 差	渠 道・ 渠 网		9	425		1	5		10	55	2
國 差	渠 道・ 渠 网		6	136						15	15
國 差	渠 道・ 渠 网		21	973						6	136
國 差	渠 道・ 渠 网		33	1276	3	198		3	22	1	74
國 差	渠 道・ 渠 网		37	1176	1	5	1	2			
國 差	渠 道・ 渠 网		30	670			1	7			
國 差	渠 道・ 渠 网		32	1777							
國 差	渠 道・ 渠 网		1	3	5139	19	463	5	63	1	4
國 差	渠 道・ 渠 网		21	480		4	276				
國 差	渠 道・ 渠 网		2	20	31	481					
國 差	渠 道・ 渠 网		18	498		6	381				
國 差	渠 道・ 渠 网		12	3804		2	12				
國 差	渠 道・ 渠 网		12	427	1	3					
國 差	渠 道・ 渠 网		25	1119							
國 差	渠 道・ 渠 网		63	3408	7	409	2	9			
國 差	渠 道・ 渠 网		18	920							
國 差	渠 道・ 渠 网		21	745	1	155	1	16			
國 差	渠 道・ 渠 网		13	517							
國 差	渠 道・ 渠 网		49	2987	6	272					
國 差	渠 道・ 渠 网		11	414							
國 差	渠 道・ 渠 网		1	19	1	49					
國 差	渠 道・ 渠 网		41	1706	1	16	1	1	9	1	3
國 差	渠 道・ 渠 网		54	3172	1	73	1	143		2	44
國 差	渠 道・ 渠 网		13	655		3	50			5	176
國 差	渠 道・ 渠 网		21	558		1	24			15	338
國 差	渠 道・ 渠 网		2	132						6	338
國 差	渠 道・ 渠 网		13	733						13	333
國 差	渠 道・ 渠 网		1	763	5	2766	1	192	3	120	
國 差	渠 道・ 渠 网		5	164							
國 差	渠 道・ 渠 网		5	563		10	41				
國 差	渠 道・ 渠 网		6	398							
國 差	渠 道・ 渠 网		12	575							
國 差	渠 道・ 渠 网		16	441	9	24	62	375	13	24	4
國 差	渠 道・ 渠 网		15	907			2	260			
國 差	渠 道・ 渠 网		17	679							
國 差	渠 道・ 渠 网		1	16							
國 差	渠 道・ 渠 网		1	16							
國 差	渠 道・ 渠 网		6	188							

財政系		177件計上		8		491		4		116		2		12		1		3	
直営系		万円換算		10		2003		1		8		4		120		1		43	
直営系		直営自社販売		34		2003		6		162		6		1033		1		42	
直営系		直営卸売		6		162		1		31		1		120		1		43	
直営系		その他		26		641		1		9		363		6		1033		0	
直営系		輸入品		3		69		26		72		23		6		120		0	
直営系		輸出品		3		69		17		694		23		6		120		0	
直営系		その他		1		69		43		2270		29		6		344		0	
直営系		機械		1		61		3228		5		71		5		11		310	
直営系		工具		1		62		1059		1		152		6		205		1	
直営系		火薬		1		64		3308		1		152		6		33		1	
直営系		火薬		1		37		1845		1		14		476		2		19	
直営系		火薬		1		11		967		1		107		1		34		1	
直営系		火薬		2		182		35		1194		1		2		4		107	
直営系		火薬		1		7		86		2		6		1		77		1	
直営系		小物		1		3		312		7		656		1		19		1	
直営系		工具		2		15		1228		1		19		1		25		1	
直営系		工具		2		19		1068		1		25		1		34		1	
直営系		工具		3		7		1177		3		244		1		150		1	
直営系		工具		4		7		1177		3		1		150		1		1111	
直営系		工具		5		9		1644		1		175		1		77		9	
直営系		工具		6		27		1859		1		1091		1		14		1091	
直営系		工具		7		14		153		1		153		1		153		3	
直営系		工具		8		2		126		1		229		1		229		2	
直営系		工具		9		3		20966		1		15		40		1		59	
直営系		工具		10		15		16966		1		66		6		126		3	
直営系		工具		11		51		2721		1		185		1		7		522	
直営系		工具		12		2		185		1		1575		1		82		3	
直営系		工具		13		3		387		1		5		248		1		387	
直営系		工具		14		3		26		1866		2		258		1		258	
直営系		工具		15		3		698		1		698		1		698		1	
直営系		工具		16		7		522		1		44		1		44		1	
直営系		工具		17		22		1514		1		41		703		3		33	
直営系		工具		18		8		1379		4		41		39		1		703	
直営系		工具		19		5		50		348		9		91		60		77	
直営系		工具		20		14		457		950		9		616		59		1163	
直営系		工具		21		1		49		5047		1		541		1		258	
直営系		工具		22		1		321		321		1		321		1		47	
直営系		工具		23		1		61		17243		1		61		321		3	
直営系		工具		24		1		15		1939		1		87		14		233	
直営系		工具		25		12		557		3		41		39		703		3	
直営系		工具		26		5		1059		5		41		39		1		703	
直営系		工具		27		6		1059		5		1059		5		1059		5	
直営系		工具		28		7		42794		9		1163		4		193		54	
直営系		工具		29		8		474		9545		1		193		77		220	
直営系		工具		30		9		1652		474		9545		5		193		418	
直営系		工具		31		10		42794		9		616		59		1163		5	
直営系																			

米利のを留め、右側は黒田(B)を表す。

第14章 近世土地主の農業統計表 (1)

第15表 近世主坑出主謂物集計表 (2)

第三章 まとめ

苗代川系陶器の変遷と年代的位置づけについて (第3表・第14図)

第二章第4節で述べたように、八幡遺跡からは苗代川系の陶器と判断される遺物が多量に出土した。器種ごとの細別案は第3表のとおりであり、個別の特徴はそこに記したが、ここではそれら諸特徴の比較から導き出される、1：同一器種内における前後関係、2：異なる器種間のセット関係、について検討し、出土状況などをふまえた3：年代的位置づけの推定を試みることとする。

壺 (244・245)

壺については2つに分類した。内面に当て具痕を残す薄手の壺1と、やや厚手の壺2である。さらに重ね焼きの方法についてみると、口縁部上面を平滑にナデて貝目を残す壺1と、刷毛目状の調整を施したのちに(以下「刷毛目」と略す)釉薬を粗く拭き取りコマ目を残す壺2となる。

甕 (200~216)

甕についてはまず、口縁部を強く折り返し胴部の張る甕1・2と、口縁部が逆し字形を呈し半胴甕の形態をとる甕3~6、その中間形態(甘酒半胴など)ともいえる甕7・8の3グループに大別される。

甕1・2は基本的に薄手で甕1には当て具痕が残る。口縁部上面は平滑にナデて貝目を残す。ただし205については刷毛目のち釉薬を粗く拭き取っており、やや様相を異にする。甕7との関係で捉えるべきかもしれない。

甕3~6は口縁部の断面形態をはじめとして共通する部分が多い。ただし器壁が薄い甕3とやや厚手の甕4~6に分けられるほか、甕3のみに貝目と体部外面の装飾(櫛描き)などが見られる。甕5の一部にはコマ目が明瞭に認められる。甕6を除き縁帯をつまんで波立たせるという独特の整形を行うが、甕3は波長が不規則で、甕4・5は整っている(5は整いすぎている印象さえ受ける)。甕7・8はどちらも厚手で、口縁部上面は刷毛目のち釉薬を粗く拭き取る。甕7の一部にはコマ目の可能性がある目積み痕が見られる。

擂鉢 (217~225)

渡辺芳郎氏によって詳細に論じられており(渡辺2000b)、新たな知見を付け加えうるものではないが、口縁部が比較的柔らかく屈曲する擂鉢1・2と、口縁部が逆し字状を呈する擂鉢4、その他の擂鉢3・5に大別できる。擂鉢1~3は口縁部上面を平滑にナデて貝目を残すが、擂鉢2の一部はコマ目を有する。擂鉢4・5は刷毛目のち釉薬を粗く拭き取り、4にはコマ目が見られる。擂鉢1~3は口径と底径の差が大きく、擂鉢4・5は小さい。

鉢 (226~228)

基本的に擂鉢と様相を同じくするが、特有の形態も存在する。鉢1は口径・底径の差が極めて小さく、桶のような形状を呈する。口縁部上面は平滑にナデて貝目を残す。鉢6は鉢特有ではなく、この形態に通じる擂鉢の存在する可能性は高い。やはり貝目を有する。

植木鉢 (229・230)

数は少ないが2分類できる。植木鉢1は内外を平滑にナデて貝目を残す。植木鉢2は刷毛目状の

粗いナデを施している。

土瓶については良好な資料が少ないため、今回の考察では取り上げない。

以上について整理すると次のような。

Aグループ：口縁部上面=平滑なナデ(釉薬を拭き取るものも一部あり)、目積み痕=貝目、体部=薄手で当て具痕残す

壺1、甕1・2・3、擂鉢1・2・3、鉢1・2・3・6、植木鉢1

Bグループ：口縁部上面=刷毛目のち釉薬の粗い拭き取り、目積み痕=コマ目、体部=厚手

壺2、甕4・5・6・7・8、擂鉢(2)・4・5、鉢(2)・4・5、植木鉢2

このように見ると、細分類の番号が概ね新旧を表しているようであり、全体としてAグループからBグループへと推移する可能性が高い。

すなわち口縁部上面の調整は、平滑なナデを行っていたものから、刷毛目のような調整痕を残し釉薬を粗く拭き取るように、重ね焼きの際の目積みは貝目からコマ目へと、器壁は叩き成形で薄手に仕上げていたものから厚手のものへと、それぞれほど足並みをそろえて変化したと想定される。他部位の調整についても口縁部ほど明瞭には言えないが、胴部内外面の丁寧なナデが粗い刷毛目状の調整へと変化していくようであり、大勢としては全体の造形が粗雑化していく流れを見出せるだろう。もちろん一器種が一系統の変遷をたどるとは限らず、特に甕における半胴甕は、甕3の形態にヴァリエーションが認められ、かつ出土量が非常に少ないと勘案すると、Aグループ終末頃に登場した新來の器形と考えたほうがよいと思われる。また擂鉢2・鉢2などにもA・Bグループ両者の要素が混在し、過渡期的様相を呈していると言える。

これに口縁部形態を含めた器形のシフトについては既に指摘されているところであるが(九州近世陶磁学会2000など)、その変化の時期をいつ頃と捉えるか、本遺跡においてヒントとなりそうな資料を探してみたい。

まず16世紀末～17世紀初頭頃の良好なセットと考えられる第二次調査井戸跡出土遺物の中に甕1が含まれている(第15図273)。次に近世の廐棄土坑と推定される第一次調査A区8号土坑からは甕1・2・3・5、擂鉢2・3、鉢4、植木鉢1、同じく一次A区14号土坑からも甕3、擂鉢2・3、鉢1、二次3号土坑から甕2、擂鉢4、鉢4、二次19号土坑から甕3、鉢1・6、植木鉢1、近代の瓦溜りと推定される一次A区23号土坑から甕8、防空壕と推定される一次A区44号土坑から甕7、さらにコンクリートの多量に出土した搅乱から擂鉢5が出土している。井戸跡以外は良好な出土状況とは言いづらいが、17世紀代の陶器も若干含む一次A区8・14号土坑から甕3が、近代の遺物とともに甕7・8、擂鉢5が出土していることに注意しておく。

次に参考資料として肥前系の壺・甕生産についてみると、寛永年間(17世紀中頃)に同心円当て具痕から格子目の当て具痕へと変化するという(東中川1987など)。また文献史料からは、享保16年(1731)頃に薩摩藩の保護經營が中止されたことによる苗代川系の窯の一時的衰退が起こったとされ

ており(田沢・小山1941)、こうした点からするとA・Bグループの転換期を18世紀前半頃に当てることができそうである。

ただし貝目技法については橋口亘・渡辺芳郎両氏による諸研究において明らかにされているよう、19世紀の記年銘資料にも見え、さらには現代の陶工にまで受け継がれているという(橋口2001など)。よって出土陶片に貝目がついていたことのみで、その資料の時期を問うことは困難であるが、資料に内在する各属性および共伴遺物の検討をふまえれば、ある程度の幅の年代概を導き出せるようである。

以上、乏しい資料をもとに拙い論を述べてきたが、多くの問題も残されている。まず方法論について言うならば、本来的には型式学的な検討に基づいて構築された組列を、一括資料における共伴関係に照らし合わせ、その妥当性を検証すべきところである。しかし本遺跡においては、切り合い関係にある遺構が多く(特に近世遺構について)、その上圧倒的多数の遺物が一次A区5号土坑より出土する一方、ピットからはほとんど出土しないなど量にはばつきがあり、一括遺物に恵まれなかつたという事情がある。このため厳密な手順を踏むことは望めなかつた。

また肝心の型式分類についても、苗代川系陶器はヴァリエーションが豊富であり、出土遺物の全器形すら包括した分類案とはなりえなかつた。さらに都城に存在し苗代川系の影響を受けた諸窯(宮丸窯など)の様相が明らかでなく、それらの抽出もまったく行えていない。

よって一つの仮説を提示するにとどまらざるを得ないが、今後の調査における良好な一括資料の発見を待つて、より深く論じていかなければならぬだろう。

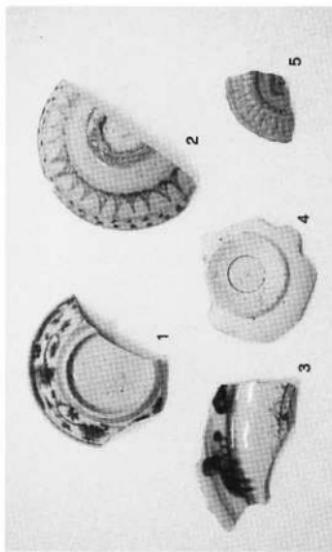
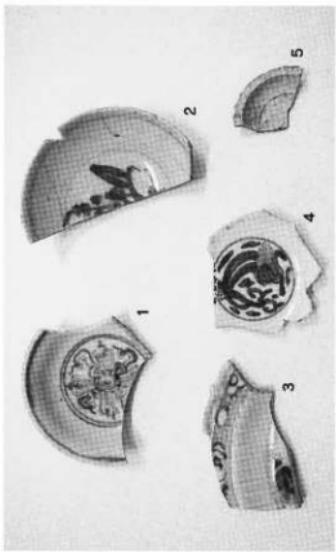
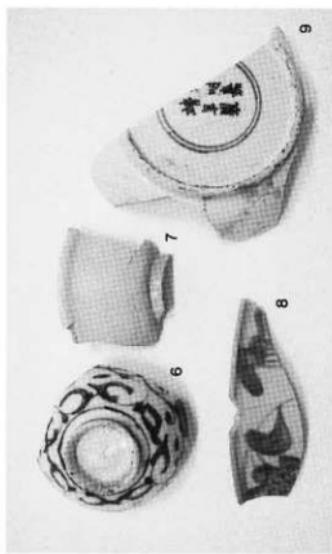
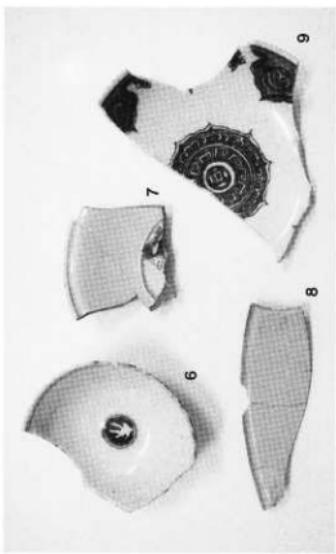
参考文献

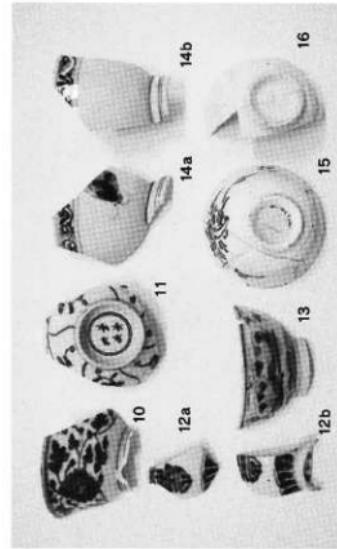
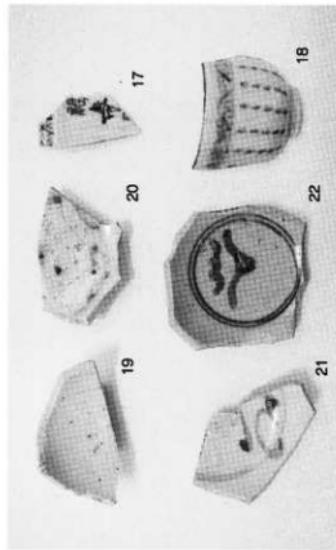
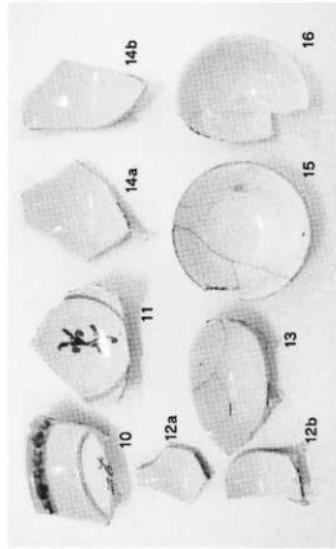
- 上杉彰記・出口浩二 2000 「串木野羽島窯探集陶器片についての一考察」『からから』No.8 鹿児島陶磁研究会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 江戸遺跡研究会 1990 「江戸の陶磁器」江戸遺跡研究会第3回大会
- 江戸出土陶磁上巻研究グループ 1992 「シンポジウム 江戸出土の陶磁器・土器の諸問題」
- 大分県立先哲史料館 2001 「大友府内 よみがえる中世開港都市」
- 大橋康二 1987 「16~17世紀における日本出土の中国磁器について」『東アジアの考古と歴史』下(岡崎敬先生退官記念論集) 詞朋舎出版
- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1994 「古伊万里の文様」理工学社
- 大橋康二 1995 「九州における明末~清時代の中州磁器」『青山考古』第12号 青山考古学会
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗 並の分類と年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」
- 九州近世陶磁学会 2001 「国内出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる」第11回九州近世陶磁学会資料
- 九州近世陶磁学会 2002 「国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる」第12回九州近世陶磁学会資料
- 小谷誠郷土館 2001 「中日陶磁器国際交流シンポジウム 明末清初の海外貿易(津州窯を中心とした)」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 「柴田コレクション(1)」

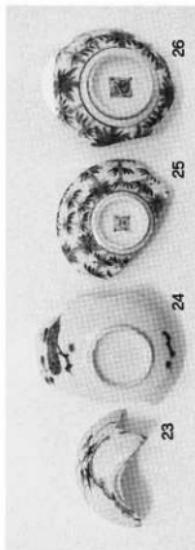
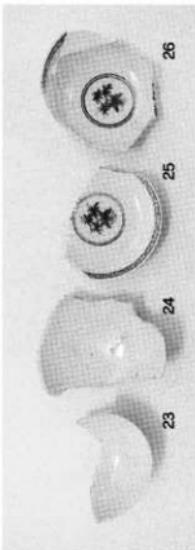
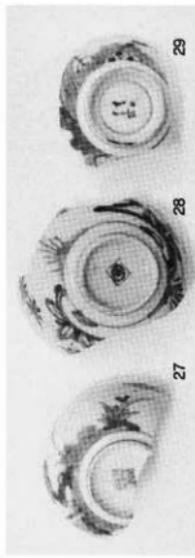
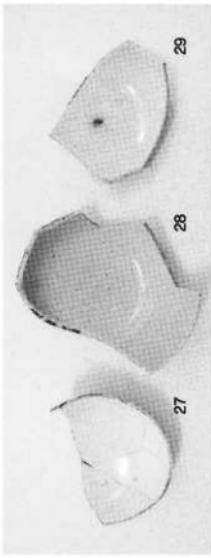
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 「柴田コレクション(II)」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 「柴田コレクション(VI)」
- 清水慶一 1993 「初期洋風建築物の遺跡について」「遺跡にみる幕末から明治」江戸遺跡研究会第6回大会・発表要旨 江戸遺跡研究会
- 下義 弘 1995 「元立院窯跡遺跡」始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 始良町教育委員会
- 織穂削城郭研究会 2000 「織豊城郭」第7号
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1993 「新宿区内藤町遺跡を見る 江戸のやきものと暮らし」
- 新宿区西谷三丁目遺跡調査会 1991 「江戸遺跡出土のやきもの分類(兼凡例)」「西谷三丁目遺跡」別冊
- 岡 一之 1995 「山元窯跡」加治木町埋蔵文化財調査報告書1 加治木町教育委員会
- 岡 一之・大庭洋見・川畠兼孝 2001 「弥勒窯跡」加治木町埋蔵文化財調査報告書3 加治木町教育委員会
- 岡 一之・前田順子 2002 「龍門司焼古窯周辺探集の陶片について 18世紀前半の龍門司焼」「からから」No.12 鹿児島陶磁器研究会
- 田沢金吾・小山富士夫 1941 「薩摩焼の研究」東洋陶磁研究所
- 谷川章雄・波多野純・山本英二・池田悦夫 1995 「東京都新宿区 市谷本村町遺跡」新宿区市谷本村町遺跡調査会
- 中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真隣社
- 出口 浩・濱川まゆみ 1992 「福昌寺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 鹿児島市教育委員会
- 出口 浩 1999 「江戸前期貝付瓦押模1例」「からから」No.3 鹿児島陶磁器研究会
- 出口 浩二 2000 「貝付瓦押模と釉瓦の再検討(1)」「からから」No.7 鹿児島陶磁器研究会
- 出口 浩二 2002 「苗代川南京山窑小考」「からから」No.12 鹿児島陶磁器研究会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊
- 豊島区遺跡調査会 1998 「陶磁器・土器分類・計測基準」「伝巾・上高上前II」別冊
- 成瀬晃司・寺島孝一 1993 「東京区学校本館の基礎構造」「遺跡にみる幕末から明治」江戸遺跡研究会第6回大会・発表要旨 江戸遺跡研究会
- 西田宏子・大橋康二監修 1988 「古伊万里」別冊太陽No.63 平凡社
- 横口 亘 1999 「薩摩出十の清朝磁器 琉球貢物の日本本土流入」『貿易陶磁研究』第19号 日本貿易陶磁研究会
- 横口 亘 2001 「薩摩焼貝口・コマ口考(1)」「からから」No.9 鹿児島陶磁器研究会
- 横口 亘・上田 耕・若松卓弘 2000 「串本町市羽島「巣蕨が平」表面採取の陶器片」「からから」No.7 鹿児島陶磁器研究会
- 東中川忠美 1987 「肥前ににおける近世の大変」「東アジアの考古と歴史」下(岡崎敬先生退官記念論集) 同朋舎出版
- 福原茂樹 1999 「広島城遺跡 基町高校グラウンド地点」財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第3集 財団法人広島市文化財団
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996 「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器」「東京考古」14 東京考古談話会
- 前 幸男 2001 「平佐新窯出土遺物について」「からから」No.10 鹿児島陶磁器研究会
- 横山哲英・米澤英昭 1995 「久玉遺跡 第6次調査」都城市文化財調査報告書第32集 都城市教育委員会
- 横山哲英・重永卓爾・兒玉三郎 1997 「都城市中央東部地区 史跡・旧街路等調査報告書」都城市文化財調査報告書第41集 宮崎県都城市教育委員会
- 吉永正史・出口 浩・宮里祐子 2001 「大籠遺跡B地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 鹿児島市教育委員会
- 渡辺芳郎 2000 a 「宋胡録と薩摩焼宋胡録等 考古学資料の検討」「メコン流域の文明化に関する考古学的研究」文部省科学研 研究費研究成果報告書(代文 新田栄治)
- 渡辺芳郎 2000 b 「近世薩摩焼捲鉢考」「鹿児島考古」第34号 鹿児島県考古学会
- 渡辺芳郎 2000 c 「貝目再考」「からから」No.8 鹿児島陶磁器研究会

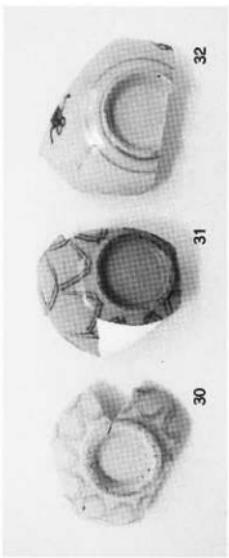
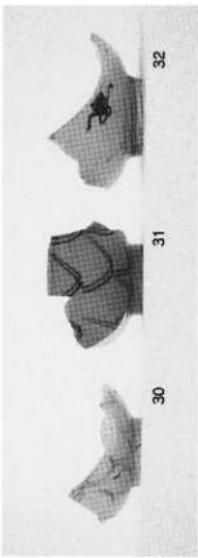
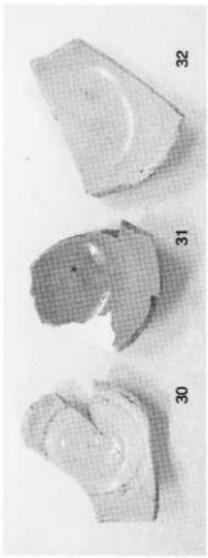
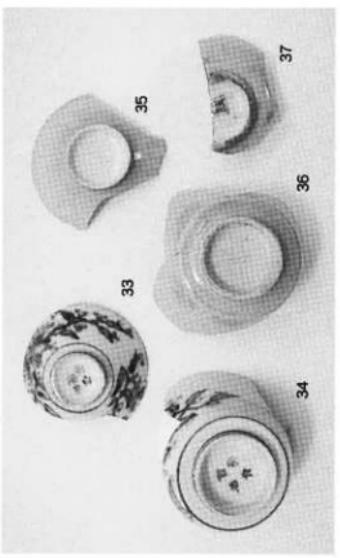
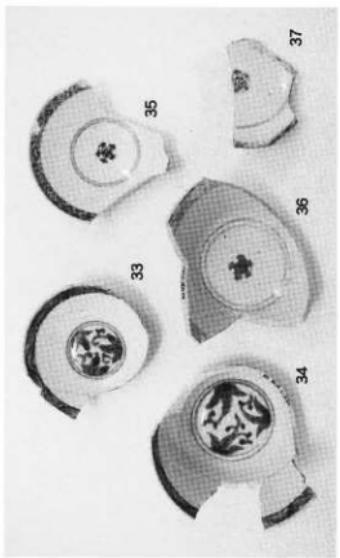
報告書抄録

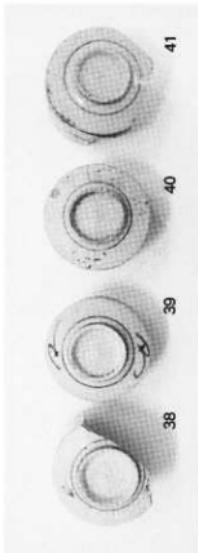
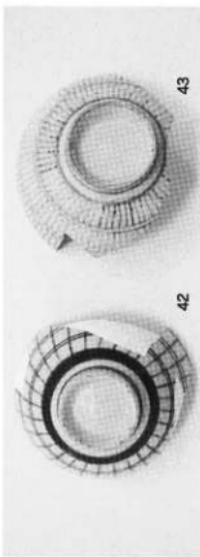
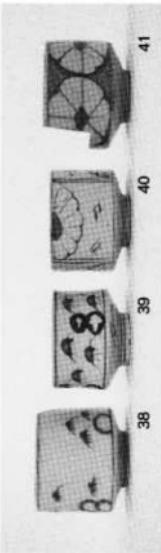
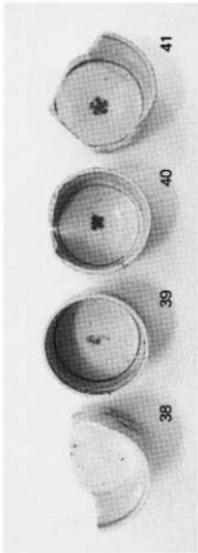
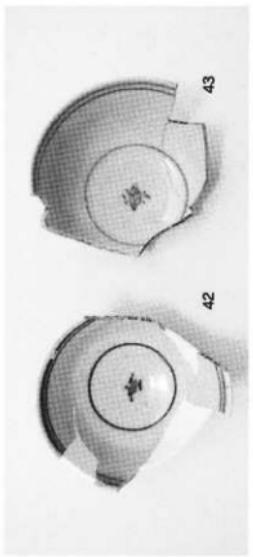
フリガナ	ハチマンイセキ							
書名	八幡遺跡							
副書名	都城裁判所合同庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第70集							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町大字下那珂4019番地							
編集担当者	永友良典 南正覚雅士 堀田孝博							
発行年月日	2003年3月7日							
フリガナ	フリガナ	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ハチマンイセキ	ミヤザキケン	45202		31度 43分 3秒	131度 3分 45秒	(一次調査) 2000.12.18 2001.3.30 (二次調査) 2001.4.19 2001.7.30	(一次調査) 800m ² (二次調査) 1,200m ²	都城裁判所 合同庁舎建 て替え工事
八幡遺跡	宮崎県 ミヤコノジョウシ 都城市 ハチマンヂョウ 八幡町 ニガイク 2街区 サンゴウチナイ 3号地内							
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
		近世	・井戸跡 ・土坑 ・溝状遺構	・陶磁器 (中国産・国産) ・瓦 ・土器 ・金属製品	調査地は都城島 津家の家老屋敷跡 に比定される。 豊富な遺物が出土し、中でも井戸跡 出土遺物は16世紀 末～17世紀初頭頃 の良好なセットと 考えられる。			
		近代	・建物跡 ・土坑 (防空壕など) ・道路状遺構 ・溝状遺構	・陶磁器 ・瓦 ・金属製品 ・ガラス製品	出土遺物は16世紀 末～17世紀初頭頃 の良好なセットと 考えられる。 遺構では造り出しの階段を有する 土坑が注目される。			

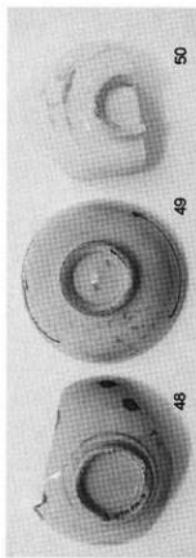
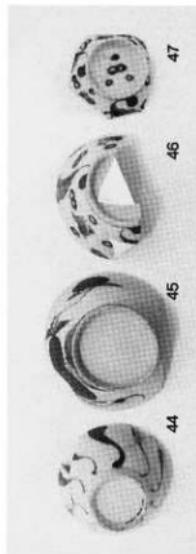
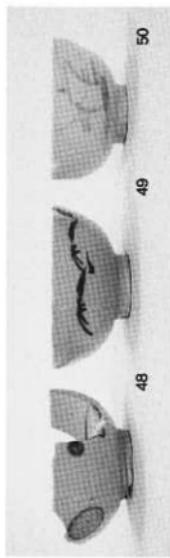
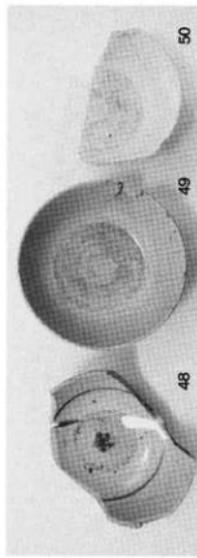
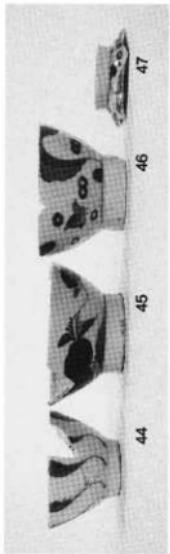
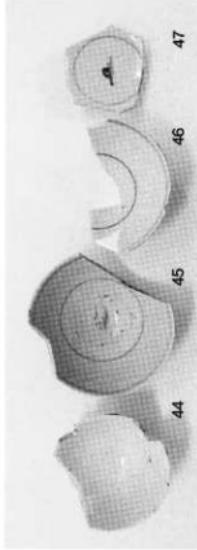


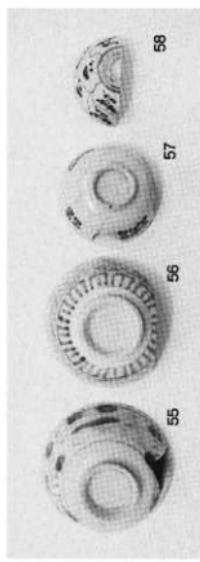
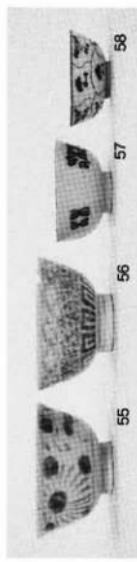
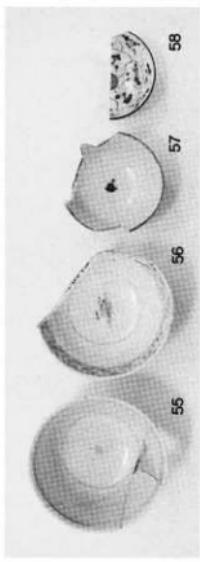
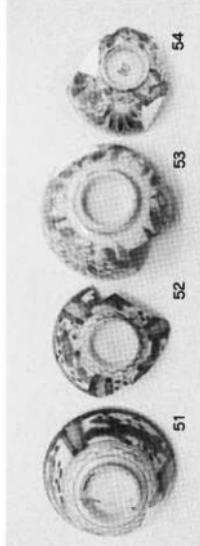
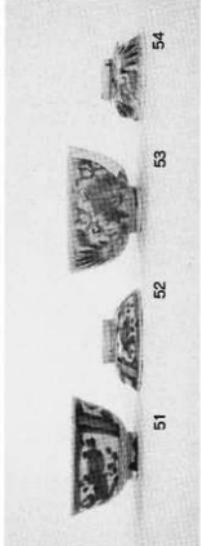
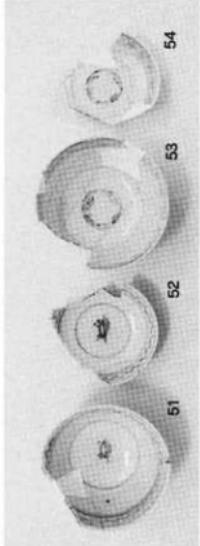


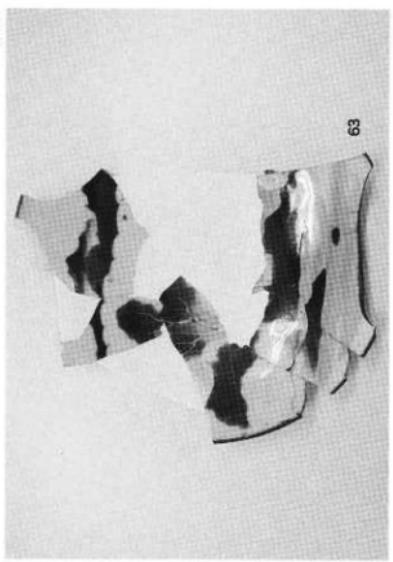




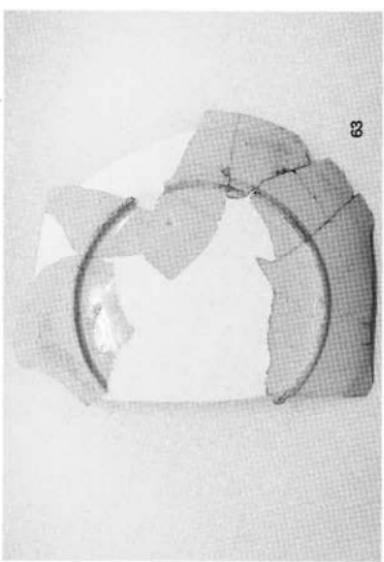




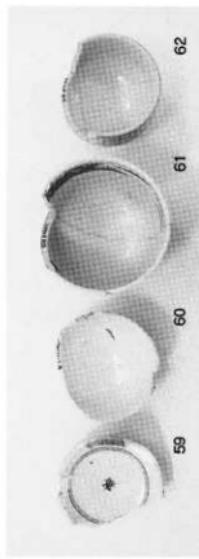




63



63



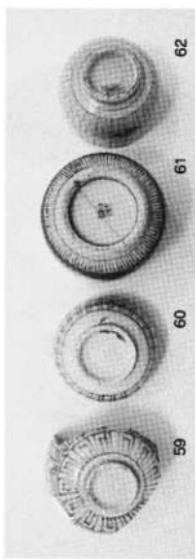
59 60

61 62



59 60

61 62

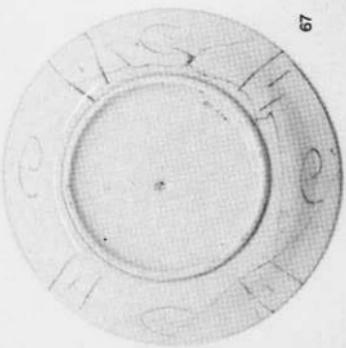


59 60

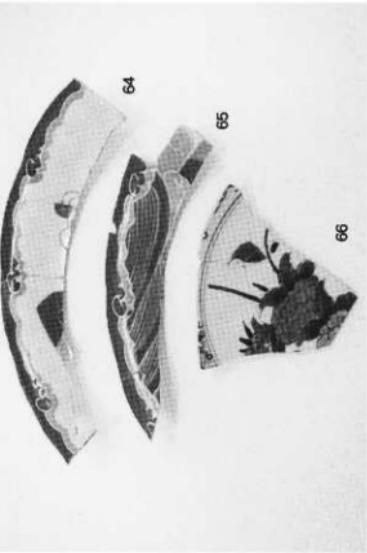
61 62



67



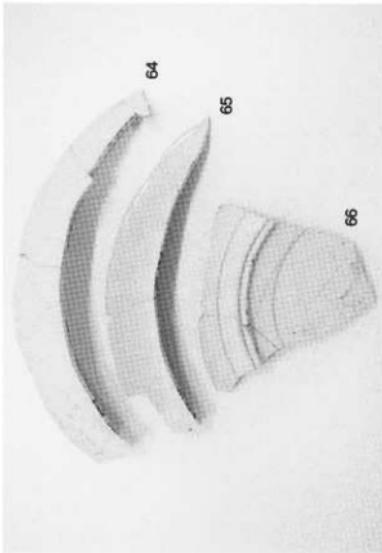
68



64

65

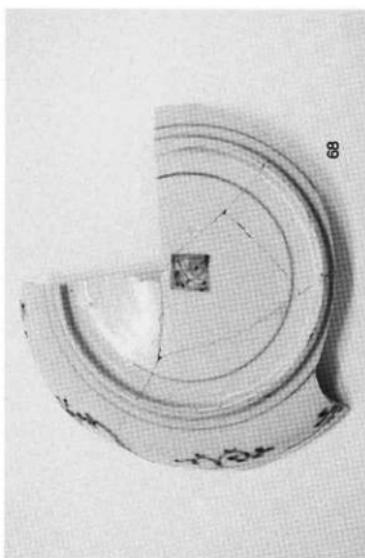
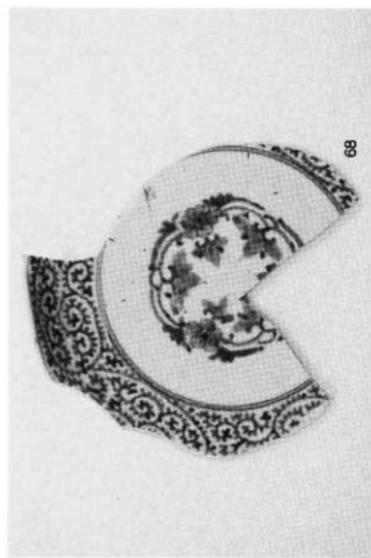
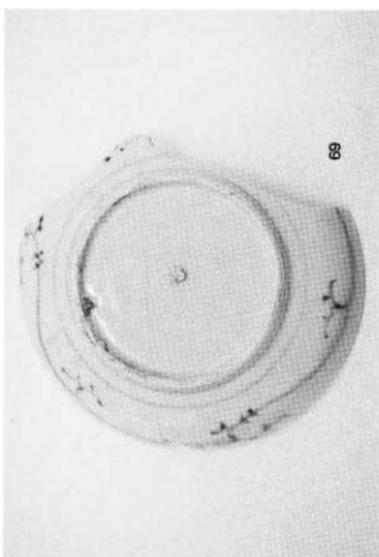
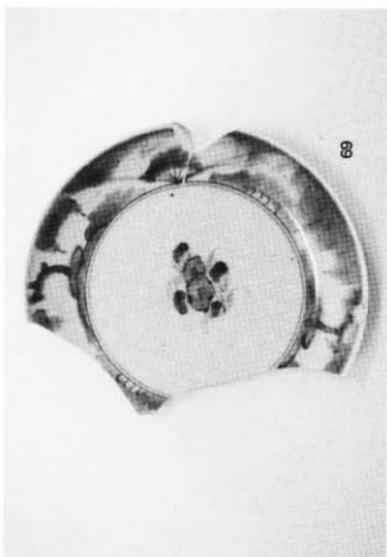
66

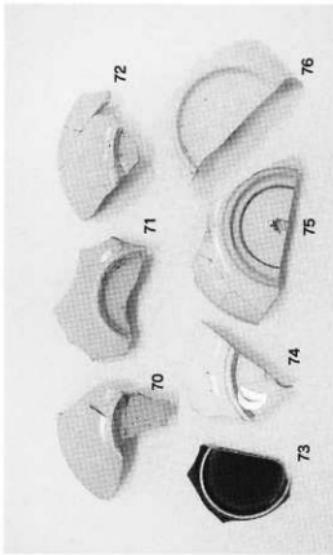
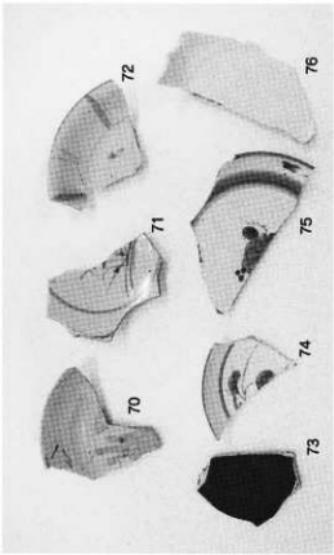
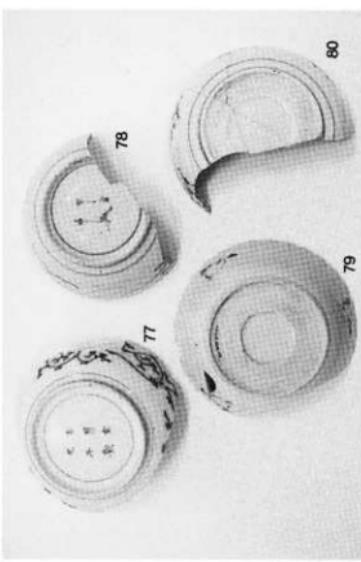
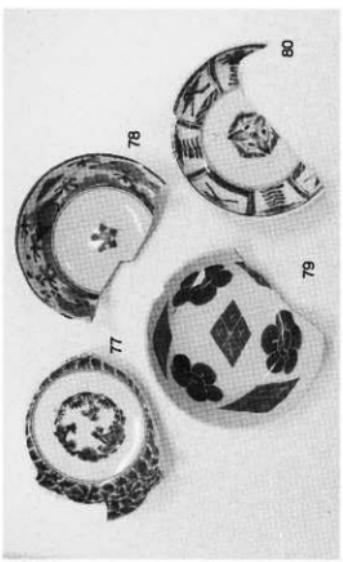


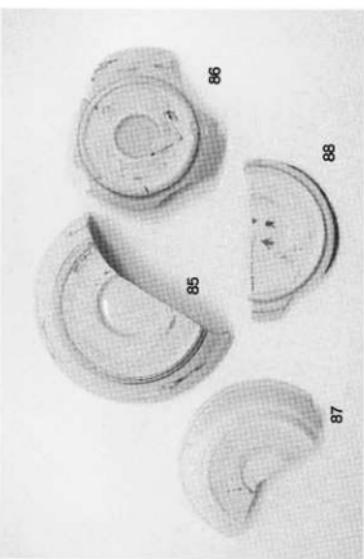
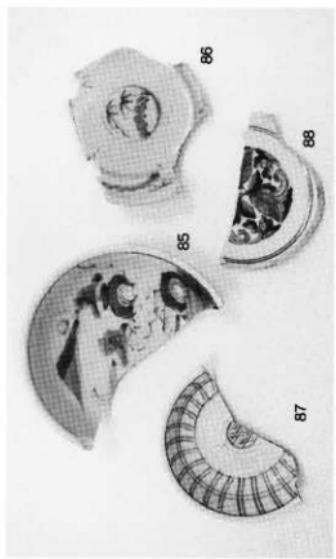
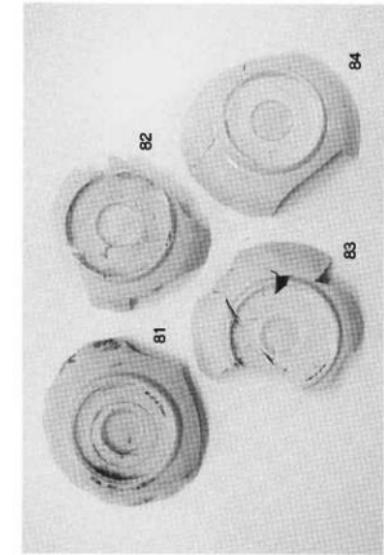
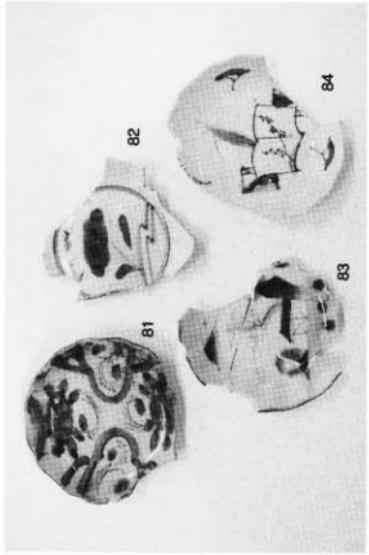
64

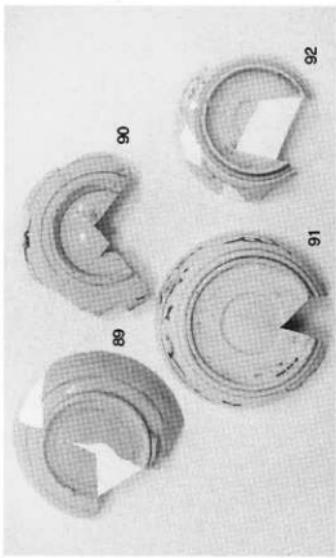
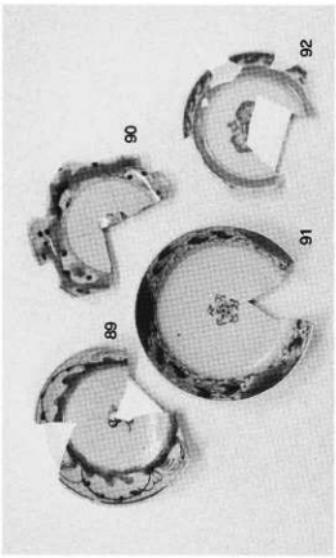
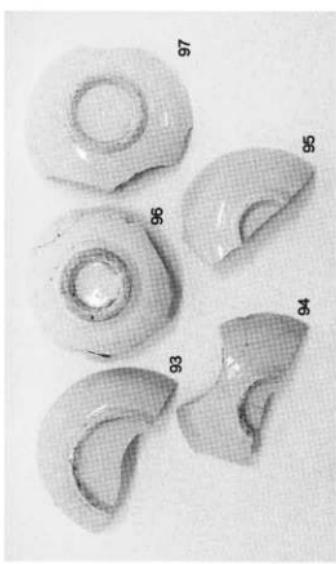
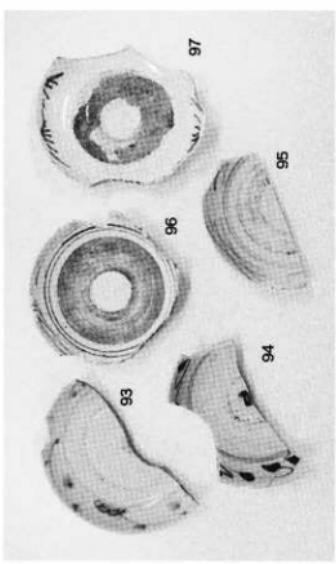
65

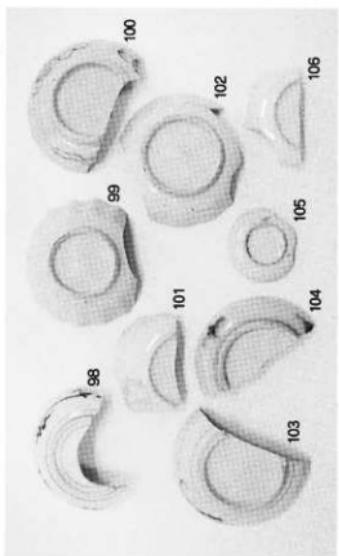
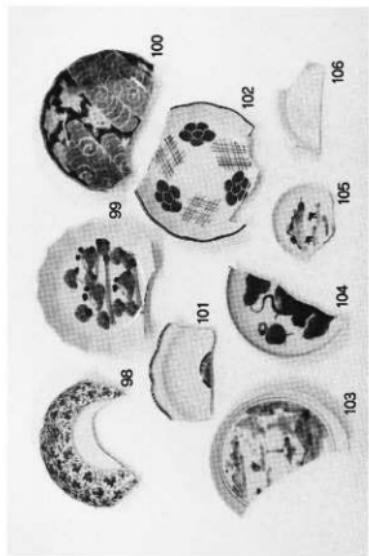
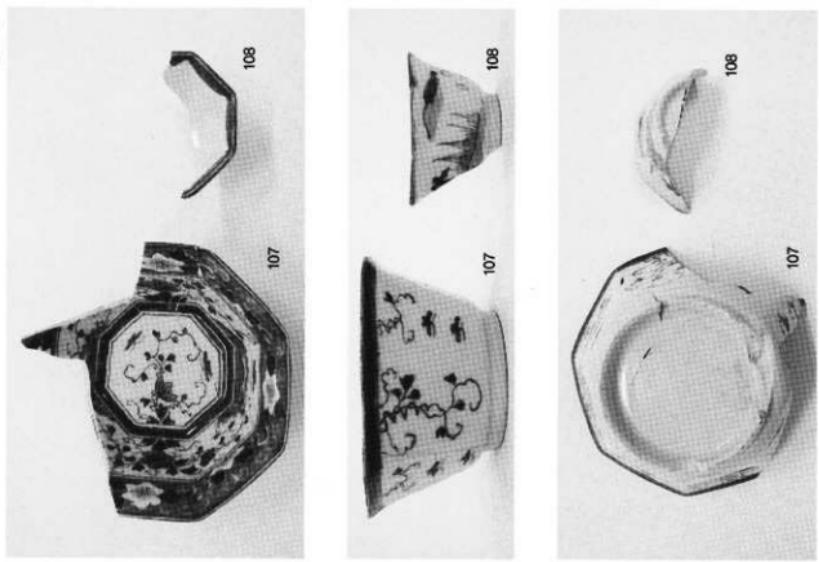
66

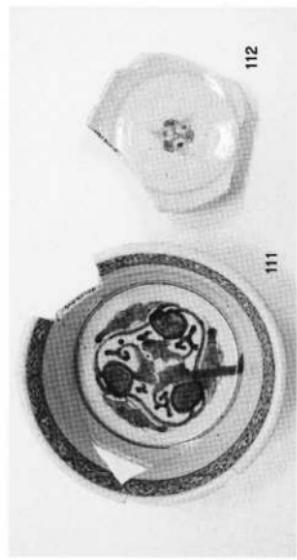




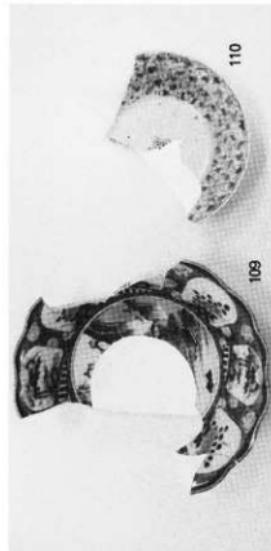








112



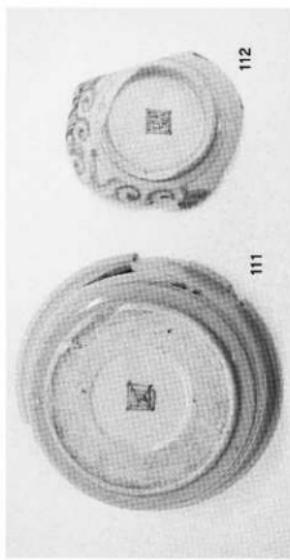
109



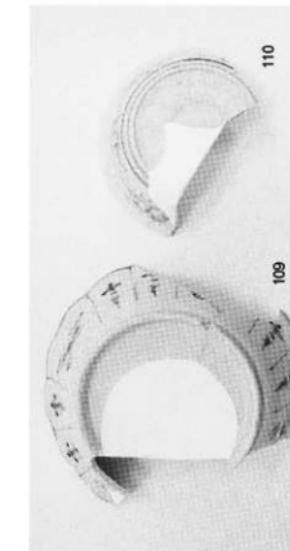
111



110



112



111

